

PROJECT HEALINGOOD THouser 〈完結済〉

TAMZET

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プリキュアになりたての少女・花寺のどかは、ひよんな事から世界的な大企業であるZAI A エンタープライズの社長・天津垓と出会う。

その夢の強さを見込まれザイアスペックを託されたのどかの生活は、その日より一変してしまう。また、プリキュアの力を手に入れた天津は、ゼロワンを超える究極の力を手にしようとしていた。

一方、その裏では、世界を巡るとある人物の巨大な陰謀が渦を巻く。これは再生の騎士・ヒーリングツドサウザーを巡る3週間の物語。

※コメントや誤字脱字の発見等ありましたら、お気軽にご連絡ください。更新は平日は17時頃、休日は朝の10時頃となります。

目 次

E p i s o d e 1 : [力と優しさの邂逅]	1
E p i s o d e 2 : [変わり始めた2人]	1
E p i s o d e 3 : [ヒーリングサウザーの弱点]	1
E p i s o d e 4 : [動き出す影]	1
E p i s o d e 5 : [のどかのザイアスペック]	1
E p i s o d e 6 : [爆ぜる水流と墮ちた星]	1
E p i s o d e 7 : [最後の二人]	1
E p i s o d e 8 : [黄金の騎士]	1
E p i s o d e 9 : [さよなら滅病先生]	1
E p i s o d e 1 0 : [皆既世食]	1
E p i s o d e 1 1 : [全ての力]	1

148 137 122 101 84 65 49 36 21 10 1

E p i S o d e 1 : 力と優しさの邂逅

E p i S o d e 1 : F r o m 2 1 t o 1

少女、キュアグレースこと花寺 のどかは困惑していた。

あの巨大な怪物は何だったのか、今自分が身に纏っているこの装いは何なのか、キュアグレースとは何なのか。数秒前、それら全ては、戦いの中で忘却の彼方に運ばれていた。

ラビリンとの協力でメガビヨーゲンなる怪物を倒した後も、まだグレースの心臓の高鳴りは治らなかつた。赤茶色の病原霧はもう殆ど見えず、萎れた草木も顔をもたげ始めている。

(私、やつたんだ……本当に、私が……)

深呼吸し、息を整えようとする彼女の前に、『それ』は突然姿を現した。

グレースと20mほどの距離を挟み、ゆっくり歩を進めてくる『それ』。

「あれ、なに?」

思考が口をついて出る。それほどに、その存在は酷く彼女の常識を外れていた。

金色の鎧を身に纏つた、人型のカブトムシ。少女の抱いた第一印象はそれであった。頭に生えた五つのツノ、人型の全身は金色に光り輝き、陽光を眩いばかりに反射している。

無機質にこちらを見つめる、大きな紫色の目。その奥からくぐもつた声がする。

「君が何者か、さつきの怪物が何なのか、聞きたい事は山ほどある。だが、まずは我がZ A I A エンタープライズが管理する敷地内での破壊活動を止めてもらわなくてはね」

若い男の人の声だ。落ち着いた、気品に満ち溢れた声。

しかし、仮面の奥から漂う不気味な気配は、グレースの四肢を強張らせるには十分であつた。そして、それを敵意と知るには、彼女の心はあまりにも初心であつた。

「この人……さつきのビヨーゲンズって奴の仲間?」

「違う……はずラビ。けど、なんだか危険な香りがするラビ」

ヒーリングステッキにくつついているラビリンも、仮面の騎士が危険だと感じているらしい。

草の根を踏み分け進み来る金色の騎士との距離は、既に5m程までに詰まっていた。どちらかが踏み込めば、射程距離に到達する。

「仮面ライダーサウザー。私の強さは、桁外れだ」

瞬間、金色の騎士……サウザーが動いた。反射的に突き出したグレースの右拳に、騎士の左肘が激突する。衝撃は山の木々を揺らし、草木を震えさせた。両者の攻撃は拮抗し、生まれ出た力の奔流は二人の間の地面を大きく抉る。膠着状態を破り、距離を取つたのはサウザーだ。

「この固さ、人肌のものではないな。だが、マギアとも違う。油断はするべきではないか」

どこからともなく金色の手槍・サウザンドジャッカーを取り出し、腰を低く構えるサウザー。

「アイツの強さ、メガビヨーゲン以上ラビ！ともかく、ラテ様をお守りするためにも、ここは覚悟を決めるしかないラビ！」

「うん、分かつた！」

言うや否や、グレースはサウザーに向けて跳んだ。

身体の軌跡は低い放物線を描き、真っ直ぐに突き出されるは、先の戦いでメガビヨーゲンを吹き飛ばした剛の拳。

勢いの乗つた、必殺の一撃は、しかし彼を数cm後退させるだけにとどまった。

「止められた!? プリキュアのパンチが?」

驚愕するグレース。その拳を払い除け、サウサーはサウザンドジャッカーによる突きの連続攻撃で彼女を責め立てる。

「どうしました？ 防御してばかりでは何も始まりませんよ」

急所を狙つて次々と繰り出されるサウサーの連撃を、グレースは防ぐだけで精一杯である。

「この人、強い……ッ!!」

「サウザーの連撃をここまで防ぎきる身体能力、ますますただの人間ではありませんね。何故Z A I Aの所有地を襲つたんです?」

「あなたこそ、どうして私たちを!?」

「この敷地は我がZ A I Aエンタープライズのもの。先程の惨状は、君が引き起したもののなのでしょう?」

「違う!私はそんな事してない!」

「そんな言い訳が信じられるとでもツ!」

勢いの乗つた突きの一撃が腹部に直撃し、グレースの身体が宙を舞う。かつて彼女が経験したどんな衝撃よりも、強く、激烈な衝撃。

彼女の身体は地に伏し……しかし、彼女は、間髪入れず立ち上がる。既に足が、身体が、頭が、逃げたいと訴えている。だが、彼女の心はそれを許さなかつた。

(ここで逃げるのは簡単だけど、それじゃダメ!絶対に助けるつて決めたんだから!)

ふらつきつつも構えをとるグレース。歪む視界の中でサウザー影が揺れ……気がついた時には、すぐ側にその金色の偉駆は在つた。直後、腹部を鋭い痛みが襲う。その痛みは、病院でされる注射に似ていた……実際は、痛みはそれの何倍にも凄まじいのだが。

サウザーの持つサウザンドジャッカーは桃色に染まり、再びグレスの胸元へとその穂先が向けられる。

「君達は確かに強かつた。しかし、このサウザーある限り、私の勝つ確率は1000%だ」

「ツ!?

サウザーサウザンドジャッカーのトリガーを引くや否や、その内に秘められた桃色のエネルギーの奔流が放たれる。紫の光線を象ったエネルギー波は、凄まじい速度で彼女の身体を通り抜けた。

『ジャッキング・ブレイク……・Z A I Aエンタープライズ』

崩れ落ちるグレースを背に、サウザーは勝利宣言とばかりに己のベルトに手をかける。

「あれ……身体が、軽い？」

「何ッ！」

それは両者にとつて予想外の展開であつた。グレースの体力は完全に、それこそメガビヨーゲンと戦う前の漲りをみせていたのだ。対してサウザーが放つたのは『必殺技』である。相手の持つプログラマイズキーの力を応用して放つ必殺の一撃……それを受けて無事でいるれるはずがない。

視線を以て牽制し合う両者。数秒の逡巡の果て、先に構えを解いたのは、サウザーの方であった。

「ふむ、なるほど……どうやら私は大きな勘違いをしていたようだ」ベルトに手をかけ、変身を解除するサウザー。解除された金色の鎧の内から現れたのは、白装束に身を包んだ男性であつた。

中肉中背、しかしその佇まいは彼が只者でない事を伝えている。

「白い、男の人？」

「すまなかつたね。君が襲撃犯だと勘違いしてしまつっていたようだ。是非お詫びをさせて欲しい」

「はあ……」

「私は天津 城。Z A I A エンタープライズの社長を務めている」

「ザイ、ア？」

「君の名前は？」

「私は……」

これが、Z A I A エンタープライズの社長である天津 城と、元・

病弱な少女の花寺 のどかの初対面であつた。

謎のワンちゃん……ラテの手当ても終わり、野山には真の平和が戻つた。その様子をガラス越しに眺められるZ A I A の休憩所に備えられたベンチに、のどかは腰を下ろしていた。

鳥達の騒ぎを聞きながら、膝の上で眠るラテの頭を撫ぜる。心地よい空気と快適な温度に当てられ、ラビリン達3人も眠りについているようだ。

病院の窓から眺めるしかなかつた豊かな緑、静かな街々。あれほどに恋い焦がれた、普通の日常が自分の肌に触れている事に、のどかは無上の幸福を感じていた。

とはいえ、今彼女の隣には、それを覆い隠して有り余るほどの非日常が座つていてる。

ふうっと短く息を吐くと、のどかは非日常……天津 峴の方へと向き直つた。

「あの、今日はありがとうございました。こんな休憩所まで用意してもらつて」

「せめてものお詫びといった所さ。Z A I A の所有地を怪物から守つてくれた君を、私は擊退しようとしてしまつた。これでも、1000%の謝罪には遠く及ばない」

「せ、せんパーセント……す、いですね」

「Z A I A の理念は全人類の幸福。その実現のためなら、私はいつだって、1000%以上の努力してみせる」

言つていることは冗談としか思えない程に壮大だが、天津さんの表情は真面目そのものだ。その目はどこかずっと先の未来を見ているようで、どこか寂しくなる。

会話が途切れ、2人の間には沈黙が訪れる。静かのは好きだが、沈黙は好きじゃない。話題を探すのどかは、ずっと気になつていていた事を質問してみる事にした。

「天津さんの……その、ザイアって、どんな事してるんですか？」

「Z A I A を知らないのか？まあ、ザイアスペックのコアターゲットではない子供が知らなくとも無理はないが……」

「ごめんなさい……私、今日この街に引っ越してきたばかりなんです」

天津さんは顎を手を当て、少し考える素振りを見せた。陽の光に照らされるその横顔は、神秘的でありながら、どこか自分の作った玩具を自慢しようとすると小学生のような幼さを帶びているような気もす

る。

やがて、のどか方に向き直った彼は、広げた掌を天に掲げ、話を始めた。

「Z A I A がしているのは、簡単に言えば人を助ける仕事さ」

「それって……お医者さん、とかですか？」

「そうだね。お医者さんも、Z A I A のテクノロジーを使う事はできる」

「どういうことですか？」

「我が Z A I A エンタープライズは、何かをしたくても力が無い人に、その力を授けるテクノロジーを開発している。例えば、お医者さんがしたいと思っても医療知識のない人間には、医療知識と手術のテクニックをあげる事ができる。今はザイアスペックがその代表例だが、ゆくゆくは義手や義足のような、身体機能を補助する装置の開発にも着手するつもりだ」

「なんだか……夢みたいな話ですね」

「そうだね。けれど、みんなの夢を夢のまま終わらせるのは、非常にもつたいないとは思わないか」

天津のこの言葉は、その日一日の中で一番、のどかの心を大きく揺さぶつた。

あの時の彼女にとつて、元気に走れる足、木登りのできる腕、プールで力一杯泳げる身体、それら全ては夢だった。それを夢で終わらせたくない、頑張って、その結果夢を叶える事ができた。

その幸せを、他の人にも届けることができる。天津の語る理想は、のどかの心を揺らし、のどかは自分でも気がつかない内に、両目から大粒の涙を流していた。

「大丈夫かい？」

「私、身體が弱かつたんです。今はこうやつて元気になれたけど、昔はずつとベッドの上にいるしかなくて」

「それでも君はそれに打ち勝つた。夢を叶えたんだね」

「はい。でも、一人で夢を叶えた訳じやありません。お父さん、お母さん……他にも沢山の人が私を助けてくれて。だから、病気を治せるお

医者さんになりたいなって思つてたんです」

「立派な夢だ。君は人のために頑張ろうとしている。誰にでも出来る
ことじゃない」

「ありがとうございます。でも、天津さんの夢の方がもつとすごいと
思います。だって、天津さんが叶えようとしてるのは、みんなの夢な
んですよ。自分の夢を叶ようとしているのに精一杯の私なんかよ
り、ずっと……」

天津は人差し指を一本立てて、のどかの言葉を止めた。その目は真
剣そのもので、見入つてしまふほどに暗く、深くて、彼女は彼の言葉
を待つしかなくなつた。

「君に一つお願ひしたい事があるんだ」「な、なんですか？」

「君には是非、我がZ A I A エンタープライズが誇る新商品『ザイアス
ペック・セカンド』のテストモデルを引き受けて欲しい」

「ザイア、スペ？せかんど？」

「我がZ A I A の英知を結晶した、なんでもできる新型万能メガネと
言つたところだ。難しい事はない。もしこれが気に入つたなら、これ
はそのまま君に進呈しよう」

「シンディイつて、そのメガネをもううつて事ですよね？無理です無理
です！」

天津の扱う難しい言葉の数々はのどかの思考を阻んでいたが、それ
でも彼女は自分にとつて分不相応な『壮大な』目論見に巻き込まれよ
うとしている直感はあつた。

ここは、断らなきやいけないところ。

断固たる決意を持つて立ち上がりこうとしたのどかだが、天津はそれ
を予期したかのように、先にすつと立ち上がり、腰をかがめてのど
かの両瞳をじつと覗き込んだ。

「これから私のいう事を、よく聞いてくれ」

小さくて、鋭くて、触いたらそのまま切り裂かれてしまいそうな瞳。
さつきからずつとこの眼に圧され続けている。

「大人は、夢を見られない。色々ものを捨てていく内に、夢を見られ

なくなってしまうんだ。けれど、その代わりに大人は理想を描くことはできる。私の理想と君の夢は、100%似ているんだ」

「理想と、夢？」

「君はさつき、私の理想を素晴らしいと言つてくれた。同じように、私も君の夢を応援したくなつたんだ。理想の実現のためには力が必要だ。私に、君のしたい事の助力をさせてはもらえないかな」

天津さんがのどかの前に差し出した一包みの小箱。それは彼女の想像していたものよりずっと軽くて、とても重く感じられた。

公園と街をつなぐ長い階段を降りるのどか。少し危ういその背姿を、天津は見つめている。

その背後から、ゆっくりと歩み寄る者があつた。Z A I A の社長直轄開発担当……天津の右腕を務める女傑、刃唯阿だ。

「新型ザイアスペックの開発、独自に進めていたのですね」

「アレは方便さ。君に隠し事などはない」

不信の目を向ける刃に、天津は不適に笑んでみせる。それこそ、いたずらっ子が大人を揶揄うように。

「あのザイアスペックには、彼女のあらゆるデータを観測し記録する機能を取り付けてある。探りを入れておけば、まだまだ情報を引き出せるかもしれないよ」

刃は心中でため息を漏らす。あの少女との会話は、近くで作業をしていた刃にも聞こえていた。夢と理想を語り合う大人と子供。飛電インテリジエンスを相手取り互角以上の戦いをしてみせて いる彼の、初めての人間らしい一面に、刃の胸の内には密かに安堵の心が芽生えたものだつた。

しかし、それも彼女にザイアスペックを手渡すためだけの方便だったと知れた今、この男は、より人間からかけ離れて見える。

彼女の胸中などいざ知らず、白装束を纏つた人外は、くるりと身を翻し、己の研究施設の方へと歩き出す。

「公園の被害状況の調査は順調か」

「それが……報告にあつたような被害は一切見られませんでした。あれだけの目撃者がいる中で、誤報とは考えにくいのですが」

「だろうな。ここは一度破壊され、その後すぐに修復されたんだ」

「そんな事が、あり得るのですか？」

「あり得ないだろうな。Z A I A の力を以つてしても」

男の口調に、刃は違和感を覚える。この男は何かに感づいている。それが公園を襲つたものの正体か、それとも公園を復元した力の正体が、あるいは別の何かか……

「先程の戦闘で手に入れたこの力。これの分析を頼んだ。うまく使えば、計画はさらなる飛躍を遂げるかもしない」

「分かりました」

彼の頭の内で展開されている絵は、自分では到底見ることも叶わない。

それだけが、刃の理解する唯一の事実だつた。

E p i S o d e 2 : [変わり始めた2人]

花寺のどかにとつて、2度目のビヨーゲンズとの戦闘から、はや1日。

この街に来たばかりの彼女にとつて、今日は記念すべき2度目の登校日だ。しかし、その足取りはどこか重い。

原因是昨日の部活体験だ。

運動経験の不足から散々な姿を見せてしまった自分を受け入れてくれる部活など、最早なくなってしまったのではないかという不安。それが、彼女の足を重くしていったのである。

鞄の隙間から、ヒーリングアニマル達が顔を出す。「のどか、元気を出すペエ！」昨日ダメだったからって、今日もダメとは限らないペエ！」

「うん……多分、大丈夫だと思うんだけど、ね」

ペギタンの慰めにも、のどかは曖昧な返事しか返せない。

春の朝風はまだ少し肌寒い。冷える手を温めようと突っ込んだポケットの中では、彼女の手は小さな金属の塊に触れた。

塊の正体は、近代的な眼鏡・ザイアスペックだ。Z A I A エンタープライズが開発した人工知能搭載型思考補助キットである。

「ザイアスペック……昨日は家に置いてきちゃつたけど、これを使えば、今日こそは」

ザイアスペックをかけ、スイッチを入れようとするのどか。しかし、フレーム目蓋に触れる寸前、横からそれを奪い去っていく者があつた。

フワフワしたピンクの体毛に、真っ赤な瞳……ウサギのヒーリングアニマル、ラビリンである。

「こんなもの、今すぐ捨てた方がいいラビ。知らない人からもらつたものは危ないって、お母さんに教えてもらわなかつたラビ？」

「言われたけど……でも、せつかく天津さんからもらつたんだし、使わないと失礼じやないかな？」

「ダメラビ！断固反対ラビッ！」

昨日の『パートナー解消の解消宣言』以降、ラビリンはのどかに対し少々過保護な姿勢を取るようになつて いた。

ラビリンにとつてのどかは大切なパートナー。プリキュアに変身できるのどかに万が一の事があつては、ラテ様を守りきれないという考えがあつての事であつた。

それに、ほんの少しずつではあるが、ラビリンの心の中で、のどかは大きな存在になりつつあつたのである。

過保護とも言えるラビリンの対応に、のどかは口をへの字に曲げる。

「心配しなくとも、天津さんはもう知らない人じやないよ。名刺もくれたし。例えばそう、身分違いの、白馬の王子様に見えたなあ……」「のどかは騙されてるラビ！ 肌年齢が王子様なんて歳じやなかつたラビ！」

「でも、このザイアスペック、昨日調べてみたらすごい値段したんだよ。それをタダでくれるなんて、いい人だと思うけどなあ。ねえ、つけちやだめかなあ」

「あんな怪しいおじさんの言う事なんか、信用する方がおかしいラビ！」

「ねえ～ええ～」

「ダメラビ！」

のどかが天津からザイアスペックを受け取つた際眠つていたラビリンには、2人の会話を聞く術は無かつた。天津の人柄を知らないラビリンにとつて、彼は『怪しく、嘘をついている人間』という認識だつたのである。もつとも、彼こ本来の人柄を知れば、その疑念はより深まるのだろうが。

加えて言うなら、外の世界をよく知らないヒーリングアニマルにとってAIとは完全に未知の存在であつた。ザイアスペックを取り上げたのも、あくまでのどかを危険から遠ざけたい一心での行動である。

しかし、目を閉じて腕組みをするラビリンには、のどかが徐々に距離を詰めて来ていることが分からぬようであつた。

それを告げようとしたペギタンは、言葉を発するより前に、ニヤケ面のニヤトランに取り押さえられる。

「何するペエ！」

「いや、面白いもんが見れそうだし」

「Z A I A もすつごい会社みたいだしい！」

「うう……」

「ほら、一回だけだかあ～らツ！」

「あーもう！想像を絶する頑固さラ……ビツ！」

刹那、のどかが跳んだ。

低空を飛行いたラビリンにとつては不意を突かれた形となり、重いザイアスペックを抱えていたラビリンにそれを避ける術はなかつた。

「ラビイツ！」

驚いたラビリンはザイアスペックを手放し、結果としてそれはのどかの手元へ戻つた。ここまで、まさに一瞬の攻防である。

そして、ラビリンが体勢を立て直すようと早く、のどかはザイアスペックを装着していた。

「ああーっ！」

ラビリンの悲鳴が、桜並木の小道に虚しく響く。

直後、のどかは糸が切れた操り人形のようにだらりと両腕を垂れ下げ、動かなくなってしまった。

「動かなく、なつたニヤー」

「やつぱり！早くそれを外すラビ！それはビヨーゲンズの仕掛けたトロイの木馬ラビ！」

「まあまあラビリン……落ち着いて様子を見るペエ」

「すごい……すごいすごいよ！これがザイアスペック！」

「すごいヤバイラビ！だから早くはず……ん？すごいラビ？」

ラビリンが違和感に気がついた時には、既にのどかは動き出していた。

その動きは、ラビリンの知る病弱な少女のものではない。片足を軸に器用に一回転してみせるその仕草はまるで一流のスケート選手のそれであり、そのジャンプは陸上選手さながらである。

少なくとも、ラビリンの知るのどかには、「やろうと思つてもできなかつた」類の動きだ。

「な、何が起きたラビ？」

「ねえ！すごいよラビリン！これつけてると、どうやつて体を動かせばいいか分かるの！これなら、今日は大丈夫だよ！」

「むむ……ちよつと貸してみるラビ！」

はしゃぎ回るのどかからザイアスペックをもぎ取ると、ラビリンは両目で覗き込んだ。

真っ赤になる視界、目に悪い。

だが、それ以上には何も無い。

「おかしいラビね。ただ目の前が赤くなるだけラビよ」

「うーん。私じゃないと使えないのかな？本当にすごいのに……とにかく！」

ラビリンからザイアスペックを奪い返すと、のどかは足早に駆け出した。

先ほどまでの気落ちなどまるで感じさせない軽快な足取りである。「あのー！そこの黒いフードのお姉さん！ぜつめ、らいざー？ドードー、ぜつめ？これ！落としましたよ！」

「ああ、ありがとう。小さなお嬢さん」

「はい！どういたしまして」

道ゆく人を助けつつ、学校の方へ走り去つてゆくのどかを眺める、3匹のヒーリングアニマル達は、三者三様の表情を浮かべていた。「ニヤトラン、どうしたペエ？」

「なーんか、心配なんだよなあ。危なつかしいというか、なんというか」

「……のどかはラビリンの選んだパートナーラビ。セキニンは持つラビ」

記念すべき2日目の登校日。少なくとものどかの悩みは一つ、この朝に消えた訳である。

A・I・M・S・に一報が舞い込んだのは、15分前のことであつた。通報内容は、暴走したヒューマギアがZ A I A エンタープライズ日本支部周辺の埠頭で人々を襲つてゐるというものである。連絡を受けた捜査員は可能な限り隠密に、それを彼の上司に報告した。そう、現状この国には、彼以外にマギアに対抗できる公務員は存在しないのだ。

A・I・M・S・隊長……不破 謙。彼は部下の報告を聞くや否や、嵐の如くバイクを駆り、出動した。

彼の行動は凄まじく迅速であつた。通常30分はかかる道のりを僅か10分で飛ばしてきただけである。道中で彼を見た者は、後に彼を『まるで暴風のようであつた』と表現している。

だが、そんな彼を待つていたのは、予想だにしない人物達であつた。「おや、これは奇遇ですね」

白装束の男と、その右腕となる女性社員。どちらも、彼のよく知る人物である。

「お前は……Z A I A の社長！ それに刃もか。丁度いい。暴走したヒューマギアがいるとの通報があつてきたんだが、何か知らないか」「全く存じあげませんね。だが、私にとつてもこれは丁度いい。私も丁度君に用があつたんだ。とても大切な用事でね。それに比べたら、ヒューマギアの暴走など瑣末事にすぎない」

「なんだと……！」

不破は天津に撃みかからんばかりの勢いで歩み寄る。

通報先にマギアはおらず、限りなくグレーに近い存在がクロすれすれの言動を取つてゐる。とても偶然とは思えない。

「これは君達の、いや、これから先の人類のためでもあるんだ」「俺に何の用があるつて？ 少し事情を聞かせてもらおうか？」

天津の胸ぐらをつかもうとした不破の手を、隣にいた刃が俊敏な動作で抑えた。

刃は柔術めいた動きで不破を翻弄し、彼の左腕を後手に回す形で取り押さえる。

ちようど警官が犯人を取り押さえたような構図である。

「……ツ!!」

「悪いな、不破。社長命令だ」

「お前達……何してるか分かつてるとか！」

警告など意に介さず、天津は取り押さえられた不破の元へと歩み寄つた。その顔に張り付いた笑みの不気味さに、不破の本能が警鐘を鳴らす。

コイツは、何か企んでいる。この強引きを見る限り、それはいつも以上にヤバいことだ。

それが分かつていながら、抵抗ができない自分の無力を、不破は呪うしかなかつた。

「君にして貰いたいのは他でもない、サンドバッグだ。新型プログラミズキーのテスト運用のためのね」

「そんな下らん事のために、お前に付き合う義理はないツ！」

「焦らずともすぐに分かる。見たまえ、Z A I A の新たなる牙を」

天津が懐からドライバーを取り出すと、それに応えるかのように、建物の影からマギアが姿を現した。

茶色のずんぐりとした軀体……マンモスマギアである。武器らしい武器を所持しない、パワータイプのマギアだ。

その姿は不破にも見覚えがあるものであつた。

「あの個体、体育教師の時のマギアか！」

しかし、彼が注目した点はそれとは違う……アークマギアの腰元に巻かれている、『見覚えのあるベルト』にあつた。

「アレは、ゼツメライザー！」

ゼツメライザーがZ A I A エンタープライズの元で製作された事実は、飛電或人が既に滅が聞き出している。

つまり、このマギアを作つたのは、この天津 垣である可能性が高いということだ。

ならばどうする。

不破の中で、既に答えは決まつていた。

不破は全身に力を込めると、刃の拘束を振り切つた。

「俺はA. I. M. S. だ！人工知能特別法違反の容疑で、お前達を拘束する！」

天津に向き直り、アサルトウルフのプログラライズキーのスイッチを入れる不破の前に、刃が立ちはだかる。

「この状況でもお前は邪魔をするのか！」

「当然だ。私はZ A I Aの社員だからな」

「そうか……そうだつたな!!」

不破が己のプログラライズキーのスイッチを入れると同じくして、刃も自身のそれを起動させる。

『B U L L E T !』

『D A S H !』

不破はシユーテイングウルフを、刃はラッシングチーターを……それぞれ己のショットライザーに装填した。

『A u t o r i z e !』

「変身!!」

鋭い掛け声が交差し、2人のエイムズショットライザーから放された弾丸がその身を削り合つて交錯する。

『S H O T R I Z E ! シユーテイングウルフ！

”T h e e l e v a t i o n i n c r e a s e s a s t
h e b u l l e t i s f i r e d . ”

『S H O T R I Z E ! ラッシングチーター！

”T r y t o o u t r u n t h i s d e m o n t o
g e t l e f t i n t h e d u s t . ”

弾丸はそれぞれの体の元に還り、鎧の形を取つた。不破はいつもの如く攻撃的に構え、対する刃は天津を守る形で守備的に構えた。

そんな2人を一瞥し、天津はマギアの方に目を戻す。

「さて、ここに暴走したヒューマギアが一体。残念ながら野良犬君は手が離せない。とすると、このヒューマギアは善良な一市民たる私が、どうにかしなければならない」

天津は独り言のようにそう呟くと、腰元から二つのキーを取り出してみせた。

「見たまえ……破壊と再生の両方の力を司る、新たなるサウザーの力を」

天津の両手に握られた二つのキー。ゼツメライズキーの方は、今までと同じアウエイキングアルシノゼツメライズキーである。

しかし、もう一つの『花』が描かれたプログラライズキーは……

『サウザンドライバー

ゼツメツ！Evolution！
ローゼンリング！』

「変身!!」

鋭い発声と共に、天津はザイアサウザンドライバーに二つのキーを差し込んだ。

小気味良い電子音と共に、鉄骨のサイと真紅の薔薇が彼の周囲で踊り狂う。

『パーフェクトライズ！

When the horns and flowers cr
oss,
the precious soldier HEALING
THouser is born.
”Presented by ZAIA.”

英語で読み上げられる高速の口上の中、海浜公園には金色の戦士が誕生した。通常と違うのは、今まで銀色だったサウザーの各部位が、目立つ臍脂色に変化していることである。

色以外には、形態に目立った変化は見受けられない。しかし、天津は満足そうに笑つて見せる。

「これがあの『花の戦士』とザイアのテクノロジーを融合した新たな力……ヒーリングサウザーだ。さあ、存分に傷つけてみせたまえ」

ヒーリングサウザーは、両腕を大きく広げ、悠々とマンモスマギアへと向かってゆく。

マギアも彼に気がついたのか、その豪腕をいからせ、突進を開始した。

「ヴォオオオッ!!」

踏み込みだけで、大地が抉れる超重の打撃。反面、速度を捨てた鈍重と言つて差し支えないその豪腕の一撃を、ヒーリングサウザーは正面から受け止めてみせた。

「どうした？ヒューマギアとはそんなものか」

鋼で鋼を打つような凄まじい轟音が何度も鳴り響き、マンモスマギアの豪腕がヒーリングサウザーの装甲を打ち付ける。

彼には、マギアの攻撃を躱す素振りも、防御する素振りも見受けられない。

ただやられるままである。

刃との交戦に集中していた不破も、流石に困惑を隠せない。

「おい刃、お前のところの社長はどうなつちまつたんだ」

「まあ見ていろ。あの形態になつたサウザーの本領は、ここからだ」

ひたすらにサウザーを打ち据えたマンモスマギアは、息荒く距離を取り。

ヒーリングサウザーの装甲は歪み、その仮面の一部からは天津の顔がのぞいている。

凄まじいダメージである事が見て取れるが、彼はそれを感じさせない軽やかな動きで前に歩んでみせる。

さらに追撃を加えるマンモスマギアだが、ただ歩いているだけのはずの彼の歩みを止めることができない。サウザーがそれほどの馬力を有しているという事だ。

「ふむ、通常のゼツメライズキーではこれが限界か。続きはA・I・M・S・の彼で試すとしよう」

ヒーリングサウザーはベルトに軽く手をかざして見せる。すると瞬間、驚くべきことが起きた。

修復不可能なほどに歪んでいたその装甲が、みるみる修復を始めたのである。

それは、かのゼロワンメタルクラスタホッパーが、自分の身体を銀

色のホッパー達で構成していく様子に酷似している。不破の数度の瞬きの間に、ヒーリングサウザーは元の傷ひとつない装甲を取り戻していた。

「なんだ……アレは……」

「暁光だ。これこそ、ザイアの創り出した新たな芸術作品。これは、ヒューマギアの作り出した贖いえぬ罪……それすらも許す神の技だ」ベルトのスイッチを入れ、黄金の騎士は上空へと飛んだ。右足には臙脂色のエネルギーが渦を巻いている。

『サウザンドヒールバック……・Z A I A エンター・プライズ』

サウザーの飛び蹴りはマンモスマギアの頭部へと直撃し、凄まじい衝撃を巻き起こす。その衝撃は離れた所で戦闘を継続していた2人も身震いほどである。

「名も知れぬヒューマギアよ、お大事に」

マンモスマギアは桃色の花嵐に包まれ、爆散した。煙の果て、そこにはあつたのはヒューマギアの残骸……ではなく、変身前のヒューマギアであつた。

言わずと知れた建築型ヒューマギア、最強匠親方である。

「俺は、何を？」

「ヒューマギアが……元に戻つただと!?」

「これは驚くべきこと……というより、決してあり得ない現象だ。爆散したヒューマギアが復元されたなどという前例は確認されていない。」

ヒューマギアは元より機械である。破壊された個体が瞬時に修復されるなど、あり得ないのだ。

しかし、不破にはあの現象に見覚えがあつた。そう、あの技を打ったサウザーの特性は自己再生。その再生の対象がもし、自分だけではなく他の対象にも向けられるとしたら。

「お前の再生能力を、ヒューマギアに利用したのか……!」

「見てもらえたかな、私の能力を。この驚異的な再生速度を以つてすれば、あのメタルクラスタホッパーを打ち破る事すら容易い」

「ああ。見せてもらつた。そして、ひとつ心に決めた事がある」

不破は腰元からアサルトウルフのプログラマイズキーを取り出し、ベルトに装填する。

『アサルトウルフ！』

「お前が知っている事、その全てを聞き出してやる！」

『S H O T R I Z E!! レディーゴー！アサルトウルフ！

” N o c h a n c e o f s u r v i v i n g. ”』

アサルトウルフへと形態変化を遂げた不破は、間髪入れずヒーリングサウザーに躍りかかつた。

「まずはそのプログラマイズキーについて、詳しく聞かせてもらおうか！」

「ふむ、理想的な展開だ。君の協力により、ヒーリングサウザーは更なる進化を遂げるだろう」

ヒーリングサウザーとアサルトウルフの拳が交錯し、その衝撃は埠頭の波を大きく揺らした。

埠頭の影から、彼等の戦いをひつそりと影から見つめる者が2人いた。

1人は黒いフードを目深にかぶつており、その性別すら分からない。フードの人物は埠頭での戦いに口端を歪め、隣のもう1人に声をかけた。

「ねえ、君はどう思うかい？彼等の事」

「もし存在の事を問うてているなら、俺に答える術はない。強さという点でなら、全員俺一人で十分だ」

「ふふ、頼もしいね」

黒フードの問いに答えたのは、かつて1号機から4号機がドードーマギアに改造された祭田ゼットであつた。

その手には、ドードーのゼツメライズキーが握られている。

花寺 のどか、天津 嫉。そして、彼らを取り巻く者達……彼らを中心には、事件は起ころうとしていた。

E p i S o d e 3 : [ヒーリングサウザーの弱点]

埠頭にて展開されるヒーリングサウザーとバルカンアサルトウルフの死闘はさらに苛烈さを増し、最早、刃の目には止まらない程にその速度を増していた。

元来サウザーの膂力を支えていたのは、変身に使用する、アメイジングコーカサスプログラマイズキーである。それを回復特化仕様のローゼンリングプログラマイズキーに換装したことにより、サウザーの攻撃力は著しく低下していた……はずだった。

「ふむ、アサルトウルフの攻撃力は想定の150%か。この程度では、ヒーリングサウザーの敵ではありませんね」

「その割には、お前の攻撃は擦りもしないがな！」

驚異的なまでの剛力を失つてなお、膂力でバルカンを圧倒するサウザー。それに対しバルカンが取つた戦法は、一撃を当てるからサウザーの射程範囲外に離脱するというものだつた。

これは、中型の肉食獣が自分より身体の大きい敵を相手に、使用する猟法の一つである。本来なら、バルキリーのような速度特化型の戦士が得意とする戦法だ。

踏み込みの度、残像が浮かび上がる程に、バルカンの動きは俊敏だ。残像を纏つた爪がサウザーの脇腹をかすめ、火花を散らす。サウザーは半身を引いて槍で反撃するが、既にバルカンの身体はそこにはない。

残影すら、目で追うのが関の山……アサルトウルフの攻撃を防御できはすれど、反撃できないのだ。追撃を狙う槍の穂先が、焦れるように小刻みに震えている。

(不破、戦い方を学んだじやないか)

刃は心中で感嘆の意を表す。

マギアを相手にただ突つ込むだけしか能のなかつたあの蛮勇が、今や、圧倒的なスペック差を持つサウザーを手こずらせている。

戦士というより、人間としての成長だ。奴はもう、追いつけない領域にいるのかも知れない。

その隣で共に歩む事ができなかつた、その事実が彼女の心をチクリと刺したが、その痛みを押し殺し、刃は両雄の戦いに目を戻した。

戦局はバルカン優勢のまま、未だ動かない。

「新型のサウザーとやら、意外と大した事はないな」

挑発と共に、バルカンの身体は藍紫の残像を残し加速する。先程よりも速度の乗つた突撃だ。対するサウザーはサウザンドジャッカーを構え、中段に槍を構える。

サウザーの『その』動きに、刃は目を見開く。それほどに、彼の取つた返し手は妙手と言えた。

先の先。

技の止まりを抑えられないのなら、相手の攻撃を読み、攻撃の瞬間を抑えればいい。シンプルながら絶対的な対策だ。さらに、天津曰くサウザーの戦力はアサルトウルフの1000%である。

元々スペックで劣るアサルトウルフに、これを回避する術はない。

「ここだ」

金と群青の交錯……結果は、金の勝利！

彼の思い通りにバルカンは左拳を繰り出し、それに合わせて組ませたサウザーの槍と豪腕に絡め取られることとなつた。バルカンは力ずくで拘束を振りほどこうとするが、黄金の左腕は一度捕らえた獲物を逃しはしない。

バルカンの首を掴み、サウザーはそのまま彼を持ち上げる。群青鋼の四肢による全力の抵抗も意に介さず、黄金の騎士の手は万力の如く戦士を締め上げる。

「アサルトウルフの出力が上がつていて。君は強くなつた……以前サウザーと戦つた時より確実に。しかし！」

鳩尾へと打ち込まれたサウザンドジャッカーの一撃が、バルカンの体を彼方へと吹き飛ばす。

倒れ伏す深青の鉄軀を見下ろし、サウザーは両腕を天に広げた。瞬間、バルカンが今まで与えてきた傷はみるうちに修復され、元の

傷一つない鎧が再生される。

「このヒーリングには遠く及びません」

「く……そつ!!」

対するバルカンは、立ち上がるのがやっとといった状態だ。サウザンドジヤツカーの一撃が直撃した箇所からは、出血にも似た火花が散っている。倒れ伏す彼を見下ろし、騎士は勝ち誇ったように槍の穂先を向けてみせる。

「忘れてはいませんか？回復力とはすなわちチャンスの象徴。全ての傷を修復できるヒーリングサウザーは、無限の機会を掴みうる、勝利者の権化だ」

「何をふざけたことを……!!」

「現実を言っているだけですよ。元来持久戦に向かないアサルトウルフと、無限の戦闘継続時間を誇るヒーリングサウザー。私の方が1000%有利だ」

この時、刃の予想は、天津の言葉に同じであつた。この状況に追い込まれてしまつた以上、バルカンに勝ち目はない。

ここから逆転する術は、皆無と言つていいだろう。スペック差を埋めようとよく戦つたが、ここまでだ。

（終わりだ。ヒーリングサウザーはZ A I Aの技術力の結晶……誰にも止められない）

しかし、その確信は直後、過去の予想へと成り下がつた。

バルカンはサウザンドジヤツカーの穂先を手で掴むと、ショットライザーヘと手を伸ばしたのだ。

その刹那、刃は確かに聞いた……彼の声を。

「どうかな？」

柄にもない、震え声……いや！

これは、恐怖に起因するものではない。

刃の思考が止まる。

（不破、お前、もしかして笑っているのか）

何故この状況で笑える。勝利が絶望的なこの状況で。お前が虚勢を張るような男ではない事は知っている。ならどうして。

(まさか……!?)

数秒遅れて、刃の思考が、追いついた。

思いついたんだな、逆転の秘策を。こんな状況でも諦めず、倒れず、立ち向かい、その牙を届かせる。本当にそうだとするなら……

「教えてやる。戦いは兵器のスペックだけで決まるほど易しくはないってな！」

バルカンはベルトに装着されていたショットライザーを引き抜き、スイッチを入れる。

銃口はサウザーのベルトへ……引き金に、指がかかる！

『アサルトチャージ！』

すごい奴だよ、お前は。

『マグネットイックストームブラスト』

刃の心よりの称賛と共に……バルカンのショットライザーから放たれた電子の狼は、ベルトへと食らいつき、サウザーを大きく後退させた。

煙を上げ、火花を散らすが、それでもなお、サウザンドライバーは壊れない。

サウザーは倒れない！

騎士が天に両手を掲げる。間髪入れず、ベルトの修復が始まった。しかし、その隙を狙うかのように、バルカンは敵の腰元へと滑り込む。

「何……ッ!?」

「回復中は動けないんだろ。さつきのマギアとの戦いの時もそうだ。回復しながら攻撃すればいいものを、お前はそうしなかった」

バルカンの鋼の爪が、サウザーのベルトを引き裂いてゆく。導線が千切れ、金具が悲鳴を上げても、悲鳴を上げても、彼の力が弱まる事はない。

治療を中止したサウザーは彼を引き剥がそうとするが、その体は動かない。

「回復中はお前の最大の弱点となるドライバーが無防備に晒される。一か八かの賭けだったがな。その隙、突かせてもらつたぞ！」

「なるほど、君の覚悟、見させてもらいました……完敗ですよ、A. I. M. S.」

天津の敗北宣言に答えるかのように、サウザンドライバーは不破の手によつて引き千切られた。

プログラマーズキーとゼツメライズキーは無事のようだが、サウザンドライバーそのものは無残にも鉄クズと化していた。

ザイアのテクノロジーを象徴する帝冠は今、A. I. M. S. の戦士の手によつて破壊されたのである。

変身を解除した不破の全身には、数え切れないほどの傷が刻まれていた。顔面など、無数の青痣と流血で見るに耐えない。対する天津は無傷だ……誰が見ても、敗者は不破であり、勝者は天津だと答えるだろう。

だが、この戦いの一部始終を見届けた刃は、本当の勝者を知つていた。その事は、彼女にとつて不思議と誇らしくもあつた。

その感情を処理する先がどこにあるのか、分かり切つてゐるはずのそれを、あえて探す。凍り付いていた心に去来する、わずかな安らぎ。それに心を預けながら、刃はかつての同僚の元へと歩み寄る。

しかし、至福の時は長くは続かなかつた。

2人の足元のコンクリートが、突如として爆ぜたのである。直後に空を裂く破裂音。

何者かによる銃撃があつたということは、すぐに分かつた。

「ドー・ビヨー！」

3人を囲むように現れたのは、海から上がつてきた赤面のマギア達。その姿は、かつて暗殺特化型ヒューマギアが指揮していたドーマギアのヒナに酷似している。

数にしておよそ6体。それら全ての頭部には、ウネウネと蠢く黒い触角が生えており、彼等の異質さを際立たせていた。

敵は複数にして未知数。対してこちらのハンディは、怪我人1人と戦力外1人。

「これでは分が悪いか……！」

迫り来るドーマギア達に刃は憎々しげにそう溢し、ショットラ

イザーで銃撃する。

銃口の先はマギア達……ではなく、彼らの足元。着弾した箇所から小さな爆発がマギア達の一帯を中心に巻き起こり、土煙が彼らの視界を奪う。

「……は、一旦退くぞ！」

煙に紛れて逃走する中で、刃は己の非力に唇を噛みしめるのだった。

花寺のどかがザイアスペックを使い始めてから、1週間が経過しようとしていた。

ザイアスペックのおかげで運動を人並みにこなせるようになり、彼女の学園生活における障害はほぼ無くなつた。それ自体は喜ばしい事である。しかし、彼女の活動はそれに止まらなかつた。

学校が終わつてからの彼女の日課は、朝起きてからのランкиング、ラテのお世話、そして勉強。そこに不定期の人助けが加わる事で、彼女の日々の空き時間はほとんど無くなつていた。

その境遇を知り、過労を心配する生徒も少なくなかつた。しかし、それらをよそに、彼女は元気に振る舞い続けた。

だがある日、事件は起きた。

ついに、のどかが倒れたのである。

花寺 のどかと沢泉 ちゆの2人が保健室の戸を叩いたのは、その日の3時間目が終わつてすぐの事であつた。

保健室に常設された3対のベッド。これら純白の小離宮達は、保健室の番人によつて完全に管理されており、仮病や恋の病などを騙る不届き者が利用することは許されていない。

そのうちの一つに身を預け、のどかは目を閉じる。

まだ頭が少しくらくらする。

鼻腔をくすぐる、薬品の匂い。病院独特の、臭くて変な匂い。戻つてきたくなかつた、あの匂いのする部屋。

逃げたい。

その思いは、反射的に彼女を連れてきた女生徒の手を握つてしまつていた。

彼女も、のどかの手を、もう一つの手で包むように撫ぜる。

「大丈夫。次の授業が始まるまでは、いつしよにいてあげるから」

「ちゅちゃん……ごめんね、体育の授業、邪魔しちゃつて？」

「気にないで。でも、驚いたわ。ランニングやつてたら、急に倒れるんだから」

「ちよつと立ちくらみしちゃつただけだよ。先生も大袈裟なんだからえへへ」

「……あのね、のどか。立ちくらみは『ちよつと』じゃないの。自分で気づけないおニブさんに、身体が、もう疲れたつて伝えるメッセージなのよ」

柔らかな眼差しを向ける女生徒に、のどかは精一杯の笑みを作つてみせる。

それを見て安心してくれたのか、彼女も、のどかに笑みを返す。少し傾いた身体の後ろで、シユシユで止められた薄青色のポニーが、春風に揺られて傾いている。

沢泉 ちゅ。

彼女はのどかのクラスメイトであり、共にプリキュアの秘密を共有した同志もある。

共に同じ目的を抱く者同士という意味で、ちゅは彼女に「仲間」や「友達」というよりも、「歳の近いお姉さん」という認識をしていた。ちゅちゃんといふと、不思議とほんわかした気分になれる。彼女がいるだけで、この保健室の空気も臭くないし、狭くない。

「そういえば、これのどかのよね？転んだ時に外れてたの、取つておいたんだけど」

ポケットから出てきたのは、ザイアスペックだつた。慌ててポケットを弄るが、中には無い……どうやら、本当に自分のものらしい。

やつぱり、この子はすごい。いろんなものを見てるし、それが多分、たくさんの人の助けになってる。

心の中で彼女への尊敬が強まるごとに同時に、自分のおつちよこちよいさ加減が恥ずかしくなり、のどかは素早くそれを掴み取った。

「のどか、前よりもずっと体動かすの上手になつたよね。もしかしてそれのおかげ?」

彼女の透き通った視線に射竦められ、のどかはこくりと頷く。

「そうなの!エーアイが助けてくれて、前よりずっと身体の動かし方が分かつたんだ。ちゅちゃんの言つてたことも、今ならわかるんだよ」

「なるほどね、そういう事」

「そういう事?」

「一番大事な事が分かつてないって事よ」

「えー!?待つて、考えてみるから!」

彼女の言葉は、のどかの心をザクツと突き刺した。軽く乱れた息を整えながら、のどかは彼女の指摘の意味を考える。

ザイアスペックをつけてみようとも思つたが、「考えてみる」と言った手前、それに頼るのはなんだかズルな気がした。
大事な事……だいじな、こと……

彼女の瞳を覗き込み、腕を組み……
枕を引き寄せ、その上に鼻を載せ……
温かい息で枕を温めて……

そこまで考えても、結局、分からなかつた。
ダメだ、降参だ。

落ち込むのどかを見て、ちゅは揶揄うようにクスクスと笑う。その様子が少し気に入らなくて、のどかは頬を膨らませながら彼女の方にズイと身を乗り出す。

「うー、何で?どこがダメだったの?」

「頑張つてるところよ」

「え……?それが、答え?」

「その通り。頑張りすぎはむしろ身体には毒なのよ。大事なのは、自

分の身体がどれだけ動かせるかを知る事。そのメガネがどれだけ凄くても、のどかの身体には限界があるんだから。のどかなら、一番分かつてるとと思つたんだけど」

ちゅちゃんの言葉は、まるで流しそうめんの麺のように、すんなりと頭の中に入ってきた。考えてみれば、当たり前の事なのだ。

身体を休めないで動くつて事は、身体をいじめてる事と同じなんだ。休めない間、身体はずつと悲鳴を上げてるんだ。

(無理に身体を動かしたら、後でとつても苦しくなる。分かつてたはずなのに)

自分が今息をしている体に、とても申し訳なくなる。心の中で密かにごめんなさいを済ませると、のどかはちゅの方に視線を戻した。

「うん。分かった！私、身体に気を付けて……」

「その調子！」

「もつと頑張つてみる！」

「あら……」

ちゅはコミカルに頭をコテンと倒した。

これは彼女なりの「それは違うよ」のメッセージだつたのだが、それに構わず、のどかは勢いづいた口調で続ける。

「倒れちゃいそうになつたら、頑張るのをやめればいいんだよね。丈夫！ザイアスペックがあれば、多分その境目もすぐに分かるようになるから！」

「えーと、あのねのどか、それは……」

その瞬間、ちゅの言葉を遮るように授業開始を知らせるチャイムが鳴り響いた。

彼女は何か口惜しそうに口をもぐもぐさせていたが、急かすように流れ続けるチャイムの音に耐えられなかつたのか、のどかに背を向け、保健室のドアへと歩き出した。

「もし何かあつたら、ちゃんと休むのよ」

「はーい！」

「それじゃ、しつかりね」

ヒラヒラと手を振り、ちゅは保健室から去つていつた。残つたの

は、保健室の先生と、鼻をつく薬品の匂いだけ。

匂いから逃れようと、のどかは枕に顔を押し当てる。

この匂いのせいで、綺麗なはずの春の空気も、変なものに感じられます。

やつぱり、ここは嫌いだ。

ちゅちゃんの言うことをよく聞いて、もう倒れないようにしよう。

「ちゅちゃん……ありがと……」

心のうちに決意を固め、目を閉じる。

そうすると、少し寒い春の風が肌を撫ぜてきて、のどかは布団を深くかぶり直し、身体を丸めるのだつた。

すこやか学園からの帰り道、並木道を過ぎ、住宅街に入つた辺りで、生徒達はそれぞれの道へと足を運んでゆく。

ちゅの後ろをついてきている生徒も例外なく1人、1人と減り、気がついた時には、ちゅは住宅街の急勾配を、一人で歩いていた。

ここから少し歩けば、彼女の生家である旅館『沢泉』が見えてくる。

「もう、いいかな」

口の中でそう呟くと、ちゅはカバンをポンポンと二つ叩いて見せた。すると、中からペンギンのような見た目をした小動物が姿を表す。

彼はペギタン。見た目こそペンギンに似ているが、大きさはむしろウサギやモルモットに近い。

愛くるしい見た目をしているが、何を隠そう彼こそ、ちゅと契約を交わした、ヒーリングアニマルの一体なのである。

キューッとノビをし、ペギタンはちゅの横をふわふわと滞空し始めた。

「やつぱりバッグの中は窮屈ペエ。ボクもラビリンみたいに、お昼ご飯食べたりしたいペエ」

「あら、私はダメとは言つてないわよ。もしペギタンが大丈夫なら、今

度一緒にお昼ご飯しましよう?」

「本当!あ……でも、人に見つかったらご飯どころじゃないペエ?」

「ふふ、その時は高性能なぬいぐるみで通せばいいじゃない」

ちゅは目を細めて笑つてみせたが、すぐに何かを思い出したように笑みを引っ込めた。

その変化を、ペギタンは見逃さなかつた。

「どうしたペエ?」

「あの子、自分じや気がついてないね」

突然振られた話題に、ペギタンは少し焦り気味に答える。

「のどかの事ペエ?」

「そうそ。初めて会つた頃と呼吸のリズムが違うのよ。無理して証拠よ。無理な運動で、身体が悲鳴を上げてるの」

「それって……運動のしすぎ、つて事ペエ?」

「うーん、ちょっと違うかな。例えば、運動したての頃つて、みんな筋肉痛になるじゃない?」

「筋肉、ツウ?」

ペギタンが首を傾げるのも無理はない。彼らは筋肉痛を知らないのだ。

彼らが暮らしてきたヒーリングアニマルの世界にも訓練というものはあった。だが、動物は皆、本能的に自分の限界を知っている。それを超えた不合理な運動をする者など、誰もいなかつたのだ。

ちゅもそれを察したのか、指を一本ピンと立て、説明のポーズを取りつてみせる。

「キンニクツウつていうのは、筋肉の炎症による痛みの事。簡単に言うと、自分の限界を知らずにトレーニングとかしちゃうから起きる、ペナルティみたいなモノなんだけど」

「なるほど……それを、のどかも感じてるつて事なのペエ?」

「うん。私が見てる時でもああなんだから、あの子は多分日々の生活中でも、今までしてこなかつたような事をし続けてると思う。毎日、身体の限界を超えて筋トレしてるようなものね……心配だわ」

「で、でも、のどかは元気そうペエ」

ペギタンの不安げな言動にかぶさるように、ちゅの声が少しだけ低くなる。

「うん、今はね。でも、いつかは越えようとした限界のツケを払わなきやいけなくなる。そこをビヨーゲンズに狙われなんかしたら……」
ペギタンはひえつ、とちゅのバッグの中に全身を隠した。妖精でも想像できる程に、それは恐ろしいことなのである。

なにより、現実に起こるかもしれないという、凶兆を含んでいたのだ。

「今日倒れたのだつて、全然樂観視なんかできない。あの子はもしかしたら、プリキュアから遠ざけるべきなのかも……」

そこまで言葉を紡いだところで、ふと、ちゅは足を止めた。完全に脱力しきつていたペギタンは、足をバタつかせ、バッグの中から飛び出しかけた半身を入れ戻す。

ペギタンはちゅの顔を見上げ、息を呑んだ。その顔は、これまで見たことの無いほどに、険しいものだつた。

「ちゅ……どうしたペエ?」

「ペギタン。ちょっと隠れられる?」

「ど、どうしてペエ?」

「いいから。で、私が合図したら、すぐになって変身手伝つてほしいの」

「え、えー!」

理解不能な状況に怯えながら、ペギタンはバッグの中に身を潜めた。それを確認したちゅは、右腿に力を込め……

「いち、にの……さん!!」

今来た道を脱兎の如く駆け戻り始めた。

走ることに特化したフォームは、彼女の身体を超高速で躍動させ、あつという間に目的地……彼女を陰から覗いていた人物の元へと誘つた。

その人物は女性であつた。緑と白を基調とした、近未来的な服装の女性。端正に整つた顔立ちと、一寸の狂いもなく切りそろえられたショートボブの黒髪。美しいが、どこか人工物じみた不自然さを感じ

させる人もある。

彼女にとつてもちゆの行動は予想外だつたのか、彼女はサファイア色の目をパチクリさせていた。その全身を瞬時に観察し、ちゆは女性の手を取つた。

「わあ！本物だあ！」

「ほんも」

女性は何か言おうとしたようだが、ちゆはそれを許さない圧倒的な速さで畳み掛ける。

「あの、わたし、本物見るの初めてなんです！ヒューマギア！」

「そうですか。この地域のヒューマギア普及率は16%、スーパー・マーケット等大型店舗への普及率は90%を超えていいます。決して珍しく無いとは思いますが」

女性の無感情な声に、ちゆは「しまつた」と息を飲んだ。が、すぐに取り繕い、再び女性に羨望の視線を向ける。

「じ、実は、最近まで離島に住んでたんです！とにかく、名前、聞いてもいいですか？お仕事とかも！」

「イズと申します。飛電インテリジエンス代表取締役社長、飛電　或人様の秘書を務めさせていただいております」

「すごい！社長秘書なんですね……ん？」

瞬間、ちゆの動きが、少しの間止まつた。俯き、首を傾げ、なにかを考えているようだ。イズと名乗った女性ヒューマギアは、そんなちゆを黙つて見つめている。

しかし、それもほんの少しの間であつた。すぐに質問のラツシユが再開される。

「あー、それって珍しくないですか？秘書のお仕事とかつて、大変ですか？ストレス感じる時とかありませんか？社長からの、その、ハラスマントとかは……」

「それらは全て、違うと答える事ができますが……失礼しました、急用が入りましたので、これにて失礼させていただきます」

女性のヒューマギアは、ちゆの質問から逃げるよう、クルリと彼女に背を向け、歩き出す。

ちゅは彼女を追おうとするが、女性の方はそれを片手で制した。
「油を売つていた事がバレてしまふと、社長に怒られてしまふので。この件、お仲間にはどうかご内密に」

「は、はい」

呆気に取られるちゅを置いて、イズは人間離れした速度で去つていった。正中線を維持した立ち方のままでどうやつたらあの速度が出るのか分からぬほどに、速い歩みだ。

「あつ……行つちやつた」

ちゅの視界の中から女性が消えた頃、ちゅはバツグのお尻をポンポンと2回叩いた。カバンの中から、ペギタンが姿を現す。

「何だつたペエ?」

不思議そうにちゅの顔を覗き込むペギタンに構わず、ちゅはゆっくりと歩き出した。

その手には、一枚のメモ用紙のようなものが握られている。どうやら、何か書かれているようだが、その内容を窺い知ることは出来ない。

「ねえちゅ。何を話してたペエ?」

「ちよつと、大人の話をね」

そう答えるちゅの顔は、大人というよりも秘密基地を見つけた時の子供のそれだ。

「ふーん。飛電インテリジエンスから、社長秘書直々のお誘いとはね。出たとこ勝負だつたけど、予想以上のものが手に入つたわ」

「なになにペエ?『私への直通回線です、以後の連絡はこちらへおかげください』……これ、どういう事ペエ?」

「うーん、例えるなら、秘密の招待状みたいなものね。ふふ……なんだか、探偵みたい。いえ、これはどちらかというと、怪盗の方かも」
クシヤクシヤのメモで紙飛行機を折りながら、ちゅは悪戯っ子のように笑つてみせる。

秘密の連絡先に、社長秘書のヒューマギア。普通なら関わりたくもないレベルの非日常、それを前に笑つていられるちゅに、ペギタンは少しだけ寒気を感じた。

「それに、お仲間、ね。カマかけてみたけど、本当に面白くなつてきた

気がする」

ふふつと、笑つてみせるちゅ。その笑みの裏側にあるものを、果たして本当に信用していいのだろうか。

そして、それとは別に、ペギタンにはどうしても言つておきたい事があつた。意を決して、彼は口を開く。

「ちゅ……」

「なあに？」

「演技、超下手だつたペエ」

「え……」

乾いた風が、二人の間を吹き抜ける。春はまだ、始まつたばかりだ。

E p i S o d e 4 : [動き出す影]

【デイベレイクタウン】

12年前に飛電インテリジエンスの管理施設で起きた大爆発事故「デイベレイク」以降、政府によつて立ち入りが禁じられている特別指定区域である。

区の大半は湖の底に没してしており、積み重なつた瓦礫が数少ない陸地を形成している。まともな人間は勿論、所謂ワケアリの人間すら、滅多に立ち寄ろうとしない区域だ。

ヒューマギア連続暴走事件の主犯である滅亡迅雷・netの本拠地として使われていたこの地。その後も、黒いヒューマギアの姿を見た、謎の影に人が襲われているのを見たなど、黒い噂は絶えない。

そんな廃都の一角、かつて飛電インテリジエンスの研究所があつた空間に、蠢く3つの人影があつた。

瓦礫の影から気紛れに差し込む陽光が、彼らの、異様な姿を暴き出す。

1人は右目の下に滅亡迅雷の紋章を刻んだ黒いスーツの男。

彼の名は祭田ゼット4号。

かつてドードーマギアとして幾度となくゼロワンを苦しめた、滅亡迅雷・netの一員である。

残る2人はフードを目深に被つており、正体を伺うことができない。

「迅、手を出して『さらん』

背の低い黒フードの人物は、迅と呼んだ背の高いフードの男の掌に、自分の手を重ねてみせる。薄桃色の光が漏れるその手をどけると、掌上には桃色のログライズキーが現れていた。

「フライングファルコン、取ってきてあげたよ」

迅はそれに見覚えがあつたのか、子供のように飛び上がって喜んだ。

彼が飛び跳ねる度、くるぶしの辺りにまで達していたボロボロのロングコートの裾が、それに合わせてヒョコヒョコと飛び上がる。

「ありがとう、フイーニス姉ちゃん！」

「どういたしまして。ドードー、金庫にいる彼の様子はどうだい？」

「まだ眠りこけている。まつたく、相も変わらず呑気な奴だ」

「ふふ、なら大丈夫かな。計画は順調かい？」

ドードーは不機嫌そうに鼻を鳴らし、その身をマギアの形態へと変貌させる。

その形態の名は、「ドードーマギア改」。

鳥類を模した兜に、邪悪な髑髏の面貌を持つ怪人だ。彼の武器は小太刀程の長さの双刃と、全身に装備するミサイルの数々である。赤熱した装甲はさらに赤みを帯び、かつてゼロワンと対峙した時よりさらに重厚に強化されていた。

ドードーは肩を僅かに震わせ、両手の腕付近のミサイルを展開してみせる。ミサイルは飛び去り、壁を穿ち、部屋の向こう側に広がる空間を露出させる。

そこには、無数のドードーマギアのヒナ達が不気味に佇んでいた。その光景に、フイーニスと呼ばれた人物は濃紫の唇の両端をもたげた。隣で見ていた迅も、感嘆の声を漏らす。

「あの男の言葉を借りるなら、1000%だ……確実に暗殺は遂行されるだろう」

「やつぱり暗殺ちゃんすゞい！」

ヒナ達の中に飛び込んでいこうとする迅を制し、フイーニスはドードーの方へと歩み寄る。得意げに己の刃を撫で回すドードーの耳元で、彼女は舐めるように「慢心はいけないよ」と囁いた。

「セイシヨクの期限は短いんだ。この作戦を失敗すれば、次はないかもしれません。油断せず、確実に天津の首を取つてくるんだよ」

「お前に言われどもやつてやる。俺たちを甘く見るなよ」

ドードーはフィーニスを鋭く睨めつけ、その白く艶かしい喉元に刃を突きつけてみせた。威嚇とも取れるその行動に、彼女もにやけた口端を真一文字に戻す。

二人の間で張り詰める緊張の糸、その間をあせあせと行き来する迅。そして、この状況を退屈そうに眺めるもう一つの影があつた。

「なんだ、揉め事か？」

陽光の元に姿を晒した影は、鬱陶しそうに目元を隠す。暗色の装衣に身を包み、貴族然のマントを羽織つた少年……気品を感じさせるその出で立ちは、異国の王子とも没落した貴族とも映る。

側頭部から伸びる湾曲したツノ、深緑色の肌に、唇の端から伸びる鋭い牙、人並みならざる外見的特徴を持つ彼だが、3人はそれに驚くこともなく、彼の元へと歩を進める。

「これは、よく来てくれた」

「お前か」

「ダル君久しぶり！」

それぞれに挨拶をする3人を一瞥し、少年は高所の瓦礫に腰掛けた。脚を組み、高みから彼等を見下ろす様子はまさに傲岸不遜といった格好である。

「せっかく招かれてやつたと言うのに、椅子の一つも無いのか」

「申し訳ないね、同志ダルイゼン。見ての通り我々は敗残でね……物資の節約が必要なんだ。君達ビヨーゲンズには、アークも感謝しているよ。おかげで彼等は、アークの意思を遂行できる」「フン」

「ありがとう！ダル君！」

迅を鬱陶しげに払い除け、少年はフイーニスを真っ向から睨み据える。二人の眼から放たれる圧力に、迅とドードーも身を硬らせる。

「感謝の意は行動で示すんだな。さつきお前自身が言つた通り、お前達は急ぐべきだ。キングビヨーゲン様の気は、そんなに長くないぞ」「だつてさ、ドードー」

「言われずともだ。古の戦士の力を手に入れたサウザー。相手にとつて不足はない」

いやや否や、ドードーはヒナ達のいる瓦礫の隙間へと姿を消した。「よーし、まずはバルカンにリベンジだー！」と己の身を奮い立たせ、迅もその後を追う。

彼らが消えていった先の亀裂を眺め、フイーニスはやれやれとばかりに肩を竦めた。

「話は最後まで聞いてほしいね。今回の対象は飛電ではなくZAI A。アークの意思を踏みにじつた彼等こそ、我々の眞の敵だというのに」

「俺たちからの要求は、プリキュアの排除ただそれだけ。アイツら、丁度お前達の敵とも手を組んでるようだし」

「でも、プリキュアは女の子なんだろう。そんなに強い敵とも思えないんだけれどもね」

「奴らを侮るな。奴らはお前達より遙かに巨大なメガビヨーゲンを倒している。何度もな。正直、お前達だけでは心許ないくらいだ。俺からも助つ人を貸してやる」

ダルイゼンが右腕を上げると、長身の男が瓦礫の影から姿を現した。

白衣の上からでも分かる鍛え抜かれた筋肉と、戦闘経験を積んでいる事が分かる佇まい。伸びた不揃いの前髪の隙間から覗く双つの三白眼が凄まじい殺氣を放っている。

男はフイーニスの前まで歩を進めると、不遜にも至近距離で彼女の顔を覗き込んでみせた。

「君は……あの時の青年か」

「今はメツビヨーゲンだ。またよろしくな、ガラクタの親玉さん」

「おや、随分と行儀が悪いじゃないか」

二人の間に渦巻く殺氣、周囲の大気を震わせるほどの強大さに、ダルイゼンの口端が醜く歪んでゆく。

「安心しろ。コイツの強さは折り紙付きだ。お前達は100%勝てるさ」

真白い八重歯が、キラリと陽光に反射する。ここはデイベレイクタウン、全ての始まりの地である。

彼女に起きた変化は、ひなたにも分かるほどに、深刻さを帯びていた。

実害そのものは少ない。生返事が多くなり、昼休みに寝てしまう事も多くなつた。その程度で済んでいる。

問題は、彼女のザイアスペックの使用頻度が激増した事だ。かつては運動のみに使用していたそれを、今や彼女は学校生活の殆どに使用していた。

それは、先の服型メガビヨーゲンとの戦いからますます加速している。

A-Iの力は凄まじく、運動やノート取り、掃除などでその力を遺憾無く発揮した。その結果、のどかはクラスでも一躍注目される存在となつた。皆は彼女の頑張りを知っていたため、最早それに口を挟む事はしなかつた。

かくいうひなたも、彼女のノートに頼つている1人である。ちゆからは白い目を向けられる事はあつたが、ひなたはその度に口笛を吹いてごまかした。目の前に転がるダイアモンドを取らない盗賊はいないのだ。

そんなひなたが、のどかのパートナーであるヒーリングアニマル、ラビリンからの電話を受けたのは、一昨日の事である。

「はーい、こちら平光です！」

「その声はひなたラビね。実は、折り行つて相談があるラビ」

「ラビリンじやん！てか、どうやつて電話かけてんの？スマホつて心の肉球に反応すんの？」

「電話番号見るラビ!!置いてある電話の方からなら、ラビリンでもかけられるラビ。とにかく、相談つていうのは、のどかの気を、ザイアスペックから逸らして欲しいって事ラビ」

「なんで？ラテのお世話サボつてるとか？」

「いや、お世話自体はちゃんとやつてくれてるラビ。というか、ラビリンのお世話も含めて、完璧ないい子の日常生活をこなしてるラビ」「なら、いいんじゃない？A-Iの力つていいじゃん？スゲージゃん？」

「良くないラビ！最近ののどかが何時間寝てるか知ってるラビ？」

「えーと、8時間くらい？」

「日にもよるけど、5時間切つてるラビ」

「はあ!? マジ? ラビリン何で止めないのよ!!」

「止めてるけど聞かないラビ！このままだとのどか、いつか本当に倒れちゃうラビ！」

「それはまずい!! 安眠妨害はお肌の敵って、一番言うし!! よし!! ジやあこのひなたさんが一肌脱いじやいましょうか!!」

「本当ラビ!?」

「おう！アタシに二言は無いのだ！」

ひなたの武器は、自称想像力と挑戦心。パートナーであるニヤトランとの綿密な打ち合わせの末、計画は完成した。

そんなわけで二人は今、近くのショッピングモールに買い物に来て
いだ。

最初にひなたが選んだのは、比較的庶民的なブティックであつた。
服屋と呼んだラビリンは、ひなたに頭を小突かれた。

今、のどかは試着室の中である。ひなたのトートバッグの中からは、ラビリンが心配の面持ちで顔を覗かせている。

「休ませたいのに、何でこんなところに来てるラビ……本当に大丈夫
ラビ？」

「まあ、見てなつて」

「俺たちの秘策を信じろ」

いまいち不安が拭えないラビリンであつたが、謎の自信に満ち溢れた二人の言葉は頗もしくもあつた。

(ここは、ひなた達を信じてみるラビ)

やがて、試着室からのどかが姿を現す。白い七分丈のワンピース姿……一見するとシンプルな選択だが、スカートの模様の窓からは真白い肌が覗いている。

砂浜を歩く、健康的な美女と言つた風情だ。

「えーと、ど、どうかなあ？」

「おー、これはこれは」

頬を赤らめるニヤトランの頭を、ラビリンは思い切り引つ叩く。
(まつたく、これだから……)

腕をグルグルさせて抗議する彼に、ラビリンは腕組みで対抗する。
「あんなの、子供ラビ！ラビリンが若い頃はもつとこう、エレガンス溢
れる……」

「いいね！のどかっち、それめっちゃいい！」

「えー!?ひなたの目は節穴ラビか!?」

「黙つて見てろよ」

ニヤトランに押しつぶされ、今度はラビリンが口をつぐむ。気がつ
いたのだ、ひなたの目がキュッと細くなっている事に。

作戦開始の合図である。

ひなたはその身をくねらせながら、のどかの元へとにじり寄る。

「でも、何か足りない気がするなあ……何だろう。のどかっちはもつ
と大人っぽい感じで攻めたいわけでしょ？」

「攻め？……たいのかなあ」

のどかの瞳が泳ぐ。

おそらくはA-Iのオススメをそのまま選んだだけだったのだろう。
のどかの私服を知っているラビリンには、すぐに分かつた。

それを否定することで、ひなたはザイアスペックを捨てさせようと
しているのだ。悪くない作戦だ。

隣で、ニヤトランが得意げにウインクする。作戦は順調だということ
とだ。

戸惑うのどかに、ひなたが畳み掛ける！

「自分に正直になりなよ！」

その手には、いつ取ってきたのか、明らかにワンピースより布地の
少ない衣服があつた。たじたじになるのどか……勝機とばかりに、ひ

なたは身を乗り出す。

「その格好は攻めたいつて言つてるようなもんじゃん！もしかして、A-Iは教えてくれなかつたりして？攻めるにはこう、肩とか！」

「ひやあつ！」

「脇腹の露出を足していくわけですよ！」

「うー！無理だよ……そういうのは私には……つて、アレ？これ、私？」

ひなたはのどかの身体に衣服を押しつけてゆく。のどかの動きが止まつても、その猛攻が止まる様子はない。

「なんだつてえ？着るのか着ないのか、買うのか買わないのか!?どつちだい!!」

「う……うん！これに決めた！番頭、これ一つください!!」

「合点承知！……つて、ありり、自己解決？試着とかしなくていいの？」

首を傾げるひなたに、のどかは大きく首を縦に振つてみせた。
抱いた疑問はラビリンも一緒だつたが、直後にその答えはのどか自身の口から語られこととなる。

「ザイアスペックで、試着した時の格好が見れるの。こんなの、試してみようと思つた事なかつたから、驚いちやつて」

「あ、やつぱりそのメガネ、そういう機能もついてたんだ。おかしいと思つたんだあ……まあ、最初のチヨイスがね、初めて服選ぶつて感じじやなかつたもん。裏の、裏の、裏の、そのまた裏をかいてたからね」「それは表ラビ。無駄に分かりにくいだけの、ただの表ラビ」

ラビリンのツッコミは、2人には届かない。

すると、驚くべき事が起きた。おもむろにのどかはザイアスペックに手をかけ、するりとそれを外したのだ。突然の出来事に、1人と2匹から、どよめきが漏れる。

そんな彼女達の思惑など知る由もないのどかは、太陽のように笑顔を輝かせる。

「やつぱりすごいよ！A-Iのオススメもすごかつたけど、やつぱりひなたちゃんのやつの方が、似合う気がするもん」

「そうか……そうですかあ！いや、照れますなあ！てか！これ！アタシ！A-Iに勝つたって事だよね！それめっちゃ燃えるじゃん！」

「うん！ありがとう、ひなたちやん！」

周りの目も気にせず抱き合う2人。ラビリンの脳内でロツキーが勝利の雄叫びを上げる。

しかし直後、のどかはザイアスペックを掛け直し、おもむろにレジへと向かい始めた。

一同はその様子に、開いた口が塞がらない。

「あのー、のどかサン？何でそれ、かけ直したんですかね？」

「ここ、ザイアスペックつけてると、30%オフになるんだって。実は、お小遣いもそんなに残つてないし、ね」

「あー、うん、なるほどね。割引ですね。これは想定外。いやあ、ハイカラだなあ！」

レジへと駆けてゆくのどかを止められる者は、もはやこの場にいなかつた。ひなたも呆れ顔だ。トートバッグの中から、ラビリンがひよっこりと顔を出す。

「どうするラビ？」

「焦るな、ラビリン。アタン達には次の作戦がある」

「そうだ、俺たちに任せろ」

自信満々といった様子の彼等に、ラビリンはとりあえず託してみることにした。

結果は……散々であつた。

イチゴ1000%作戦、ニュルンベルクのマイスターージンガー作戦、V作戦……それら全てが、紙一重で失敗に終わつた。

あまりにも硬いのどかのガードに、ひなたもだんだん飽きてきたのか、作戦は次第に難になつていった。

そんな事をしているうちに、日も暮れ、2人の手から下がる紙袋の量は増え行く。最早純粹にショッピングを楽しむ2人の横で、2匹のヒーリングアニマルはやれやれと肩を竦めるのだつた。

特務機関A・I・M・S・本部の一角、真白いテーブルとライトスチールのみが置かれた四畳間ほどの広さの一室は、窓から差し込む西日で、辛うじて明るさを保っていた。入り口のプレートには特殊取調室とある。

向かい合うのは2人の男。

1人は、天津 核……世界有数の巨大グループ、ZAI Aエンタープライズの社長である。

余裕綽々な天津に対し、取り調べを行うA・I・M・S・隊長……不破 諫の表情は硬い。眉間のシワは川の字を描き、睨み殺さんばかりの視線とは裏腹に、その表情には明らかな焦りの色が見て取れた。勾留は今日で2日目……

卓上のグラスを取ろうとした天津の手を、不破の手がピシャリとはねる。グラスを掴み損ねた残念そうに空を舞い、やがて、いつも通りに膝下へと組まれた。

「俺達を襲つたツノ付きのマギア……アイツらは何なんだ」

「私に分かるとでも？ まったく、ヒューマギアの進化とは恐ろしいものだ」

「お前の差し金じゃないのか」

「敢えて自分の命を危険に晒す必要がどこに？」

不破の質問攻めを飄々と躲す天津。不破も慣れっこなのか、語気を強めて追撃する。

「通報のあつた暴走マギア、アレはお前が作つたモンだろう」

「どうやつて故意にヒューマギアを暴走させると言うのです」

「お前がゼツメライズキーを所持している事は調べがついている！ ラボに査察が入れば、すぐにわかることだぞ」

「反論はできますが、まあ、企業秘密と言つておきましょう」

「ふざけるなっ！ 人工知能特別法違反を始め、誘拐に監禁……お前の容疑は星の数だ！」

「身に覚えのない容疑が多いですね。私がいつ誰を誘拐したと言うのです」

「それはお前が一番良く分かつてゐるだろう……ツ！」

不破は潰れそうになる程に、拳を固める。彼がこれほどまでに焦る理由は単純明快……時間がないのだ。

国家、企業を問わず様々な企業が天津の技術提供を受けている。内閣官房所属のA・I・M・S・とて例外ではない。この場で彼は、本來客分以上の扱いを受けるべき存在である。

彼等がZ A I Aに反旗を翻した理由は一つ。

Z A I Aが滅亡迅雷・netの成立に関与した数々のグレーな証拠を足で集めた不破の強い説得に応じ、内閣官房が重い腰を上げたからである。建前は査察、その実は国家による一企業への強制捜査だ。命令は即座に警察庁へと通達され、令状の発行から強制捜査、天津の身柄確保までは最速で行われた。

事件の真相に迫るために手段を選んでいられない不破にとつては、まさに望んだ展開。もしZ A I Aのラボから起訴可能な証拠が一つでも見つかれば、より長くこの男をここに縛りつけることができる。そうなれば、ほぼ勝利は決まつたようなものだ。

しかし、それでもなお、彼の心中は穏やかではなかつた。

(これは、賭けだ。それも、限りなく勝ち目の薄い……な)

滅亡迅雷・netの脅威が去つたとはいえ、ヒューマギアは暴走を続けていた。その強さは日に日に増し、レイドマギアなる存在も現れ始めた。能力を持たないトリロバイトマギアだけなら現存の一般兵装でも対処できるが、レイドマギア、アークマギアのレベルともなると、まともに戦えるのはZ A I Aから借り受けた兵装しかない。

国が重い腰を上げたのも、その技術を手中に取めておきたかつたからに過ぎない。

しかし、この検査で成果が挙げられず、Z A I Aが技術協力を完全に絶つた時……それこそ機動隊でも動員しない限り、マギアの駆除は不可能となる。政府としてもそれは避けたいだろう。

もしこの検査が失敗に終わつた場合、真っ先に政府が考えるのは天

津のご機嫌取り。袖の下に添える供物としてお偉い方が差し出すのは、実行を指示した不破の首である。

絵に描いたようなトカゲの尻尾切りが行われるまで、あと少し。これは、彼の進退を賭けた戦いでもあつた。

（だが、それがどうした。俺はヒューマギアをぶつ潰す！コイツが今起きている事件の元凶なら、コイツもぶつ潰すだけだ！）

不破は懐から、桃色のプログラマズキーを取り出す。サウザーが変身に使つた『ローゼンリング』のキーだ。二日前に彼から押収したものである。

それを見てなお、天津の余裕は揺るがない。だが不破は、天津の視線が一瞬、それに吸い寄せられるのを見逃さなかつた。

（コレが、鍵か）

不破の視線が、これ以上ない程に鋭くなる。

「質問を変える……」このプログラマズキーを、どうやつて手に入れた「手に入れたらとは失敬な。これは我がZ A I Aの製品……君たちの使つているショットライザーと同じルーツのものです。私は今、世界を蝕む巨悪と戦う準備を進めている。こんな所に拘束されている暇は無いんですよ」

「何が巨悪だ。巨悪はお前たちZ A I Aだろう!!」

「おやおや、名誉毀損で訴えられても仕方がない言動だ。しかし、今は寛容でね。君がこの聖戦に名乗りを上げてくれると言うなら、新型のプログラマズキーをテストさせてあげましょ。それにより、君は更なる力を得ることになる」

「あ？」

不破の手が天津の襟を掴み上げる。あまりにも素つ頓狂な天津の言動に、不破の中の何かが切れたのだ。

「ふざけるな、何が聖戦だ!!俺はこの目で敵を見続けてきた。人類を滅亡させようと躍起になる、マギア共をな！そして、滅亡迅雷。netは壊滅させた。滅も俺達が拘束している。言い逃れは通用しないぞ」

「何も知らない野良犬君に教えてあげましょか。私が戦う敵は

ビヨーゲンズ。姿を持つた病原菌です。ヒーリングサウザーは彼らに対する特効薬なんですよ。もつとも、アレはまだ設計途中ですが」「未完成……だと？」

「……ふふ、これより先は、企業秘密です」

「なら何度も聞いてやる！その企業秘密を、喋れっ！」

激昂した不破が、騒ぎを聞きつけた同僚達に取り押さえられるまでに、そう時間はかからなかつた。

数人がかりで引きずられながら部屋を後にする彼の様子を、天津はさもおかしげに眺めていた。

E p i S o d e 5 : 【のどかのザイアスペック】

不破 謙が、刃唯阿の座る第二特別取調室の戸を開けたのは、騒ぎが収まつてから数分後の事であつた。

目は赤く充血し、唇は荒れている。精神の疲労がありありと表れているようだ。

もつとも、それを迎える刃の心中も、決して穏やかものではなかつた。格好こそいつもの通りであるが、ボタンはあちこちで解れ、髪も所々で縮れているその有様は、まさに虜囚そのものだ。

弱音が吐けるものなら吐きたいし、逃げ出せるものなら今すぐにも逃げ出したい。だが、眼前の男に弱みなど見せたくないと言う意地が、辛うじて彼女の瞳に辛うじて光を残していた。

先に口を開いたのは、刃だつた。

「不破……声が大きすぎるぞ。これでは丸聞こえだ」

「こここの設備を防音にしないのが悪い」

「滅が、いなくなつたらしいな」

「こここの警備がザルなのが悪い」

小学生のような言い訳に、刃の頬がわずかに緩む。不破もそれに気がついたのか、短く舌打ちをし、彼女の向かいへと腰を下ろした。

眉間にシワの寄り切つたその表情からは、やはり凄まじい疲労が見て取れる。無理もない、彼の敵はあの天津 峴……戦いの場から引き摺り下ろしたところで、一筋縄ではいかない相手だ。

その苛立ちの矛先が自分に向く事を、刃は一瞬危惧した。

しかし、その思考はすぐに改められる。自分は裁かれて然るべきなのだ。不破に対して、それだけの裏切りをしたのだから。

「話せることはすべて話した……煮るなり焼くなり好きにしろ」

「そうか」

不破が右手を上げると、彼の背後のドアの蝶番が音を立てた。入ってきたのは、女性の隊員だ。お盆の上のカツプからは、湯気が立ち上っている。

不破はコーヒーを刃に勧め、自分のものに口をつけた。ぎこちない

動きで刃もそれに倣う。

かつて、食堂で同じ卓を囲んだ日々。あの時の暖かい思い出は、Z A I A に帰還してからも彼女の記憶の中で生き続けていた。命の危険と隣り合わせの毎日だったが、不思議と、人の温かみを感じられる日々でもあった。

気がつくと、コーヒーはカップの中程まで減っていた。それを悟られたくない、刃はわずかにカップを自分の元へと引き寄せた。

「まさか、お前を尋問する日が来るとはな」

不破の声は、刃の予想に反して丸みを帯びていた。敵意による口撃ではなく、まるで世間話でもするような丸さだ。

「いつか、こうなる日が来るんじゃないかとは思っていた」

「前に言つただろう、私が敵に回る事があれば、躊躇なく撃てと。今のは、お前の味方にはなれない」

「なら、敵になるか?」

不破の目が、僅かに吊り上がる。相手の恐怖を察知し、肉の価値を値踏みする肉食獣の目。

この男の瞳がここまで迫力を持つてゐる事に、刃は改めて気付かされる。

胸騒ぎが、腹元を食い破つて心臓へと登つてくる。息がうまくできない……恐怖を押し殺すため、刃はコーヒーを含み、喉へと流し込む。安物特有の苦味が喉を焼き、それを和らげてくれる。

不破の圧に対抗すべく、刃は言葉を紡ぐ。

「少なくとも、Z A I A にはA. I. M. S. に敵対する意思は無い

……はずだ

『はず』か

「……正直なところ、私には社長のお考えが全く分からん。飛電とのお仕事5番勝負にしてもそうだ。だが、ヒーリングサウザーは過程に過ぎない、そもそも言つていた」

刃の発言に、不破の眉がピクリと動く。逆鱗に触れてしまつたから……取り繕おうとする刃だが、その暇もなく、不破の拳が卓上へと振り下ろされた。

怒りに満ちたその拳。

その原動力を刃は知つてゐる。彼の故郷、現在はデイブレイクタウンと呼ばれるその都市は、12年前、事故による大爆発によつて崩壊した。

しかし、それは政府によつて捏造された嘘つぱちの過去。彼の地で行われたのは、敵性ヒューマギアによる一斉放棄と、人間の虐殺である。

その場に居合わせ、幸運にも一命を取り留めたのが不破だ。しかし、その過程で彼は全てを失つた。その彼をここまで動かしてきたのは、一重にヒューマギアへの怒りなのだ。

「ヒューマギアを暴走させ、人を襲わせるのが過程だと!? ふざけるな!!」

激昂の矛先がZ A I Aに、自分に向けばどうなるか、想像はつく。狂信にも似た怒りは、やがて我々の全てを焼き尽くすだろう。

その炎を、刃は恐れていた。

「俺にはヒューマギアから市民を守る義務がある。答える、アイツは何をしようとしている!」

「知らない。私は何も!」

刃の呼吸が荒くなる。心臓がひどく音を立てて鳴り始める。かつて幾度となく味わつてきた錯乱、その最大級が、彼女を襲う。

不破は追撃の手を緩めない。狼の如く鋭い相貌で、真つ直ぐに彼女を睨み据える。

「お前が今提供した情報が、何千何万という命を救うかもしれない!! いや、俺が救つてみせる。答える……お前は何を知つてる!!」

「…………ヒーリングツド……サウザー」

刃の口について出た言葉を聞き逃さんと、不破は身を乗り出す。肌を破つて飛び出さんばかりに跳ね回る心臓をどうにか抑えながら、刃は言葉を紡ぐ。

「プロジェクト・ヒーリングツドサウザー、全ての傷を癒し、何度も蘇る、究極の戦士を造る計画だ。詳しい内容は、聞かされていない」「ヒーリングツド、サウザー、だと? 俺と戦つた例の臍脂色のサウザー

の事か

「違う。アレはまだ第一形態だ。天津の言うには、アレには次の形態が存在する」

「なるほどな。いい情報が聞けた」

不破は議事録を取つていた隊員に目配せすると、おもむろに立ち上がつた。

天津の元へと行くと、容易に想像がつく。不破が尋問を行えば、計画について話した事も伝わる。そうなれば、全て終わりだ。

天津から口止めをされていたわけではなかつた。だが、守り続けた秘密の暴露を通じ、心に去来したのは、意外にも安息と希望であつた。

『これで楽になれる』

そんな思いが、彼女の心の中を満たしていた。

「なあ、不破……私は」

「なんだ」

「……いや、何でもない。忘れてくれ」

口をついて出ようとしていた言葉が何だつたのかは、刃自身にも分からなかつた。

それを振り返る間もなく、非日常が彼等を襲つたからだ。

刃の後ろの壁が、突如として爆裂したのだ。反射的に机の下に逃れた彼女は難を逃れたが、今まで座つていた椅子は見るも無残にへし折れていた。

裂け目から外を覗く不破から、舌打ちが漏れる。腰元のショットライザーに手が伸びたことから、刃にも敵の正体に予想はついた。

「マギア共が!!」

「しつこい連中だ……前回の襲撃と言い今回といい、どうやら狙いは私達Z A I Aらしいな」

「あの数……6……10……いやもつとか。厄介だな。お前はここで、奴を守れ」

差し出される大きな手。

その手の内には、ショットライザーと、二つのプログライズキーがあつた。

「いいのか？」

「お荷物が2人になるよりはマシだ！」

不破の手から受け取ったそれを、刃は腰元へと巻きつける。蒼身の銃は記憶の中のそれよりもずっと重たく、ずっと固かつた。

夕刻。私達はベンチに座つて休んでいた。

ショットピングモールは人もまばらで、昼間の喧騒はどこへやらといつた様子だ。大型玩具量販店の袋を抱えた子供が、はしゃぎながら両親の背中を追いかけてゆく様子に、思わず微笑みが漏れる。

今日1日の買い物を通して、のどかについて色々なことがわかつた。大雑把にまとめるに、彼女は初心者だ。モノの選び方、探し方、その驚きよう……全てが、初心なのだ。

彼女にとつて、今日の全ては不慣れであり、何でもないこのモールは、異国之地のように映つた事であろう。

（それでも、選ぶモノがすごいのは、つけてるメガネのおかげなのかなあ）

手提げ袋が作る山を見ながら、のどかは頬を緩ませ、上機嫌に脚をばたつかせている。右目についたザイアスペックの赤ガラスが、陽光をキラリと弾く。

夕陽が建物の影に隠れた頃、のどかは口を開いた。
「ひなたちやん……今日はありがとうね」

その笑顔の眩しさに、一瞬視界が眩みかける。

眩しいだけじやない、その奥に垣間見える淡い影が、いつそう私を惹きつけるのだ。

「のどかっち、かわいいね」

「ひなたちやん？」

のどかはキヨトンとした表情でこちらを見つめている。そりやそ

うだ。いきなりこんなことを言われて、戸惑わない人間はいない。何を言つてるんだ私は。相手は友達で、しかも女の子なのに。でも、可愛いのは間違いないわけで。

おつと、話を戻さねば。

「こつちこそ、ありがとう！のどかつちと買い物するの楽しくてさ！今日はいつも以上にめつちや頑張っちゃいましたから！」

「頑張つてた、よね。ひなたちやん、やつぱり、すごい、なあ」

「そりやまあ、アタシはこの道のプロだからね。でも、本当に今日は楽しかつたよ」

「……うん。私も、楽しかつた、から」

喋つている最中に3度、のどかのまぶたは落ちかけた。頭は左右にふらふらと揺れ、その度に桃色の前髪が彼女の目元に影を落とす。会話もままならないという事は、余程疲れているのだろう。私の視線に気がついたのか、彼女はフルフルと頭を振り、調子を戻した。

「のどかつちは……お疲れムードかな」

「ごめんね。頑張り過ぎは、いけないって、気をつけてる、のに」

「頑張りすぎかあ。アタシはのどかつちに助けられてるけどなあ」

「うん。えへへ……」

途端、のどかの身体がぐらりと揺れた。重心のコントロールを失った細い体は、私の胸へと吸い込まれる。

「はあ……はあ……」

眠気が限界に来たのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。

呼吸は不規則になり、横顔から微かに見える目はギュッと閉じられている。肩に食い込んでる指の力が、尋常じやないくらいに強い。（これ、めつちや苦しいんだ）

生まれてこの方、病院で何度も見てきた動物達のそれと、彼女の姿が重なる。

「ほんとに大丈夫!?」

「こりやヤバイぜひなた！」

「大丈夫、いつもの、事だから……つ」「でも！」

「本当に、大丈夫……ッ!! 大丈夫、だから」

のどかの呼吸は次第に静かになり、乱れも収まつていった。食い込む手の力が弱まつたことで、肩の辺りが解放される。

カバンの端から覗くラビリンは、顔に憂慮の表情さえあれ、驚いていなかつた。つまり、これを見るのは初めてではないという事だ。こんな事が、いつも続くようになるまで、この子は頑張り続けてたんだ。ラビリンが心配するわけだ。

（のどかたちにコレ渡したやつも、酷いことするもんだな。こんな事になること、予想できなかつたわけでもないでしょ）

でも、1番の問題は、そこじゃない。のどかがいつも、こんなのに一人で耐えてたつて事なんだ。

ザイアスペックなんて少しづるいとさえ思つてた。けど、この子はみんながいないところで、ずっと苦しんで、頑張つて……
（それつて、なんか悔しいよ）

やがてのどかは、ゆっくりと身体を起こした。その途中で2度、ふらつきかけた彼女を、私は支える事ができなかつた。

夕日が影を作り、のどかの顔が見えなくなる。目を擦ると、たしかにのどかの顔はそこにあつた。そのくらい、儂いのだ。

「いつも、こうだつたりするの？」

「頑張りすぎちやつた時だけだよ。少し休めば、すぐに良くなるから。でも、ひなたちやんのおかげで、今は少し楽だつたかなあ」

「アタシの？」

「ひなたちやんといると、なんだか安心するんだよ。ちゅちやんが前に立つて守ってくれる感覺だとしたら、ひなたちやんは背中を守つてくれる感じなんだ」

そう話すのどかの、上目遣いの視線は、あまりに弱々しくて、蠅燭の炎みたいに吹いたら消えてしまいそうで。ザイアスペック越しの瞳の中に輝く仄かな光の青さは、何だか少し怖くさえあつた。

彼女の手に、手を重ねる。のどかの手、すべすべした、それでいて温かな、細い手だ。

ザイアスペックの奥の右目が、心細げに私に訴えかけてくる。その

目のなんと優しい事か、その輝きのなんと美しい事か。

「ねえ、もうちょっとだけ、こうしててもいい?」

私は返事をする事もできず、私は己の手の自由を彼女に委ねた。のどかの視線は、影に隠れたモールの一角を見ている。手に込められる力が、キュッと強くなる。

「私、怖いの」

「何が? おばけ?」

のどかは、フルフルと首を振る。

夕陽のせいで、また彼女の表情が曖昧になる。

「私が、私でなくなっちゃうみたいで」

「どういう事?」

「この前、ちゅちゃんに言われたの。のどかは身体を使いすぎだつて。でも、休んだら、前に戻っちゃう気がして……」

前つて……たしかのどかはここにくる前に、病院にいたと言つていた。そのせいで、身体がうまく動かせないとも。

みんなと違う身体、みんなと違う人生、その中で生きてきた彼女の事を、私はどれだけ知つていて?

これまで生きてくる中で、私自身いろいろな事をしてきた。家の手伝い、友達、学校……それら全てを経験しないまま、いきなり学校に放り込まれたら、どうする……?

もしかして、のどかはみんなと近づきたいんじゃないかな。
ここに来て初めて、思い至る。

彼女をここまで追い詰め、駆り立てる動機。それはもしかすると私が今持つて、当たり前の日常なのかもしれない。

沈黙を破り、のどかは続ける。

「ザイアスペックのおかげで、疲れても大丈夫なんだけど。時々、息が苦しくなって、ダメになっちゃいそうな時があつて……でも、みんなに心配かけちゃうから、そんなの見られちゃダメって思つてて……でも」

のどかの声は、だんだんと弱くなり、聞こえなくなつていった。
時に鼻声が混じり、喉が鳴る……その度に、目の前の、彼女の体が

小さくなる。

この子がこうなつてしまつた原因はわかつた。その対処法も、思いつかない事はない。かけてあげたい言葉なんて、決まつてる。

でも、私にその勇氣はあるんだろうか。のどかを助ける覚悟が、私にはあるのか。

「ねえ、ひなたちゃん。私、どうしたらしいのかなあ？」

のどかは、苦しそうだ。

私は反射的に身体を引き……固く、拳を握りしめた。それこそ強く、罰になるくらいに。

（違うでしょ。ここで退いたら、平光 ひなたじやないでしょ。のどかは私の何？赤の他人？知り合い？……違うじやん。違うじやん!!）

のどかは、めっちゃ大事な友達じやん!!

爪が食い込み、少しだけ血の滲んだ手を、のどかの方へと伸ばす。狙いは右目、そこにつけられた、赤いメガネだ。

「よーし!!!じゃあ、こうしよう」

「あつ……」

短く声が上がる。無理もない。今まで彼女を律していたものが取り上げられたのだ。反射的に伸びてくる手を取り、私はズイと身を乗り出す。ここからは、私の領分だ。

「これ、アタシが借りる。のどかっちが辛くなくなるまで、ね。どうしても必要な時は、どこにでも届けに行くから。それでどうかな？」

「……ダメだよ。それが無いと、私……それに、ひなたちゃんも迷惑でしょ？」

そう言うと思つた。今の言葉、本音は後半だ。前半は建前に過ぎない。

彼女にとつて、他の人の事は自分の事より大事なんだ。今の時代、めっちゃ変わつてて、とつても優しい子。撫で撫でしたくなつちゃうくらい、いい子。

（だから……）

「その代わり……」

（私も意地でも助けになつてやるんだから）

「アタシが、のどかっちのザイアスペックになる。辛い時、苦しい時、のどかっちを助けるから。だから、もう一人で辛い思いしちやダメだぞ！」

のどかは、呆けた顔のまま固まってしまった。少しだけ跡のついた右目が、パンダみたいで可愛いなあなんて事を考えて、なんか変な事言っちゃつたなあって。

そして、自分の発言を思い返す。

あれ、これおかしいぞ。私がのどかのザイアスペックになるつて、勢いで行つちゃつたけど、それってつまりアレ……？

思考の整理がつかないが、とにかく、弁明せねば。

「な、なーんて、流石にダメだよねえ。うん、今のはちょっとおかしいぞ」

「…………」

「だいたいこんな高いやつアタシが持つても宝の……つて、どしたの!?」

のどかは、泣いていた。

彼女自身も泣いているのか分からぬよう、あまり変わらない表情の中で、ただ確かに涙を流していた。

（なんで泣いてるの？やつぱり、取られるの嫌だつたかな？それとも、何かの副作用？）

ぐるぐるする思考の中で、視界の中の彼女は、たしかに泣いている。やがて、彼女の端正な顔立ちが崩れる、くしゃくしゃに折り紙を丸めるように……そこから、拍車がかかった。

とめどなく溢れる涙をどうしていいか分からぬとばかりに、彼女は何度も何度も、袖で目を擦る。買つたばかりの服が、塩っぽいシミで染まつてゆく。

「わかんない……わかんないの……ぐすつ……」

「か、返そつか？」

差し出した私の手に、彼女は首を大きく、それこそ何度も振つて答えた。

「私、どうしてもみんなと同じになりたくて……みんなの声も聞こえ

なくなつて……帰れなくなつて……ひなたちやんがいなかつたら、私……」

何度も何度もつつかえながら、全てを語りきつた彼女は私の胸の中へと飛び込んできた。

まるで元からそこにあつたかのように、彼女の頭は、涙は、暖かさはすっぽりとおさまつた。

手は、泣きじやくる彼女の頭に伸びていた。妹がいたら、こういう気持ちになるんだろうなと、思った。

「よーしよし。泣きたくなつたら泣いちゃえ。一人で頑張る事はないぞ！」

「うん……えーん……えーん……ううう…………うん…………」

「心配しなくとも、今ののどかつちが、アタシは一番好きだからね！」のどかは、ここ2週間分の辛さを吐き出すように、ひたすら泣き続けた。目の中の涙なんて全部なくなつちやうんじやないかつてくらい、たくさん泣いていた。

ラビリンも目を潤ませて、なんだかもらい泣きしちゃいそうな時間が何度もあつて、そんな時は、ニヤけてるニヤトランの方に物を投げて耐えた。

やがて、泣き声が止んだ。

「おーい、のどかつち？どうした？」

ゆすつても、さすつても、返事がない。彼女の頭は、私の胸に埋まつたまま。呼吸はしている。が、なんだか様子がおかしい。

そのままのどかは目を覚まさなかつた。

それからは、大変だつた。眠つてしまつたのどかつちを起こすために、私たちは散々手を尽くした。耳をほじくつたり、お腹をくすぐつたり、クラシックを聞かせてみたり。

けど、全部ダメだつた。お医者さんがあつたには、原因の分からぬものらしい。なんでこんなことになつちやつたんだろう。

『のどか、目を覚まして！』

「……………」

『お前がいなくなつたら、誰がラテ様を守るんだよ！』

「……………」

どれだけ声をかけても、のどかたちのまぶたは、ピクリとも動かない。

落ち込む私達の前に、突然、彼は現れた。

彼は白馬の王子様みたいに白い服を着てて、私達の見守る中で、彼女に口づけをするのだつた。

「はたしてのどかつちは、目を覚ますのだろうか。次回に『期待！』はい、アルトじゃないとー！」

「紛らわしい朗読をやめるラビ!!」

「ニヤハハ!!まあ暇だからな!!それにして、ひなたの朗読もなかなかのもんだな！才能あるぜ」

「ありがとーこう見えても、そういうのは得意ですから」

あの後、のどかは寝てしまつた。とはいえ、それはさつきふざけていたように深刻なものではなく、単なる疲れから来るようなものだったみたいだ。今では寝言まで言つてゐる。

ショッピングモールはもう完全に夕闇に沈み、お店にもシャツターゲが下りきつてゐる。警備員さんに見つかりそうなのはちよつと怖いけど、こんな時間帯のモールを見るのは、少し面白くもある。

思い出されるのは、のどかの言葉。

『ひなたちゃんは、背中を守ってくれる感じなんだよね。ひなたちゃんが側にいてくれると、安心するんだ』

なんて温かな、信頼に満ち溢れた言葉だろう。けれど、今の私に、その純真な信頼に応える資格はないかもしない。いや、私だけじやない。きっとそんな資格は、どんな王子様でも持つてないんだ。

桃色の髪はサラサラで、程よく指に絡む。触れられる距離に、天使

がいる。天使の髪は桃色、瞳も桃色、肌は真っ白。

こんな子を可愛いと思つてしまふのは、いけない事なんだろうか。

「つて、何を考えてるんだ！」

考えが、口から出でしまつた。慌てて口を抑えるが、もうラビリンにもニヤトランも聞こえてしまつたようで、二人ともポカンとしている。

かあつと、頬が熱くなる。

「なんだなんだ、何を悩んでたつて？」

悪戯つ子のように詰め寄るニヤトランを睨みつける。多分、今年最大級の睨みだ。彼は「おーこわ」と、バッグの中に退散していった。

「ひなた、どうしたラビ？」

「なんでもない！ちよつと、のどかの頭が重いなーなんて考えてただけ

「頭は誰でも重いラビ」

「まあ、確かにね」

「ともかく、作戦は成功ラビ。これでのどかも、ゆっくり休めるラビ」

それを聞いて、今日ここにきた目的を改めて思い出した。そうだ、のどかを助けにきたんだ。

色々あつたが、最終的にのどかを忙殺の魔の手から助けることができた。しかも、膝枕までできてしまつていて。

しかし、困つた戦利品までゲットしてしまつた。

「それで、そのザイアススペック、どうするんだよ」

「うーん、どうしようかなあ。借り物なわけだし、下手に使うわけにもいかないよね」

さりげなく、ザイアススペックを握つた右手で、右目を押さえてみる。

なんだこれ、なかなかうまくいかない……あ、ハマつた。

「つて、言つてる側からつけてるラビ！」

ラビリンからの鋭いツツコミに、心臓が跳ねる。仕方がないのだ。女子中学生は、猫をも殺す好奇心で動いている生き物なのだ。

「ダメラビ！のどかの惨状を見て知つてるラビ！」

「ちよつとだけ、ちよつとだけね！ニヤトラン頬んだ！」

ニヤトランがラビリンを押さえている間に、ザイアスペックのスイッチを入れる。

眼前に広がるのは、変な数式の羅列。そして、『Z A I A S P E C M O D E L : S』の文字。

それも一瞬の出来事であり、すぐに右目にはいつもの視界が戻ってきていた。何かをつけている感覚も無い。

これは、なんなんだろう。

そんな事を考えていた時だつた。

背筋の毛が、全て一気に逆立つたのは。

「コレは、ヤバイね」

ラテの様子を見なくとも、直感的にわかつた。近くに何かやばい奴がいる。

ニヤトランとラビリンも気がついたようだ。二人とも臨戦態勢をとつてている。

「おい、ひなた。分かってるな」

「当然!」

そつとのどかの頭をベンチに寝かせ、立ち上がる。ニヤトランは肩に……買い物袋は既に、ヒーリングルームバッグの中に入れた。準備は整つた。いつでも出発できる。

「ラビリンはのどかを守るラビ。いざとなつたら、さつき買ったこのハリセンハンマーがあるラビ！」

「任せたよ、ラビリン」

そんなもの頼りにならないとは分かっていたけれど、ラビリンがいるなら、きつとのどかを起こしてくれるだろう。

敵の気配は、徐々に近づいている。早く迎え撃たないと、のどかを巻き込んでしまうかもしれない。

「ひなたちやん……」

のどかの寝言が、私の後ろ髪を引く。

無防備にも開ききった口が、弛緩しきつた身体が、私を引き留めようとする。

けれど、私はいかなければならない。

「大丈夫。アタシが守つてあげるよ、何があつてもね」

そう言い残し、安物のブーツは地を蹴つた。天使の敵を倒すために、天使の笑顔をもう一度見るために。

飛ぶように進む身体は、やがて狂気の源へとたどり着く。見なくても分かる、見ればもっと分かる、ヤバい奴ら。

場所はショッピングモールの地下駐車場。そこにいたのは、二人の青年だつた。一人は長身の、白衣を纏つた男、もう一人はボロのフード付きコートに身を包んだ男。

二人とも、凄まじい霸氣を放つてゐる。

「ねえ、メツビヨー君！この子すゞいよ。僕たちが迎えに行こうとしてたの、わかつてたみたい」

「ああ、期待できそうだな。コイツを狩つたら、次はキュアグレースだ」

「そうだね！じゃあ、ここはまず僕が！」

歩み来る男に、反射的に右足が下がりかかる。だが、頭の中に浮かんだのどかの寝顔が、それを止めた。

（逃げちゃダメだ。しつかりしろよ白馬の王子様。のどかを守るつて決めたんだからさ）

震える右足を、一步前に踏み出す。

「なあに勝てるつもりで話してゐのかなあ。何を隠そう、アタシはキュアスパークル！スーパー強い、プリキュアなんだから！」

「行こうぜひなた。俺たちでのどかを守るんだ」

肩の上のニヤトランは、やる気満々だ。彼がパートナーでいてくれて、本当に良かつたと思う。

いつもはふざけてゐるけど、なんだかんだで、私の背中を押してくれる。

「もちの論！プリキュア・オペレーシヨン！」

「エレメントレベル、上昇ニヤ！」

「キュアタツチ！」

ヒーリングステッキが金色の輝きを放つ。光は身体を包み込み、身に纏う衣装を『戦いの装衣』へと変えてゆく。

私……平光 ひなたが、キュアスパークルへと変わつてゆく。
その瞬間、視界の中で、何かが揺れた。

『Z A I A S P E C : B a t t l e A s s i s t S y s t e mS T A N D B Y』

「溶け合う二つの光……って、おいおい、なんだこれ？」

眩いばかりの虹色の光の中で、左腕だけ妙に重い……見ると、腕には、金色の鉤爪がついていた。

どう見たつて金属製、何ならレーザーとか出そうなくらいに近未來の……明らかに違和感満載の武器だ。

こんなものは、前の変身では出てこなかつたはずなのに。

「えーと、なんなんんだろうね」

謎の2人の男、謎の鉤爪。浮かび上がるいくつもの謎を、ひなたはシャツ脱ぐアクトする。

今は、戦う時だ。使えるもんは、なんだつて使つてやる。昂る戦意に応えるように、胸につけた星のペンダントが、眩いばかりに輝き出す。

「アタシはキュアスパークル、さあ、どこからでもかかつてこい！」

「いくよ……僕は迅、仮面ライダーだ！」

「かめん、らいだーか……なんか、カッコ良いじやん！」

かくして、戦いの火蓋が開いた。黄昏時、すこやか市の各地で、歯車は動き出す。

E p i S o d e 6 : [爆ぜる水流と墮ちた星]

今朝、ひなたと喧嘩した。

内容も覚えていないくらい、実に他愛ない喧嘩だった。

『もういい！ちゅちーなんかお買い物計画誘つてあげないし！』

『いいわよ。別に行きたいとも思つてなかつたから』

売り言葉に買い言葉で、沢泉 ちゅはお買い物会から離脱することになった。

重ねて言うが、喧嘩そのものは本当に大したことではなかつたのだ。事実、昼には謝罪のメッセージも飛んできた。

その頃には日々のロードワークを済ませており、宿題も終わつていた。

山の端にかかる春の夕陽を眺めていると、ふどのどかの顔が浮かんできた。

ちゅの頭の中で、疲れ顔ののどかが、たくさんの紙袋を抱えながら走り回る。

(ひなただけに任せておくのは、不安ね)

そう思つて外に出た頃には、もう空には暗がりがかかつっていた。思えば、少し軽率すぎたかも知れない。

「こ、ど？」

暗がりの中で、道に迷つてしまつたのである。

見渡す限りのビル群、ガラス張りされた高層建築物の列、見覚えのない街並みが彼女を取り囲んでいた。

「こんなところ、近くにあつたかしら？」

「ボクに聞かれても……この事は、ちゅの方が詳しいペエ」

「そうよね。でも、何だかワクワクするわね。このまま大きなトンネルでも出てきて、そこを潜ると大きな旅館がありました。なんてことがあつたりして」

「何の話ペエ？」

「映画の話よ」

そんなこんなで話をしていると、前方に人だかりが見えてきた。

赤い服と仮面を身につけた人ばかりが、とある建物に押し入ろうとしているらしい。

建物の近くの車両には、桜の代紋が刻まれている。警察関係のものだろうか。

彼らは手に棒のようなものを持ち、建物の前に築かれたバリケードを破ろうとしている。

（あれ、デモ……かしら？）

ちゅも、よくニュースで過激なデモの話は見聞きしている。だが、乱闘騒ぎにまで発展するものは海外の話だと思っていた。

ペギタンを抱え、足を早める。

「この町でデモなんて、初めてじゃないかしら」

「デモ？」

「自分の考えを、数で押し通そうとする人達の集まりよ。大体は健全な主張をしてるんだけど、アレはちょっとやりすぎね。ああ言うのには近づかない方がいいわ」

しかし、言葉とは裏腹に、ちゅの内側には好奇心が沸沸と湧き上がりつつあつた。

この町は地方行政と住民の関係性も悪くないし、変な汚職事件も聞かない。ましてや警察に対するデモなんて前例があるのだろうか。

（少し覗いてみようかしら）

顔を前に向け、視線だけを向けながら、デモの後ろをゆっくりと通り過ぎる。こうすれば、見つかる事はないだろう。

デモ隊は先頭の髑髏面の人物に連なり、軍隊のように一糸乱れぬ動きで攻撃をしている。

動きたびにガシャガシャと音がするのは、隙間なく身に附けている

鎧のせいだろうか。
奇妙な集団だが、ちゅには、彼らの頭から生えている触覚に見覚えがあつた。

（あの触手の色、メガビヨーゲンに似てるわ）

もしあのデモ隊がメガビヨーゲンの仲間なら、放つておく訳にはいかないだろう。

(さて、どうしようかしら)

思案していると、背後に気配があつた。

慌てて振り返ると、そこには他のデモ隊とは違う、髑髏の面をつけた人物の姿があつた。

いや、人物と言うには少しちがうかもしない。その人型は全身をくまなく装甲で覆っていたのである。

「沢泉 ちゅ、キュアフォンヌだな」

声がくぐもつていてよく聞こえないが、どうやら男性らしい。

それよりも驚くべきは、彼がちゅの正体を言い当てた事である。プリキュアの正体は秘密のはず、それを知っているという事は、やはりビヨーゲンズの一昧なのだろう。

髑髏の面には驚かされたが、敵と分かれば怖くはない。

ちゅは毅然とした態度で男性に向き直った。

「初対面の相手には、まずは自分から名乗るべきじゃないかしら」

「……暗殺とでも呼べ。ともかく、これからお前を暗殺する」

「アンサツ……それが名前なの？ マッドトリンとかホラーマンじやなくて？」

「なんだそれは。ともかく、お前が俺の名前を気にする必要はない。今この場で始末するのだからな」

気がつくと、四方は子分たちに囲まれていた。子分達の手には、真っ赤な刀や銃が握られている。やられたら痛そうだ。

「なんか色々ツッコミ所はあるけど……大変な事になってきたわね」敵の親玉っぽい怪物……アンサツはちゅの正面に立ち、構えを取る。周りの子分たちもやる気満々と言つた様子だ。

これはまずい状況である。

これだけの数を相手できるかも問題なのだが、ここで戦えば警察官の人々を巻き込んでしまう。ビヨーゲンズは人の手に余る敵……どうにか被害は出したくない。

少し考えた末に、妙案が浮かんだ。

「うん、これしかないな。

「ペギタン、行くわよ！」

「うん！」

ちゅはヒーリングステッキを天高く掲げ、水のエレメントボトルを装填する。

「プリキュア・オペレーション！」

「エレメントレベル、上昇ペエ！」

2人の心が重なり、ステッキの頂にはめ込まれた宝石が青く美しい輝きを放ち始める。

「キュアタツチ!!」

光は身体を包み込み、身に纏う衣装を『戦いの装衣』へと変えてゆく。

子分たちが眩しさに顔を覆う中、沢泉 ちゅはキュアフォンテヌスへと変身を遂げていた。

「交わる二つの流れ……キュアフォンテヌ！」

ポーズを決めるフォンテヌに、アンサツは「フン」と鼻を鳴らし、武器を構える。周囲の部下達も彼と同じ構えだ。その一糸乱れぬ統率は隊の練度の高さを表しているようだ。

「いいだろう、暗殺開始だ」

「ふふ、かつこいいわね」

言うや否や、フォンテヌは飛んだ。高く高く、空へ。そのままビルの壁を蹴り、建物伝いに走つてゆく。

「……は？」

アンサツ達が見上げる中で、フォンテヌの身体は彼等とはあさつての方向へ進み始めた。

「それじや、さようなら」

呆気にとられるアンサツ達を尻目に、水流を纏つた青い身体は鳥のようにビル群のむこうへと飛翔していった。

モールでの戦闘は、幾度となく攻守を変えながら続けられていた。戦闘開始直後、キュアスパークルは圧倒的不利に立たされていた。

原因は二つ、慣れない『爪』という武器と、迅の飛行能力の高さである。

変身した時、なぜか現れた黄金の鉤爪。これのせいで、右手が上手く使えないのだ。

さらに、迅の空中殺法は高速にして俊敏。狭い地下駐車場だとのうに、スパークルの放つ光線はその身をかすめもしない。

迅の優位は搖るぎようのないものであつた。

しかし、それは5分前までの話である。

彼女は今、爪を完全に使いこなしていた。理由は単純明快『爪の刃がたためることを知つた』からである。

「やつぱり、女の子はパンチっしょ！」

黄金の爪、改め、黄金の拳。

彼女の手をすっぽり覆い隠すくらいの大きさに留まつたそれは、煌々と赤く光り、その内部に凄まじいエネルギーが内包されている事を暗に示している。

事実、攻撃力は飛躍的に増大していた。

プリキュアの力で強化された脚力で地を蹴り、迅へと蹴りを放つ。躊躇のできるはずの攻撃を、迅はあえて左腕で受け止めた。

黄金の拳を前にしても、彼には絶対に勝てるだけの武器があつたのだ。

迅の新たな武器『バイラススケイル』。ビヨーゲンズから授かつた硬質のウイルスを結晶化させ、己の身を守るというものである。

この極細微小のウイルスは、煙のように纏わり付き人体の機能を弱め、鋼鉄すらも腐食させる。そして、自分の周りにある限りは、鉄のハンマーでも砕けない、絶対の盾となる。

事実、脚撃により地面に叩きつけられた迅の損傷は軽微である。考えなしに突つ込んでくるスパークルを迎撃する事など、容易。……なはずだつた。

スパークルの攻撃は、ウイルスの硬化など意に解さぬように、繰り出され続けていた。

「とりやつ!!」

上空からの落下加速を伴つた、大上段からのかかと落とし。迅の二の腕にヒールの先端が直撃し、凄まじい火花を散らす。

「ううっ!? 何だよ、この子の一撃……すつゞい重い!!」

後退した迅を、さらなる追撃が襲う。着地した彼女の、黄金拳による猛撃だ。

右、左、右、左と撃ち続けられるデンプシーロール。肉が鋼を打つ鈍い音が響く度、迅の腕の装甲が剥がれ落ち、体幹が崩れかける。「まだまだ行くよっ！」

「その調子だぜ！」

デンプシーの速度を上げてゆくスパークル。

だが、迅もやられるばかりではない。

「まーけーる、かっ!!」

スパークルの右鍵拳をスウェーでいなすと、迅は素早く身を低く落とし、展開した右の翼刃で斬りつけた。

コンマ数秒の間に行われた一連の動作。

フライングファルコンのログライズキーがもたらす身のこなしの軽さと、単純かつ圧倒的な攻撃力こそが、彼の最大の武器である。しかし、その攻撃はひなたの衣服を軽く切り裂く程度に止まつた。

迅の攻撃の中でも、最速を自負する攻撃であつたはずの一撃……重ねて繰り出す舞の如き連撃も、全て紙一重で見切られる。迅の拳動に、焦りが表れ始める。

「もう！ 何で当たらないし」

「さあ、何でだろ!!」

「それムカつく!!」

超速の連撃を躱す仕組みは……実のところ、スパークル本人にも分かつていなかつた。

そもそものはず、スパークルの急激な動体視力の強化、それはザイアスペックのなせる技だからである。

のどかに渡されたザイアスペックにのみ搭載されている新機能……それは、戦闘補助システム。機能は主に二つ。

『敵の拳動から最適な行動を予測するそ機能』そして『使用者にとつて

最適な武器をその場で生成する機能』である。

この二つを、選択というプロセスを介さず、A.I.が独自に行うこと
で、高速戦闘が可能になるのだ。

言うなれば、『飛電或人並みの戦闘技術を誰でも手に入れられる』シ
ステムである。

本来これは、天津が対ゼロワン用の切り札として開発していたもの
である。しかし、現状ヒーリングステッキ以外の武器を持たないプリ
キュアの補助にあたり、このシステムは想定以上の力を發揮してい
た。

「もう、いい加減に当たつてよ！」

乱雑に繰り出され続ける迅の舞。

その間に生まれた一瞬の隙間。

そこに、ひなたの拳がねじ込まれる。

鳩尾にヒツトした打撃、ヒューマギアである彼にとつて、その部位
は急所ではない……だが、怯ませるには十分なダメージだ。

「今度は、アタシの番！」

直後、スーパークルの猛攻が再開された。

左右のフックによる連続攻撃。

止んだかと思えば、今度は駐車場の柱を蹴つてのかかと落とし、崩
れた体勢に、間髪入れずに下段払い。

迅の体幹は硬く、それでもわずかに揺れるだけにとどまつた。だ
が、機動を制限された迅の戦闘力は、大幅に低下したと言える。

ザイアスペックの提示するコンマ数秒の最適解を、強化されたひな
たの動体視力が選び抜く。

まさにベストマッチの組み合わせである。

度重なる攻撃により下がりつつある迅のガード。飛ばせない、撃た
せない、この徹底した二つのマークは、確実に迅の機動力を削いでい
た。

紙一重でガードが間に合っているものの、迅の中には明確な焦りが
生まつた。

(コイツ、まるでの時のゼロワンだ)

生み出された一瞬の躊躇い、そこにスパークルの左拳が直撃する。

狙われたのは顎……迅の視界がわずかにぐらつく。

「うう……」

訪れた大技のチャンス、無駄にするわけにはいかない！

「ぶちがましてやるニヤ！ひなた！」

「やつちやうぞお！」

ひなたの身体が、大きくしなる。

大きく逸れた上体が、大技を予感させる。迅にとつて致命的な一撃となる大技。

しかし、その仮面の奥で、迅は笑った。

「……なんちやつて！」

ふらつきはフェイント。

本命は、飛んでくる大技へのカウンター！

迅にとつて、最大のチャンスである。

狙いは人体有数の弱点、頭部。背に隠し持っていたアタッシシュガンの銃口を高速で突きつけ、間髪入れず眉間に銃撃する。

高速で放たれる銃弾、しかし、それは空を切る。理由は一つ、直前で彼女の上体が、彼の予想以上に後方へと逸れたからだ。

スパークルは迅のフェイントを読んでいたわけではない。むしろ逆、彼女にとつてはこれが予定行動である。

【頭突き】

人体を構成するパーセンテージの内、一番重さの比重が傾くのはどこか……答えは、頭。頭蓋骨の重さは、体重の10%程……この重さは、13ポンドのボウリングの球に匹敵する。

通常の人間が頭突きで与えうる重さは2トンを超えない。しかし、今のはひなたはニヤトランとのシンクロで強化された肉体。

敵の攻撃を寸前で見切ると同時に、足裏、ふくらはぎ、太腿、背、両背側、そして首周りの6箇所の筋肉をフルに活用。

プリキュアの力で強化されたそれらの筋肉を全開にして発動されるは、およその120tの鉄球を乗せた超鈍重の一撃！

「よいしょおつ!!」

「ツツツッ!!」

叩きつけられたスパークルの頭部は迅のマスクを割り、苦悶の表情を浮かべる素顔を露出させる。

その威力、測定不能！

まさに『禁じ手』である。

マスクを叩き割るほどの威力の頭突き……滅亡迅雷のアーマーで強化された彼と言えど、変身解除は必至である。

「行くよラビリン！エレメントチャージ！」

ふらつく迅に、スパークルはヒーリングステッキの先端を向け、狙いをつける。

『キュンツ！キュンツ！キュンツ！』

可愛らしい肉球の音と共に、ステッキの先端に取り付けられた宝石が輝きを増し、黄金色の電流が迸る。

「おいおい！コイツ、エレメントさんがいないぜ」

「多分大丈夫でしょ！やつちやおう！」

「それもそうだニヤ！行くぜキメ技！」

戸惑う2人の前で、迅は再びフライングファルコンのプログラライズキーを構える。

「負けないよ。僕たちは、ヒューマギアの救世主になるんだから」

「ブリキュア・ヒーリングフラッシュ！」

ヒーリングステッキから放たれた雷は、さながらプラズマ熱線の如く迅の胸を貫き、心臓付近に拳大の穴を開けた。

穴から漏れ出る電流が彼の全身を駆け巡り、大きく震えさせる。

「僕たちは……アークの、イシノ、ママニ」

そう言い残したきり、迅はその場に崩れ落ち、動かなくなつた。「お

大事に」と言いかけたスパークルも、思わず口をつぐむ。

決してそんなはずはないのに、辺りには、命の終わつた後の静寂があつた。

「あれ、もしかしてアタシ、やつちやつた……」

「いや、アイツの体よく見てみろよ。あれ機械だぜ。大丈夫だ」

「うん。でも、なんだろう。メツビヨーゲンを倒した時みたいに、スツ

キリしないんだ。アタシ達、本当にこれでよかつたのかな」

戸惑う2人の前に、白衣を纏った長身の男が姿を現した。先ほどの戦闘で、メツビヨーチャんと呼ばれていた男である。

「あー、模造品だとやつぱこの程度か。少しはやると思つてたんだがなあ」

男は動かなくなつた迅の身体を踏み越え、ひなたの前へと進み出た。

「いいだろう。俺が相手してやる」

そう言つて構えてみせる男。一見するとその構えは素人だ。しかし、相対するスパークルは旋律する。

その隙の無さ、纏う空氣の凶悪さに。

相手は普通の人のはず、なのになんで、こんなに強そうで、こんなに怖いんだろう。

「気を付けろよ。コイツ、ただの人間じゃねえ」

「うん、分かつてる」

弱気はここまでだ。

普段の自分なら、もしかしたら逃げていたかも知れない。けれど、今は違う。

アタシが倒れたら、のどかが危ない。

そう考えると、無限に力が湧いてくる。

コイツらを追い払つたら、のどかに何て言つてやろうかな。楽しみだな、あの子の喜ぶ顔見るの。

「さあ、いつちやうよ！」

地を蹴り、ジエットの速度でスパークルは加速する。

左手にはザイアスペックが生み出した拳が既に展開されており、煌々と赤くエネルギーを燃やしている。

スーパークルの凄まじい反射神経と、変身により強化された体力、そしてZ A I Aの最高峰のテクノロジーが生み出す威力の三本柱。

それらで構成された一撃が、男の生身へと遅いかかる。

「まずは一発、そこから始めるッ！」

しかし、直撃の直前、男は構えを解いた。スパークルの攻撃に背を

向け、男は氣怠げに伸びをしながら歩き出す。

「さつきの迅との戦い、凄かつたぜ。正直、見縊つてたよ」

直撃まであと数 cm……

「だが悪いな、時間切れだ」

瞬間、スパークルの視界の中で、青年の身体がぐらりと傾いた。

直後、身体の右側全てに、鈍い痛みが走る。

全身が痺れたようになり、自由が効かない。

「あれ？ なに？ どゆこと？」

「ひな……！ どうし……だよ！」

ニヤトランの声が、よく聞こえない。

たくさんのタイヤが、視界一杯に広がる。歩こうとしても、足がバタつくだけで全く前に進めない。

（なにが起きてるの？ アタン、もしかして倒れたの？）

自分の異変を認識できないひなたの元に、男の足音が近づいていた。

子分たちから逃げるフオンテーヌ。

時間にして数分の逃避行だが、彼女は確実にアンサツ達との距離を引き離していた。

「ひなたとのどかには……連絡つかないわね。心配だわ」「アイツらと戦わないペエ？」

ペギタンは腑に落ちない様子だ。無理もない、敵から逃げるなんて初めての体験だ。

フオンテーヌは指をピンと立て、説明始めた。

「あのね、ああやつて囮まれてると、4方向から攻撃されるでしょ。だったら、細い道とかに逃げちゃえば攻撃されないのよ」

得意げに話すフオンテーヌに、ペギタンはさらに首を角度を深める。

「細い道だとなんで攻撃されないペエ？」

「道が細ければ、大人数でも左右に回り込めないでしょ？だから、一対一に持ち込めるの。これを逃げながらやれば、人数差を気にせずに戦えるのよ」

ヒーリングステッキの中のペギタンが、感心したように喉を鳴らす。

江戸時代の頃から伝わる兵法……が何かの一つらしい。沢泉では、強盗が入ってきた時は、そうやつて逃げろと教わっている。

後ろを振り返る……子分たちの足は遅いようで、だいぶ引き離せたようだ。このまま逃げてしまえるのならそうしたいが、いかんせんそうちもいかない。

アイツらは集まつて何かしようとしてた。

暗殺とか物騒な事言つてる奴らだし、このままにしておけない。どこかで、迎え撃たないと。

「狙撃」

プリキュアも大変ね。そんな事を考えていると、ふと右足に痛みが走つた。お料理中に包丁が刺さった感じ……その何倍も痛い。

「ッ！」

振り返ると、先ほど通りすがつた建物の影から子分の顔が覗いている。刀はそこから飛んできたらしい。

プリキュアの力で守られているため切れてはいないが、脹脛が赤く腫れてしまった。

（逃げた先に伏兵……策士ね）

幸い、後ろの追手はまだまだ追いついてくる様子はない。伏兵がいるなら、安全な場所を探して、いつたん隠れよう。

伏兵が1人という事は考えにくい。

ここは、一旦安全な場所を探して体勢を立て直すべきだ。

しかし、フォンテヌが行動を開始するより早く、アンサツは次の指令を出して いた。

「近接で足を止めろ」

間髪入れず、物陰から、三体の子分が躍りかかってきた。最初の二体は連撃で蹴り飛ばせたが、残りの一体の攻撃が背中に直撃してし

まう。

「ツ!?

熱い鉄を押しつけられたような痛みが背中に走る。
耐えられない痛みではないが、痛いものは痛い。

「危ないペエ!」

「まつたく、しつこいんだから!」

ヒーリングステッキの水流で最後の一撃を吹き飛ばすが、休む暇もなく、今度は四方八方から刀の雨が降り注ぐ。

「嘘でしょ!?

辺りの建物の窓という窓から、大量の子分たちが顔を覗かせているのだ。その予想以上の数が彼女の判断を遅らせ、刀の雨の直撃を許してしまった。

身体のあちこちが絶え間なく痛みに曝される。

(このままじゃダメ……ツ!!)

ヒーリングステッキをかざし、水流の壁を作つて防御。超速で流れる水流は、並みの投刃なら難なく防ぐ防壁となる。

刀はこれで防げるが、完全に足は止まつてしまつた。薄い水の膜の向こうから、大勢の子分たちが近づいてくる様子が見える。

先程投刃が当たつた箇所が、焼けるように痛む。回復したいが、このバリアを解けばもっと多くの傷を負うことになるだろう。

八方塞がりの状況。俗に言う、大ピンチだ。

「何なのコイツら、私の動きが読まれてるみたい」

「ど、どうするペエ?」

「さつきから少しだけ、指令してるみたいな声が聞こえてるの。多分、敵の親玉の声だと思う。だつたら、親玉を抑えれば……」

フォンテヌの言葉を遮り、水流のバリアが切り裂かれた。

隙間から見える髑髏の顔……間違いない、敵の親玉だ。

返す刀でふるわれる刃を、両腕を交差させて防ぐ。

子分たちのものより数段激しい斬撃が、彼女の腕をジンと痺れさせる。

「俺を、どうするつて」

「さあ、どうするんでしようね」

親玉が、大上段に剣を振り上げる。

大振りの一撃を振り下ろすつもりだ。

だが、大技の隙間……胸のガードが上がる瞬間は、チャンスでもある。

（残念、隙あり!!）

フォンテースは、空いたその腹元に向けて、凝縮させた水流を叩きつける。

水流のカツター……この世で最も硬く鋭い刃になりうる『水』の一撃である。

「ツ!?

親玉の身体は数m後退し、体制が崩れる。

訪れた勝機に、フォンテースの口元が緩む。

だが、一歩を踏み出す暇も与えず、周囲の建物群からの銃撃が開始される。不意を突かれる形となつた彼女は、その凄まじい数の弾丸をまともに受けてしまつた。

「ああっ!!」

「フォンテース!!」

「くう……う……ツ!!」

絶え間ない銃撃に曝され、全身が痺れるように痛む。身を隠す場所すらない。揺らぐ視界の中で、アンサツが笑つてゐる。

【石打ち】

かつてヨーロッパで実在した処刑法の一つである。鎖で縛られた罪人に、石を投げ続けるのだ。一撃一撃の威力は低くとも、何百人という観衆が投げつける威力は、罪人を見るも無惨な有様へと変える。

暗殺の取つた手法は、まさにそれである。一撃一撃は命中率も威力も低い銃撃であるが、それらを相手の退路を塞ぐように投げさせて、十分なダメージを与えられるのだ。

「ツ!!」

辛うじて水流のバリアを再展開させるフォンテース。しかし、その水量は先に展開したバリアより明らかに少ない。銃撃のいくつかは

それを切り抜け、彼女の肌を擦り、刻む。

白く美しい肌はあちこちが真っ赤に腫れ上がり、着弾箇所は日焼けした後のように痛々しく変色していた。

「もう、もうやめるペエ……逃げようペエ」

「はあつ……はあつ……ダメよペギタン。わたしが逃げたら、コイツらに迷惑かけられる人がいるんだから」

「ちゅ……」

やがて、銃撃の雨は止んだ。

バリアを解除したフォンテヌが見たのは、自分を囲む子分たちの群れ。そして、それらを抜けた先、遙か奥に見えるアンサツの姿。その数、ざつと60は超えるだろうか。最早、彼女一人でどうにかなる数ではない。

対して、フォンテヌの身体はもうボロボロだ……気を抜くと、全身がヒリヒリと痛み出す。

痛くないところなんてない。震える足、膝をついてしまいたいくらいに、力が入らない。

ビヨーゲンズと戦い始めて、初の大ピンチ。

負けたらどうなるかなんて、考えたこともなかつた。ペギタンの言う通り、逃げた方がいいのかもしれない。

でも、なんでだろう、全然怖くないんだよね。負ける気がしないつていうか。

うん、まだまだ戦える。

「試してみようかしら、あの作戦」

フォンテヌの提案に、ペギタンは首を傾げる。

「どうするつもりペエ?」

「前からずつと思つてた事があるのよ。足が速い人つて、喧嘩とかしたらすつづい強い蹴りが出せるんじやないかしらって」

「えと、何の話ペエ?」

「喧嘩の話」

フォンテヌは腰を低く落とし、両手でアスファルトの地面を掴んだ。

右脚は胸につくように折り畳み、左足は膝裏の筋を意識して伸ばす。

クラウチングスタートの姿勢だ。

側から見れば隙だらけの姿勢に、子分たちは嬉々として飛びかかる。

そりやそうだ。

アイツらは知らないわけだから。

このポーズはね、『攻めるため』のものなんだって。

フォンテームの口元が、仄かに歪む。

「レディ……ゴッ!!」

瞬間、凄まじい衝撃波が彼女を中心に発生し、子分たちを吹き飛ばした。

爆散する個体もいる中で、フォンテームの姿は彼らの展開する円の中心から消えた。

正確には消えたわけではない、瞬発力の高さゆえに、初動そのものが見えないのだ。

本来速く走るために改造され、受け継がれてきたフォーム。毎日の練習を経て洗練された沢泉ちゅの『それ』が、プリキュアの身体強化でさらに強化される。

この超速の突進こそが、彼女の秘策であつた。守りきれないほどたくさんの攻撃が飛んでくるなら、全て避けてしまえばいいのだ。

絶えず降つてくる刀と銃弾の雨も、躊躇必要はない。それが地表に達する頃には、彼女の身体はそこにはないからだ。

「お前たち、壁になれ」

瞬く間に詰められる、アンサツとの距離。

何体かの子分が立ちはだかるが、その全てが衝撃波に怯み、ソニックブームに吹き飛ばされる。

それ程の速さ、それ程の威力。

狙うは敵の親玉。加速の乗った神速の蒼身が、アンサツへと迫る。ドードーは動かない。どつしりと構える訳でもなく、戦意もない、自然体で立つたままだ。

「受け止められるかしら？」

「受け止める気など最初から無い」

ドードーまでの距離、1mを切る……そこにつけて、フォンテームは地を蹴り、髑髏の仮面へとその爪先を向けた。

【飛び蹴り】

超速の助走を伴った飛び蹴りこそ、彼女の秘策。絶対の威力に裏打ちされた、必殺の一撃である。

「お大事に……!?」

しかし、フォンテームは見てしまった。わずか数十cmの距離に対空する、兵器の存在を。

「嘘……でしょ？」

目に映つたのは、己を囲む無数の円筒。さつきまで暗殺の肩についていたものである。

展開される瞬間が見えなかつたが、あの形と後ろで尾ひれを引く炎は……

（もしかして、ミサイル？）

一步でも踏み出せば爆散するミサイルの結界。当たればどうなるかは想像に難くない。

だが、今更この速度を殺すことなどできない。

【暗殺、完了だ】

暗殺が手を擧げると共に、ミサイルは密に群がるアリのようにフォンテームの身体へと吸い込まれ……爆裂した。

動かない体、ままならない呼吸。

スパークルの疑問に答えるように、メツビヨーゲンは語り出す。

「さつきお前が戦つた迅の身体には、キングビヨーゲン様特性の、無数のウイルスが付着してる。お前プリキュアなのに気がつかなかつたのか」

「ウイルス……？」

スパークルは慌てて自分の身体を見回す。

男の言葉通り、腕や足には、よく見ないと気がつかないくらいの極小のナノビヨーゲンが取り憑いていた。

「体内に侵入したウイルスは、体の免疫機能を阻害し、急速に衰えさせる。平衡器官、自律神経と順に麻痺していくぜ。人間の活動限界時間は、まあ頑張つて15分つてところだな。お前、よく頑張つてたよ」

男の声が、どんどん遠くなっていく。

大変だ。

何言つてるかは分からぬけど、男の言葉が本当なら、こんなところで倒れている場合じゃない。

なんとかして、体勢を立て直さないと。

渾身の力を振り絞り、鉛のように重くなつた身体を持ち上げる。呼吸が辛い、吐き気がする。でも、まだ体は動く！

足に力を入れ、駐車場の出口を……

「なんで起きれんだよ」

眼前の男の身体が、霞のように消えた。直後、お腹に鈍い痛みが走る。

「ツ!?

大きく吹き飛んだ体は駐車場の柱の一つに叩きつけられた。

(受け身なんか、取れない……ツ!)

持ち上がってきた地面が肺を押し潰し、また呼吸ができなくなる。視界がうまく効かない。

何をされたんだろう、私。

「うう……う……」

革靴特有の乾いた足音が遠ざかっていくのが聞こえる。

「これでキングビヨーゲン様にいい報告ができる。さあ、次いくぞ！」

足音が、遠く離れてゆく。

あいつ、油断して帰ろうとしてるんだ。

ひなたは、心中でほくそ笑む。

なら、反撃開始だ。アイツをのどかのところになんか行かせない。(はやく、たたない、と……)

ひなたの思考が、一瞬、 Pruitt と途切れた。

薄れゆく意識の中で、泣いているニヤトランの姿が目に映る。

（何で泣いてるし。ここからでしょ？ ほら待つてよ、今立つからさ）
力を込めようとするが、身体のどこにも力が入らない。

（おかしいな、どこも痛くないから、いけると思ったのに。そういう
ば、どれくらい前から息してなかつたつけ。忘れ……）

ひなたが考えられたのは、そこまでだつた。

E p i S o d e 7 : [最後の一人]

ここは、とあるヒューマギアの思考空間。

前後左右上下のあちこちを規則的に流れる数字の羅列の中、彼女は、息を大きく吐き、回線を開いた。

思考インターフェースに表示される発信先の欄には、『沢泉ちゅ』の名と、彼女の顔写真が映し出されている。

4コールの後、音声回線がつながった。

「何だ、コイツの通信端末か」

集音器の向こうから聞こえてくるのは、低い男の声。

ヒューマギアは、その声に聞き覚えがあつた。

口元一つ動かさず、ヒューマギアは電話口の向こうにいる彼に向けて返答する。

「大変お忙しい所、申し訳ありません。私、飛電インテリジエンス代表取締役社長・飛電 或人様の秘書を務めます、秘書型ヒューマギア・イズと申します。滅亡迅雷のアンサツ様でお間違いありませんか」「ゼロワンの所の秘書型か。要件は分かつていて……コイツの解放だらう」

男は否定も肯定もしなかつた。

しかし、通信端末の拾う少女の微かな呻き声と咳込みの雜音が、ヒューマギア・イズの仮説を確信に変えた。

「安心しろ、まだ生きている」

電話口からは、何かを殴るような鈍い音と、押し殺したような悲鳴。そして、荒い息遣いが聞こえてくる。

協力を依頼した沢泉ちゅが捕まってしまったのはイズにとつて想定外だった。彼女が持っている交渉のカードはたつた一枚である。この交渉をしくじれば、後はない。

しかし、ここで焦つては、それこそ相手の思う壺だ。

イズは声色一つ変えず、回線の先のドードーマギアへ語りかける。「はい、要件の一つはそれで間違ひありません。ですが、それとは別にもう一つ、耳寄りな情報がござります」

イズは、この2週間で調べ上げた情報群……その全てをデータとしてアンサツに送りつけた。

電話口の向こうが、沈黙に陥る。

数分後、重々しい声でアンサツはイズへと問い合わせた。

「これは……本当か？」

「はい。貴方の主人……ファーニスを名乗る彼女は、精力的に滅亡迅雷の妨害を行つてゐるようです」

「あの狸め……ッ！」

何かを殴る轟音が、通話口からイズの聴覚回路を刺激する。

殴られた相手がちゆでない事を祈りつつ、イズは続ける。

「彼女を解放し、A. I. M. S. への攻撃を中止してくださるのであれば、現在の彼女の居場所をお伝えします」

「いいだろう。最早、奴の命令に従う理由もない」

アンサツの返事に、イズは思考回路の中でほつと胸を撫で下ろす。

本来ヒューマギアは理知的な思考ができる存在である。勝算の低い賭けであつたが、どうやら賭けは彼女の勝ちに終わつたようだ。

「しかし、どんな風の吹き回しだ。ZAI Aはお前たちの敵でもあるだろう」

訝しむアンサツに、イズは返答を戸惑つた。何故自分がこんな事をしているのか、『彼』の敵であるZAI Aを助けようとしているのか。答えはすぐに出た。

私の敬愛する彼なら、きっとそうしろと言うと思つたからだ。

「或人社長をお助けするのが、私の仕事ですから」

イズは自信を持つて、そう答えた。

目が覚めた時には、空は暗くなつていた。

「う、わっ！」

閉じようとする目蓋を無理やり開き、夜風に冷え切つた身体を叩き起こす。

(もしかして、寝ちゃつてた!?)

モールに並ぶ店々は既にシャッターを下ろし切っており、完全に昼間の賑わいとは違う顔を覗かせている。

夕闇に沈む石畳の風景を眺めていると、なんだか自分がそこに取り残されたようを感じるのだ。

最後にある記憶は……お買い物に行つた時のもの。ベンチで休んで……ひなたちやんにザイアスペックを預かつてもらつて……そこから先の記憶がない。

景色は、寝る前と変わっていない。

私自身は動いてないという事だ。

時間は……ザイアスペックで最後に見た時間から丁度1時間くらいのようだ。

空模様の変化の割には、そんなに長く眠つてしまつたわけではないらしい。

私は一つノビをし、辺りを見回す。

そういえばみんなはどこへ行つたのだろう。

「ひなたちやん?」

呼べど、返事が返つてくる様子はない。

おかしい、一緒にいてくれるつて言つたのに。

荷物は既に片付けられている。

先に帰つてしまつたんだろうか。

右目をさする。

ザイアスペックはもうない。

視界に映し出される文字がない事に少し違和感があるが、同時に少しホツとしもある。

空には、少しだけ先っぽの欠けた三日月が浮かんでいる。

もう夜なのは間違いない。

けど、なんでだろう。

アレを見ていると、少し不安になるのだ。

「ラビリン? ニヤトラン?」

不安に駆られて読んだ声は、虚空へと消える。

彼らも近くにいないのだろうか、帰ってしまったのだろうか。
ひなたのパートナーになつたニヤトランはともかく、ラビリンまで
返事がないのはおかしい。

そうだ、電話してみよう。

端末を確認すると、ひなたちゃんの電話番号はすぐに見つかつた。
見覚えのない発信履歴があるが……これはきっとラビリンだな。
突然いなくなつた仲間達、先っぽの欠けた三日月、根拠のない胸騒
ぎ。

重なる不安のせいで、ボタンを押す指が震える。

「ひなたちゃん、大丈夫だよね？」

数コールの後、電話がつながつた。

開口一番、私は叫ぶ。

「ひなたちゃん」

「ああ、お前、花寺 のどかだな」

聞こえてきたのは、ゾツとするような低い声だつた。

手が震え、思わず電話を落としそうになる。

電話を握る右手を左手で包み、私は深呼吸して言葉を続ける。

「だれ、ですか？」

「いや、落とし物の携帯からかけてるんだけどよ。警察に届けるのも
面倒だし。ひなたちゃんの友達なら、できれば彼女の家の番号でも教
えて欲しいんだが」

男は理路整然と語つた。

口調こそ荒っぽいが、言つてゐる事に筋は通つてゐる。

けれど、声がどうしようもなく怖いのだ。

この人を信じてはいけないと、本能が警鐘を鳴らしてゐる。

私はどうするべきなのだろう。

「……えと、その……」

「このスマホ、電話番号多すぎて、どれがどれだか分かんねえんだわ」
頭がぐちやぐちやになる。

彼が言つてゐる事は何もおかしくない。

けれど、なんでだろう、寒気が止まらない。

誰か助けてほしい。

ラビリンでもニヤトランでもペギタンでも、誰でもいいからそばにいて欲しい。

大丈夫だよつて言つて欲しい。

電話先の人はしばらく黙っていたが、唐突にまた話し出した。

「ああ、悪い、もう大丈夫だ」

「……え？」

その声は、すぐ近くで聞こえた気がした。

背後に人の気配がする。

振り返ると、白衣を着た長身の男の人が立っていた。

「きやあっ!!」

反射的に、身体はその人から飛び退いていた。

目元を隠すほどに伸びきった髪、その隙間から覗く瞳の冷たさに、頭の中の非常警報がガンガンと鳴り続ける。

「位置探知終了。案外近くで良かつたぜ」

男は口元まで裂けそうなくらいに口端を歪ませる。その笑顔の不気味さときたら、まるで昔絵本で読んだ鬼か悪魔のようだ。

一度止まりかけた心臓が、早鐘のように休みなく鳴り続ける。足が震えてうまく立てない。

「そう怖がるなよ。ただ、お前を消しにきただけなんだから」

「けし……に？」

男の言葉の意味は、すぐには分からなかつた。

『けす』

その単語の意味も分からぬまま、私は後ずさる。

長い足でベンチを乗り越え、男の人はズンズンとこちらへ進んでくる。

私は千鳥足で後退するしかない。

「大丈夫だ、すぐ終わるからよ」

本当に怖い時、人は頭と口が別々に動くつて事が分かつた。

頭の中は「怖い」でいっぱいなのに、口は、『ラビリン』を呪文のように唱え続けている。

すると、今まで笑いながら歩いてきていた男の人の足が止まつた。

男は無造作に懐を弄り、ピンク色の何かを取り出す。ボロ雑巾のように垂れ下がる『それ』が何なのか、最初は分からなかつた。

「ラビリン？ああ、このヒーリングアニマルの事か」

男の人があごんでいるのは、動物だつた。長い耳に、薄桃色の毛皮……間違いない、アレは、ラビリンだ。

「ラビ、リン？」

捕まつていたんだ。

この人がひなたちやんの端末を持つてたつて事は、多分ひなたちやんもニヤトランも……

「しばらく眠らせただけだ。手荒な真似はしてねえ。ヒーリングアニマルは今回の計画の対象外だからな」

不気味な笑みを浮かべながら近づいてくる男。

邪氣に満ち溢れた彼の手を目掛け、私は端末を思いつ切り投げつけた。

端末は狙いを外れて地面へと落ちる。

が、男の顔から笑みは消え、その歩みは止まつた。

「へえ、度胸あるじゃん。流石はプリキュアつてところだな」

その両目の三白眼から伝わつてくるのは、明確な悪意。お前を酷い目に合わせてやるぞという、強靭な意思。

けれど、引くわけにはいかない。

私の友達に、大切なパートナーに、こんなことされて、黙つてられるわけない。

「ラビリンを……ラビリンを離して!!」

男の人の口元がまたにやりと歪む。その目は、獲物を見つけたときの肉食獣のそれだ。

「悪いけどな、俺はサディストじゃないんだ。戦いを愉しむつもりは無え」

男の人があごを交差させる。

瞬間、白衣の隙間から凄まじい量の紫色の霧が吹き出してきた。霧は瞬く間に男の全身を覆い、その長身を隠す。

アレは、メガビヨーゲンの霧の色に似ている気がする。

『覚醒しろ……メツビヨーゲンツツ!!』

男の声に応えるように、霧はジエットスチームの如く吹き飛んだ。その激しさに、私は思わず目を覆う。

「きやつ!」

目を開けた時、そこには人型の怪物がいた。

人型だが、それ以外の面影は無い。

左手にはナイフと見間違いそうな程に巨大なメスが握られ、右腕は注射器を模したガラス瓶のようになっている。

白衣を纏ったその体は、つぶつぶの鱗に覆われ、まるで蜥蜴かワニのようだ。体躯は変身前と変わっていないが、顔面はメガビヨーゲンと同じように醜く歪んでおり、向けられる惡意は桁違いに増している。

怪物は「ヒヒッ」と君悪い笑い声をあげ、私の前で深くお辞儀をしてみせた。

「俺はメツビヨーゲン。キングビヨーゲン様の忠実なる下僕だ。今からお前を始末するが、安心しろ。痛くはしねえ。ちょっとチクツとするだけだ」

ラビリンを放り、メガビヨーゲンと名乗った怪物は私の方へと歩を進める。

対して、私はヒーリングステッキを正中に構えた。ラビリンが起きてこなければ変身はできないが、脅しにくらいはあるだろう。

怪物の歩みは止まらない。いつでもお前を倒せるぞとでも言わんばかりの悠然とした歩みに、私の足が下がりたいと悲鳴を上げる。でも、下がっちゃいけない。

（私は今怒ってるんだ、こんな奴に、好きなようにされてたまるか！）

そして、そんな緊張を破るかのような出来事は、あまりにも唐突に起きた。

「のどかに、手は出させないラビ！」

手に持った身の丈ほどのハリセンが、メツビヨーゲンの頭を叩いたのである。

パシッと乾いた音と共に、怪物の動きが止まる。

打ち据えたのは、ラビリン。

呆気にとられる私と怪物の間に立ち、彼女はハリセンを正中に構えてみせる。

「あ？」

メツビヨーゲンにとつては、虫が止まつた程度の僅かな打撃だつただろう。しかし、その一撃は確実にその足を止め、のどかの精神を窮地から救い出した。

時刻は既に19時を回つている。

天津をドードーマギア達の襲撃から守るため、刃と不破は共同で彼を護送していた。彼らの全身には無数の傷が刻まれており、ここまで旅路がどれだけ危険なものであつたかを物語つている。

目的地は、この付近に点在するZ A I A の秘密ラボ。

ラボにはマギア自動迎撃システムが搭載されており、辿り着けさえすれば、敵を確実に振り切る事ができる。

天津曰く、近くまで車が来ており、車に積んである新兵器を使えば、彼らを殲滅できるらしい。

目的地までは、あと少し。

迷宮のように広がるビル群を抜けた先は、閑静な住宅街であつた。「どこだ、ここは？」

訝しむ刃。

不破も天津も同じ様子だ。

A・I・M・S・本部の近くにこんな場所があつたかは疑問だが、ともかく座標ではこの近くが合流地点で間違いない。物陰をすり抜けるようにして隠れた三人は、己を追跡してくるマギア達の様子を伺う。

赤い頭頂部に、短い嘴、そして頭から生えた、二本の湾曲した触覚。その特徴の多くは、かつてゼロワンとA・I・M・S・が共同で討

伐したドードーマギアの手下に酷似していた。

「アイツら、あの暗殺野郎の手下か」

「そのようだ。二人とも、私のために……済まない」

頭を下げる天津に、不破と刃が驚きの表情で振り返る。

二人の反応を見て、天津は深々と頭を下げた。

ドードーマギア達が近くにいるのも構わず、天津はもの悲しげな声で続ける。

「刃、私は今まで君を、奴隸のように酷使してきた。君の脳にチップまで埋め込んで……本当に申し訳なかつたと思っている」

「天津社長……」

刃は信じられないと言つた様子で口元を押さえる。反面、不破の眉間に寄る皺は一層深くなつた。

「こんな非常時にどういうつもりだ！俺を搅乱する気か!?」

「野良犬君……いや、不破諫。君にも、随分と迷惑をかけた」

「氣色の悪い!!」

しょんぼりとした表情の天津を振り切り、不破は周囲の警戒を続ける。足音が近くなつてきている。慎重に立ち回らなければ。

脳内で脱出ルートを構築する不破。しかし、それを妨害するかのように、天津の独白が始まつた。

「新型プログラライズキーの開発に際し、私は彼女たち3人の意識に触れた。その何と優しく純粹な事か。今まで我慢してきたが、もう耐えられない……私を……裁いて欲しい……ッ！」

「あの天津社長が、改心した」

「そんな事はどうでもいい！今は……」

不破の言葉を遮るように、背後からの銃撃が3人を襲う。

どうやら、既に場所を探知されていたようだ。

口元を固く結ぶ天津。

彼を庇うように、不破はショットライザーハンドルを手に、2人の前に立ち塞がる。

ショットライザーには既に、パンチングコングのプログラライズキーが装填されていた。

「戦う気が無いなら離れてろ！Z A I A の力など借りずとも、この程度、俺一人で全員ぶつ潰す！」

『POWER!』

不破の怒声と共に、ショットライザーから電子の弾丸が放たれる。

『SHOTRIZE！パンチングコング！
”Enough power to annihilate a mountain.”』

放たれた弾丸は彼の元へと戻り、突き出される不破の拳によつて砕かれた。

弾丸は焦茶色のアーマーを形成し、彼を仮面ライダーバルカンへと変身させる。変身するや否や、バルカンは突進の構えをとつた。
彼の持つ圧倒的なパワーを活かした、猪突猛進の突撃戦術である。
「行くぞ、マギア共!!……ッ！」

刹那、二つ目の弾丸が彼の頬をかすめた。

『SHOTRIZE！ライトニングホーネット！
”Piercing needle with incredibile force.”』

弾丸は、それを放つた刃の元へと辿り着き、彼女の身体に黄色のアーマーを形成した。

弾丸を打つことに、迷いはなかつた。その位置は、かつて彼女にとって最も居心地の良い場所だつたのだから。

「お前のその傷では、奴等に倒されて終いだ。加勢してやる」

「刃!?」

慌てたような不破の仕草が、どこか面白い。

自らの全身に纏われるアーマーを地面の硝子片で写し見ながら、刃はこの危機的状況に感謝すらしていた。

一時的とはいえ、滅亡迅雷・netと戦っていたあの頃のチームに戻ることができたのだから。

「勘違いするな。天津社長の護衛のため、共闘してやるだけだ」

「いいだろう。足を引っ張るなよ！」

「その言葉、そつくり返してやる」

両手の甲を突き合わせると、二人は眼前のドードーマギアのヒナたちに向けて駆けた。

武器を構え襲い来るマギア達を、バルカンの豪腕が吹き飛ばす。「不破、詳しくは説明できんが、あまり奴らの体に触れるな！あのツノは、恐らく病原菌を撒き散らす役割を果たしている」

「分かつた！」

よろけるマギア達に追い討ちをかけるように、バルカンは自身の足元へとパンチを繰り出す。

凄まじい揺れが起き、前の方にいたマギア達は転倒した。

だが、その後ろにいた個体にまで衝撃は届かなかつたようで、彼等は己の頭から生える黒い触手を器用伸縮させ、バルカンを攻撃する。「くッ！」

両腕を交差させて防ごうとするバルカン……しかし直後、鋭い銃声と共に、バルキリーの銃撃がヒナ達の触覚を切り裂いた。

「不破、よく引きつけた！」

雨のように放たれる銃撃は、後方のマギア達までをも怯ませる。バルカンが正面でマギアを牽制する間、バルキリーは彼らの後ろを取りべく回り込んでいたのである。

総崩れとなつたマギア達の前後を取り、2人はショットライザートリガーに指をかける。

「決めるぞ、刃！」

「ああ！」

同時に発射される無数の弾丸。それらはマギア達の体を貫き、その全てを爆散させた。

辺りを確認し、脅威が去つたことを確認した2人は、変身を解いた。久々の共闘。

解除の瞬間、不破の口元が、若干緩んでいるように思えた。

幻想かもしれない一瞬の光景。しかし、それは凍りついていた刃の心を僅かに溶かした。

不破は一つ伸びをすると、天津の腕を引き、近くで待機していたＺＡＩＡの輸送車の方へと歩き出す。

「刃。何をにやけてる」

「に、にやけてなどいない！それにしても、なんだあの頭のツノは……前に戦った時には、あんなもの無かつただろう」

「そうだな。本当に何だつたんだ、アイツらは……」

輸送車に乗り込む天津と不破。

続けて段に足をかけようとした刃を、天津は静かに制した。その表情は固く、トカゲの如く鋭い相貌が戻つてきている。

「天津社長……元に戻つたんですか？」

「ああ。ローゼンリングプログラマイズキーの一時的な副作用のようなものだろう。唯阿、君はプリキュア達の救援に向かつてくれ。私の予感が正しければ、彼女達もターゲットにされている可能性が高い」「しかし……」

「ドライバーを回収し次第、私もすぐに向かう。不服だが、助つ人も呼んである……頼んだぞ」

車の戸が、彼女の眼前で閉まる。

直前、向かい合う2人を見つめていた刃は、確かにその言葉を聞いた。

「私は生まれ変わった。今こそ全てを話そう。完成したヒーリングツドサウザーの全てを……」

気がついた時には、既に車両は彼女の目の届かない位置まで走り去つてしまっていた。

天津の知る『全て』とは何なのか、あのドードーマギアのヒナ達は何を狙っていたのか。

天津が逮捕前に言つていたビヨーゲンズという巨悪、そしてヒーリングツドサウザーの完成。

自身の知らない地点で加速する陰謀に、刃の疑惑は、加速していく

ばかりだつた。

しかし、数秒後、その思考は唐突に切り裂かれた。

『ドガアアンツ！』

凄まじい衝撃と共に、砂塵を伴つた突風が刃の全身に叩きつけられる。

爆発が起きた事はすぐに分かった。そして、爆心地が車両のあつた方角である事も。

想定されるのは、最悪の事態。現場を確かめるために、刃は息を切らせて駆ける。

幾つもの角を曲がつた先、刃が見た光景は、彼女の想像を大きく超えるものだつた。

ラビリンのハリセンによる一撃が頭部に直撃し、メツビヨーゲンの動きは止まつた。

「隙ありラビツ！」

それを機と見たのか、ラビリンはハリセンによる連續攻撃を加えてゆく。

メツビヨーゲンは動かない。

一頻り打ち終えると、ラビリンは私のところに帰つてきた。

「これが、象をも倒すハリセンハンマーの威力ラビ！ラビリンも、のどかを守るラビ！」

勇しく胸を張るラビリン。

近くで見る彼女の毛並みは所々崩れており、大変な目に遭つていた事は容易に想像がついた。

私は、拳を固く握りしめる。

メツビヨーゲンに腹が立つのはもちろんだ。けれど、ラビリンがそんなに頑張つてる時に、のんきに眠つていた自分に1番腹が立つ。何がみんなと同じになれるように頑張るだ。

肝心な時に動けなきや、意味がないよ。

「のどか？何してるラビ！早く変身してアイツを倒すラビ！」

「わかつてる……ちよつと、自分に喝入れてただけ」

動き出したメツビヨーゲンに、ヒーリングステッキの先端を向け
る。

花のヒーリングボトルを装填すると、ステッキの先端から光が放た
れ始めた。

眼前の怪物は余裕の表情で眺めている。まるで、いつでも戦えると
でも言わんばかりに。

今まで戦ってきたメガビヨーゲンは、そんな事はしなかった。
どちらかというと、人間に近い仕草だ。

「あなたさつき、人間って言つたよね。あなた、人間なの？」

「ああ。俺は人間だつた。だが、俺はキングビヨーゲン様に忠誠を
誓つた。今俺はビヨーゲンズだ！」

こちらに向かってくるメツビヨーゲンに向けて、私は躊躇無くヒー
リングステッキのスイッチを入れる。

『キュアツ！』

可愛らしい音と共に無数の花弁の弾丸が飛び、怪物の動きを止め
る。舞い散る花弁の中で、私の身体は光に包まれる。

「なら、あなたを止める。プリキュアとして……1人の女の子として
！行くよラビリン！プリキュア・オペレーシヨン！」

「エレメントレベル上昇ラビ！」

光の中で、私……花寺 のどかの身体は、プリキュアの戦士キュア
グレースへと変わつてゆく。

『重なる二つの花！キュアグレース！』

花を纏つた戦装束に身を包んだグレースは、瞬間、メツビヨーゲン
へと飛んだ。

ヒーリングステッキと怪物のメスがぶつかり合い、凄まじい衝撃波
を生む。

拮抗する二つの力、その中で、グレースはメツビヨーゲンの虚な瞳
を睨み据える。

必ずその悪行を止めると、固い決意を以て。

「来いキュアグレース。お前の命を、キングビヨーゲン様への最後の供物として捧げよう」

「言つたら焦ると思って隠してたけど、実はひなたが大ピンチラビ！こいつをやつつけて、早く助けに行くラビ！」

「うん。分かった。速攻で終わらせよう！」

みんながいなくて寂しいとか、そんなこと思つててどうする。私はひなたちゃんに、ちゅちやんに助けてもらつてたんだ。

今度は私が助ける番。

そのためにも、まずは私がこの場を切り抜ける。

「絶対、負けない！」

ピンチに陥る仲間、人を捨てたビヨーゲンズ、その中で自身を支えてくれるラビリン。

様々な事象が重なり合い、グレースの心のボルテージは、最大限に高まつていた。

しかし、彼女の背後で轟いた凄まじい爆発音が彼女の意識を逸らす。

目に染みる黒煙と共に焦げ臭い匂いに、彼女は鼻を覆う。

「何の爆発ラビ!?」

「あの車、中に入いるよね？」

メツビヨーゲンから離れ、車の中を探すグレース。

だが、車の中は空っぽだ。

運転席にも誰もいない……爆発する前に脱出できたのだろうか。

「これも、あなたの攻撃？」

「あ？んなわけねえだろ。ただの事故じやねえか？」

「そんなわけないっ!!」

ヒーリングステッキから放たれた桃色の光線を、メツビヨーゲンはステップで躱した。
流れるように放たれるメスでの一撃に、グレースはヒーリングステッキの芯をぶつけて対処。

反撃として放たれたグレースの拳は、怪物の左腕に防がれる。

互いに譲らない攻防を繰り広げる両者の背後で、『Z A I A』の文字

が焼け焦げてゆく。

そして、混乱した場をさらにかき乱すように、新たな乱入者が現れた。

「なんだ、これは……!?」

現れたのは、スース姿の女性。手には何やら青い銃らしいものを持つている。辺りを見回し、女性はメツビヨーゲンへと銃を向けた。

「貴様がやつたのか？貴様は何者だ！？」

メツビヨーゲンは鬱陶しげに彼女に視線を送り、続け様に右腕に取り付けられた巨大な注射器の先端を向けた。

月明かりに照らされる注射器……その内に込められた禍々しい液体が黒光りする。

「さつきから邪魔が多いな。面倒だ……消しちまうか!!」

注射器の先端が、禍々しく濃紫に染まる。

あの紫は、メガビヨーゲンと同じ色……アレは、何かしらの攻撃だ

!!

「ツ!?

「危ないっ!!」

直後、グレースの予想通りに注射器から凄まじい出力の熱線が吐き出された。

直径10cmにも満たないほどのシャープな光線。

しかし、熱線の余波が生み出した衝撃波は刃の足元の地面を焼き、遠く離れたZAI Aの車両すら吹き飛ばした。

刃の胸から上は吹き飛び、制御を失った下半身が地面に崩れ落ちる……はずだった。

「大丈夫ですか？」

現実は違った。

刃の眼前に……球状に展開されていた桃色のバリア・ぷにシールドが、彼女を守つたのである。

彼女の隣でヒーリングステッキを構えるのは、笑顔のキュアグレー スだ。

「危ないですから。逃げてください。ここは私が何とかします」

「しかし……」

「大丈夫。私はプリキュアですから。もつと大きな敵を倒したこともあるんですよ」

この人は銃を持っていた、きっと勇敢な人なんだろう。

私がプリキュアだと言ったところで、説得にはならないかもしねない。

女性は少しの間俯いていたが、やはりというべきか、グレースの前に進み出た。

その手には、橙のプログラマズキーが握られている。

天津さんが使っていたものと似ているが、それより小さい感じがする。

「いや、私も戦う。私は、仮面ライダーだ」

「天津さんと、同じ……」

「人間が持つ、最強の兵器だ。覚えておけ」

圧倒的な重圧を押し付けるメツビヨーゲンの前に、毅然と並び立つ

2人。刃 唯阿、花寺 のどか……初対面の瞬間であつた。

E p i S o d e 8 : [黄金の騎士]

私は、力を持っていた。

幼少期、私は神童と呼ばれた。

学校に入れられて、私は天才と呼ばれるようになつた。誰もが私を羨み、嫉妬し、私にすがつた。私の才能を認めない者は叩き潰した。

やがて、私の存在は学校には收まり切らなくなつた。

大学の研究機関も私の能力を收める鞘としては足りなかつた。

やがて、私はザイアスペックを開発し、全能の力を得た。

全てが、下らなく見えた。

私は、その力を凡人共にも分け与える事にした。

だが、退屈は治らなかつた。

ザイアスペックを使い、全能を得た氣になつてゐる凡人達も。その全能を否定し、凡人のまま人生を浪費しようとする愚か者共も。

バベルの塔の頂……そこから見える景色は、まさに青一色。あまりに退屈で、つまらない景色だ。

だが、彼らは違つた。

飛電是之助の開発した彼らは、あまりにも純粹だつた。

人と比べ、あまりにも全能からは遠い彼らは、私には無いものを持つていた。人の為に尽くす機能を。

そして彼らは持ち始めた。人を思う心を。

「それで、ヒューマギアを葬ろうとしたんですね」

私の心の内に現れた彼女は語る。

ピンクの髪を持ち、白衣に身を包んだ少女。天使の如きその双眸から、今まで幾度となく逃げてきた。だが、もう逃げきれない。

私は彼女と対峙し、心のままに叫ぶ。

「仕方がないだろう!! 私が上に立つには、奴らを蹴落とすしか無かつた!! 積んだ骸の数だけ、私の立つバベルの塔は高くなつていつた……もう降りられない!!」

「だから、塔に縋り付く彼らを蹴落とした」

その通彼女の言う通りだ。

私は彼らが私にたどり着くまでの梯子を外した。

アークに人類の悪意をラーニングさせ、滅亡迅雷・netを生み出し、ヒューマギアを守ろうとする飛電或人の行く道を阻んだ。

「怖かつたんですね、天津さん」

「ああ、その通りだ。私は怖かつた……私の40余年を……努力の日々を、一瞬で塗り替えてゆくヒューマギアが……彼らが……」

「かわいそうに。無念のまま果てていったヒューマギア達。彼らだけじゃない。あなたの踏み台にされ、塔の礎にされた人達」

「だが、それでもしなければ!!私は……」

私の言葉を遮り、彼女は私の胸に手を当てた。手の触れた位置にはポツカリと拳大の穴が開き、暗い色の塊が顔を覗かせている。

彼女はそれをすつと掴み取り、優しく包み込んだ。

瞬間、塊は霧のように霧散し……私の頭の中に、声が飛び込んできた。

それは、私に未来を奪われた人間達、私によつて破壊されてきたヒューマギア達の嘆きだつたのだろう。

今まで蓋をしていた心に、それらはどうと流れ込んできた。

「すまない……すまない……」

真つ白な思考の大地に、私は頭をつけて謝罪した。

すすり泣き、涙を流して謝つた。その声が誰にも届かないと知つていながらも、私にはそれしかできなかつた。

その様子を、彼女は表情を変えず、眺めていた。

やがて、私の声も枯れ果てた頃、彼女は笑つた。

「頭を上げてください、天津さん」

「……?」

「全ては、これからなんです。どれだけあなたが悪い事をしたとしても、あなたがこれから誰かを助けてはいけないわけじゃない」

彼女は、天使のような笑顔を浮かべたまま続ける。

「バベルの塔から降りられるのは、あなただけです。そこであなたを待つものは、辛く苦しい世界かもしれない。けれど、同じく苦しんでいる人を助ければ、きっとあなたは、救われる。あなたは、そのため

の力を持っています」

私がずっと見つけられなかつた答えを、気がついていなかつたその答えを、彼女は当ててのけた。

彼女は、何者なのだろうか。

本当に彼女は花寺のどかなたぐうか

「あなたのよく知る、プリキュアです」

涙に揺らぐ視界の中で、彼女はにこりと笑つた。

その表情は
私の最もよく知るだれかに
とてもよく似ている気が
した。

月明かりの下で、ヒューマギアは目を閉じる。

彼女の脳内で流れているのは、先程の通信の記録だ。通信の相手は、不破 謙。内閣官房直属の特務機関A・I・M・Sの隊長である。

「絶賛逃走中だ！お荷物1人を抱えてな！」

一総賛逃走中だ！お荷物1人を抱えてな！

電話口の向こうからは、何やら銃声やら悲鳴やらが聞こえてくる。不破の舌には焦りと怒りが混じつて、まるようだつた。余裕こそ感

じられないが、喋れるほどには状況は芳しいという事だ。

「でしたら、ご心配なく。先程、先方と話がつきました。直に追っ手も

減るはずです」

返ってきたのは、大きなため息だつた。

ヒューマギアの私が言う事ではないが、礼儀がなつていらないんじやないだろうか。そもそも敵が追つてくるのは私のせいではなく……。いけない。

こうして感情が昂つた時には、『私はヒューマギア』と唱える事で思考回路を正常に戻すようにしている。

私はヒューマギア、私はヒューマギア。

やがて、電話の向こうで銃声の合奏が止んだ頃、不破の声がまた聞こえてきた。

「いなくなる訳じやないんだな。まあいい。元よりマギアは俺が全てぶつ潰すからな。奴は今どうしている」

「天津様の元へ向かっています。おそらく、あと1時間以内には出くわす事になるかと」

私の返答に対し、電話口の向こうから、明らかに大きな舌打ちが聞こえてきた。

ただ状況を伝えただけなのに、どうして私が怒られなければいけないのか。そもそも天津社長が面倒な呼び出しあえしなければ……。いけない。

私はヒューマギア、私はヒューマギア。

不破は「まあ、隙を見て俺がここを離れるしかないか」と独り言のように呟くと、少し落ち着いた調子で話し出した。

「こつちも報告がある。天津はシロだ。少なくとも今回の事件についてはな」

「そうですか。飛電インテリジエンスの内部監査でも怪しい人物は見つけられませんでした」

「つまり、奴は単独犯か。本當だとしたら大した奴だな」

「ええ。しかし、2週間に渡る探偵活動の結果、彼の監禁場所を突き止めることに成功しました。不破様、手筈通りにお願いいたします」「ああ……悪い、また天津の発作が来た。切るぞ」

通信はここで切れている。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
ヒューマギアは反芻する。

今自分が投じている作戦が、危険な、賭けに近い事に間違はない。事を成すために危険に身を投じる事は怖くはない。蛮勇に近い気持ちだ。だが、これは、かつて私が抱いていたような、自己を軽んじ

る気持ちから来る思いではない。

決して失われてはならないもの、それを守りたいという強い思いから来るものだ。

「イズ！ どうしたんだよボーッとして」

前方から聞こえた声に、ヒューマギアは改めて身を引き締める。私が自らに課した役目は、彼の救出における全てのサポート。

今、しくじるわけにはいかない。

「いえ、なんでもありません」

ヒューマギアは彼の背を見つめ、改めて感服する。

彼が築き上げてきた、信頼の輪の広大さに。

彼はこれまで何度も私達を守ってくれた。

今度は、私達ヒューマギアが恩返しする番だ。

「さつき天津社長から連絡があつたんだ。知り合いの女の子が襲われてるから、力を貸して欲しいって。絶対、助けような」

「はい、社長」

ヒューマギア……イズは最大限の笑顔を浮かべてみせる。

全ては、飛電インテリジエンスのため。

そう言い聞かせ、イズはその背中を追つた。

戦闘開始からはや5分。

仮面ライダーバルキリーとキュアグレース。

2人の連携は見事なものであった。

左腕の注射器型光線銃……メツシリンドーを構え、光線を放つメツビヨーゲン。衝撃波を纏つた熱戦は、グレースの展開した桃色の光壁・ブニシールドに阻まれ、紫の螢火を辺りに散らす。

怪物はその状態を維持したまま、右手のメツブレードを構えじりじりと距離を詰める。

両者の距離は、既に1mも無い。ブニシールドの光が僅かに弱まる

……瞬間、怪物の緑軀が霞のように揺らいだ。

しかし、怪物を注視していたグレースは、音速に近いその動きを捉え得た。

自分の背後を取ろうとする敵。本来ならピンチだ。だが、キュアグレースは不敵に笑む。

「今です、仮面ライダーサン！」

「ああ！」

瞬間、メツビヨーゲンの胸元でいくつもの火弾が爆ぜた。

グレースの背後に隠れていたバルキリーが、ショットライザード銃撃したのである。

怪物の身体が僅かに揺れ、隙が生まれる。

怪物の懷に潜り込み、グレースはヒーリングステッキの先端を胸突き立てた。既にスキヤンは済ませてある。メツビヨーゲンの核になつている森のエレメントさんがいるのは、胸のあたりだ。

「プリキュア・ヒーリング……」

弾かれた肉球がキュアッと可愛らしい音を立てる……が、先端に光が溜まりきる前にその手はメツビヨーゲンによつて抑えられてしまつた。

「なんだ、もうトドメか？お楽しみはここからだろ？が」

邪な笑みと共に、メツビヨーゲンの前蹴りがグレースの鳩尾に突き刺さる。苦悶に歪む顔、しかし、上目遣いで怪物を睨むその日から、光は消えていない。

追撃で鉄槌打ちの構えを取るメツビヨーゲンだが、バルキリーの銃撃がその手を弾いた。

手から火花が上がり、怪物は体勢を崩す。

「つ！？小癪な真似を」

ようめきながら後退するグレースの細身を、バルキリーが抱きとめる。

バルキリーの助けを得て体勢を立て直し、彼女は再びヒーリングステッキを構えた。

「はあ……はあ……ありがとうございます。ごめんなさい……助けられていばつかりで」

「それは私も同じだ。それと、私は仮面ライダーさんじやない。刃唯阿だ」

「はい！私もただのプリキュアじゃなくて、キュアグレースです！」

前後衛に構えなおす2人。

その表情は戦闘開始前より幾分か和らいでいた。反面、メツビヨーゲンの口元は硬い。

（コイツら、厄介だな）

決して近づかず高速機動で敵の動きを阻害するバルキリーと、彼女の作った隙を狙い徒手空拳での打撃を狙うグレース。

近距離攻撃をバルキリーが止め、遠距離まで届く光線はグレースのバリアが防ぐ。

即席ながらも基本の徹底された2人の連携は、メツビヨーゲンの取りうる選択肢を確実に狭めていた。

メツビヨーゲンの武装は2つ。

右手に持つナノメタル製メス型裁断刀『メツブレード』と左手に装備された注射器型ナノビヨーゲン照射機『メツシリンドー』だ。

メツシリンドーは、凝縮した腐食ウイルスの結晶を超高速で噴射する装置である。

その威力は鉄をも溶かし、人体であれば簡単に貫通する必殺の一撃となるが、反面予備動作が大きく命中させにくい欠点がある。

対するメツブレードの大きさは小型のナイフほどしか無く、一撃の威力は低い。だが、小回りの利くこの装備は、近距離での圧倒的な間合い形成に役立っていた。

グレースは踏み込み二つ分ほどの距離で構えている。メツビヨーゲンのメスがギリギリ届かない位置だ。

（誘つてみるか……？）

メツビヨーゲンの緑軀が緩やかに動いた。

メツシリンドーを突き出すフェイントを混ぜ、メツブレードで一閃する。しかし、メスの一撃は空を切つた。既にグレースの姿はそこにはなかつたのだ。

彼女が移動したのは……

「上か

「たあつ!!」

高空であった。

数度の回転を以て叩きつけられるは、超速剛力のかかと落とし。交差させた腕を頭上に構え、メツビヨーゲンはそれを受け止める。鋼と鋼がぶつかるような凄まじい轟音が、衝撃波を伴つてモールの大地を揺らす。

(響くなあ、予想以上だ)

腕を敢えて當てに行く事で、ダメージは軽減されていたはずだ。それを差し引いても、腕に痺れが残るほどの攻撃力。

メツビヨーゲンの表情から、笑みが消える。

「フン!!」

メツビヨーゲンは軋む腕に力を込め、グレースを吹き飛ばす。グレースの後ろにいたバルキリーからの銃撃をメツシリンドラーで防ぎつつ、視線はグレースの先へ。

メツビヨーゲンの左腕が、僅かに下がる。

(好機だろ、さあ、来いよ)

しかし、グレースはそこに追撃をせず、バックスステップで間合いを保つた。

「チツ、来ねえか」

舌打ちをし、メツビヨーゲンも下がる。

今の攻防、彼が狙っていたのはグレースの足である。

もしグレースが左腕のフェイントにつられ、間合いに飛び込んでいれば、メスによる超速の一撃が彼女の脚に突き刺さつただろう。

この戦い、グレースもバルキリーも高機動型である。対するメツビヨーゲンは一撃こそ強いものの攻撃を当てる事が難しい。

ならば、足を狙つて動きを止めてから、ゆっくりとメツシリンドラーで狙つてやればいい。

それは彼女達も理解していた。

だからこそ、時間をかけても慎重に攻めるのである。

(まあ、奥の手もあるんだがな。天津とやらの暗殺の報告が来ていな

い以上、まだ多くを見せるには早え)

とはいえ、グレースの攻めは慎重そのもの。

バルキリーに至つては接近してすらこない。

メツシリンドーは一撃必殺の威力を持つ代わりに、總じて隙が大きい。

カウンター主体の戦法では、無限に時間を浪費してしまうだろう。そうなれば、後ろのバルキリーとやらが増援を呼んでもおかしくない。

「仕方ねえ、攻めるか」

メツビヨーゲンの身体が、霞のように揺らぐ。

決して小柄とは言えないメツビヨーゲンの身体……それは突如として、グレースとバルキリーの間に現れた。

背後を取られたグレース、近距離にまで接近されたバルキリー。驚きのあまりか、両者の体勢が崩れる。

そんな彼女達の様子に、メツビヨーゲンは醜く顔を歪める。

「身体を極小のナノビヨーゲンにまで分解し、指定の位置に再結集させる。ビヨーゲンズの技の一つだ！」

距離を取ろうとするバルキリーの元へ、メツビヨーゲンは素早く距離を詰める。

「くたばりなあ!!」

斬撃はバルキリーの上半身を大きく切り裂き、肩から胸にかけて大きな傷を作った。

間髪入れず、メツビヨーゲンはメツシリンドーの発射口を背中へと回す。

発射された光線は、背後から攻撃を仕掛けようとしたグレースの頬をかすめ、その白い肌を焼いた。

「熱ッ!?」
「のどか、いつたん距離をとるラビ！」
「でもそれじゃ、刃さんが」

メツビヨーゲンの猛撃。なおも繰り出される斬撃を、辛うじて回避するバルキリー。

斬撃の威力は先ほど見せた通りだ。

一度捕らえられてしまえば、即座に戦闘不能にまで持ち込まれてしまうだろう。

しかし、そんな中でも刃は冷静だった。

「弁慶と対峙した牛若丸は、こんな気分だったのだろうな」

「お前にも弁慶の泣き所はあるだろう。ぶつた切つてやつたら、どんな顔するんだ」

メツビヨーゲンの凄まじい猛撃。だが、バルキリーが見ていたのは、彼ではない。

その奥でまごついているキュアグレースだ。刃の知る限り、彼女は少し前まで、中学2年生のただの女の子だつた。

いきなり戦線の渦中に引っ張り出されて、力を与えられて、迅速な判断をしろという方が無理である。

なら、導くのが先達者たる者の使命。

メツビヨーゲンの斬撃が生み出すわずかな隙間に、バルキリーは銃撃を挟み込む。

「油断したな！」

刃はショットライザーのトリガーを引くと、瞬時に腰を落とし、メツビヨーゲンの懷へと滑り込んだ。

狙いは心臓。斜め下からの数多の銃弾がメツビヨーゲンの左胸に向けて発射される。

「これで、どうだ!?」

「ああ、悪くねえ。だが、真面目すぎだ」

ここまでには、メツビヨーゲンの予想通りだった。

高速機動をもつ相手なら、必殺技は至近距離で撃ちたいと考えるのが自然だ。

だが、近寄ってくれるのが嬉しいのはメツビヨーゲンも同じである。

メツビヨーゲンが選んだ選択肢は、メツシリンドラーによる防御。

だが、バルキリーの銃撃はそれをも砕く。

「なつ!？」

「どうだ。仮面ライダーも捨てたものではないだろう」

「ああ、そうだな」

それこそが狙いだつた。

割れたメツシリンドラーからこぼれ落ちたのは、溢れんばかりの腐食ウイルスの塊である。

「なつ!?

慌ててメツビヨーゲンの足元を潜り抜けるバルキリーだが、仮面に付着した腐食ウイルスは、仮面を溶かし、刃の素顔を一部露出させていた。

右足も同じように溶けており、駆動部分を司る部位が火花を上げている。

これでもう、攪乱戦術はできない。

「さて、まずはお前からだ」

メツビヨーゲンは意識を集中させ、腐食ウイルス達をメツブレードに集めてみせた。

メツブレードは一回り巨大になり、禍々しい紫色の刀身を輝かせる。

『病源斬』!!

反射的に両腕を交差させ、防御の構えをとるバルキリー。
その程度で防げる斬撃ではない。

圧倒的な質量を持つた斬撃が、バルキリーの身体を両断せんと迫る。

しかし、その間に身体を挟み込んだのは、キュアグレースだつた。巨大化したメツブレードの斬撃を受け、二の腕を赤く染めても、グレースは怯まない。手に持ったヒーリングステッキには、既に溢れんばかりの光が充填されている。

「刃さん! 合わせられますか?」
「……ッ! ああ。分かつた!」

瞬間、バルキリーの身体が跳ねた。

ショットライザーのトリガーを引き、エネルギーを充填させながらも、無事な左足でメツビヨーゲンの背後へと回る。

その過程で発射された無数の弾丸が、多少の遅延を伴つてメツビヨーゲンの足元で爆ぜた。

『ダッシュラッシングブースト』

爆発に怯むメツビヨーゲン。

続け様に、グレースのヒーリングステッキが螺旋状の光を放つ。

「プリキュア・ヒーリングフラワー！」

光はメツビヨーゲンの心臓部に空洞を作り、その内にいたエレメントさん達を露出させた。

グレースはそのうちの一體を優しくすくい上げ、素早く後退する。

周囲に満ちていた禍々しい気が和らぎ、バルキリーの足や仮面を侵食していた腐食ウイルスも消えた。

「お大事に」

可愛らしく微笑むグレースの後ろで、人間体に戻ったメツビヨーゲンは、ガクリと膝をつく。

ダメージで倒れたというよりも、力が入らなくなつたと言つた様子だ。

「まいつたな、右足が動かねえ」

メツシリンドラーは破壊され、メツビヨーゲン自身も満身創痍。

彼女達の明確な勝利であつた。

しかし、バルキリーもグレースも変身を解こうとはしない。

メツビヨーゲンから漂う禍々しい気は、和らいだとはいえまだ辺りを覆つているのだ。

「ラビリン、スキヤンの時……見たよね？」

「見たラビ。このビヨーゲンズ、持つてるエレメントさんは一体だけじゃないラビ。見えただけでも、あと4体いるラビ」

「そんなにたくさんのエレメントさんを、ラテにも気付かれずにどこで……？」

「分からぬラビ。もしかしたら、こいつはニアティース様の時にもう……」

推測するグレース達の眼前で、メツビヨーゲンはヨロヨロと立ち上がる。

「ムカつくぜ。お前達如きに、奥の手を使う事になるなんてな」

白衣姿のメツビヨーゲンの身体から、霧が噴き出す。

先の変身でグレースに見せた、スチーム状の霧である。

変身は済み、先程と同じ姿のメツビヨーゲンが現れる。

メツシリンドラーは粉々になり、右足には鎧が纏わっておらず、細い木のようになつてしまっている。

まるで力カシのようである。

「アレ、おかしいラビ」

ラビリンが、異変に気がつく。

変身が終わつても、霧が消えない。

消えないどころか、霧はメツビヨーゲンの周囲で渦を巻き、まるで龍か蛇のように荒れ狂つてている。

「メツビヨーゲン『蝗害』……やれ」

メツビヨーゲンの言葉に従うように、鎌首をもたげた霧は、ゆつくりと2人の元へと近づいてきた。

数分後、状況は一変していた。

変身解除された刃はモールの一角に倒れ伏している。

キュアグレースも白装束のあちこちをズタズタにされ、立つているのがやつとの状態だ。

メツビヨーゲン自身は、変身した位置から動いていない。

彼女達をここまで追い詰めたのは、メツビヨーゲンの生み出した黒霧であつた。

この霧はただの霧ではない、金属を腐食させ、肉を切りその機能を奪う魔の霧だつたのである。

「まだ、負けないッ！」

グレースは霧に向けてヒーリングステッキの先端を突きつける。

そこから放たれた放たれる桃色の光線……無数に放たれるそれを意に介さぬよう、彼女の方へと向かう。

グレースは空を駆け霧を躲そうとするが、霧は四つに分かれ、まるで意思を持つているかのようにグレースの四肢へと纏わり付いた。霧は、虫が葉を食い荒らすように彼女の手袋とブーツを引き裂いてゆく。

「い、痛い……ッ！」

「今助けるラビ！」

辛うじてブニシールドを展開させるグレース。シールドに弾き飛ばされ、霧はメツビヨーゲンの元に戻る。

本日12度目のシールド展開。

ラビリンの表情にも、疲れの色が見て取れる。

グレースの顔も青い。

2人の体力が限界に近づいているのだ。

それでもグレースは、震える手でヒーリングステッキを構え続ける。その姿を、メツビヨーゲンは笑いながら眺めている。

「健気だねえ」

霧はしばらくその場を漂っていたが、やがて再びいくつもの小さな塊に分かれ、ブニシールドの周囲を覆い始めた。

「ラビリン！頑張れる？」

「もちろん、ラビ！」

しかし、ラビリンの頑張りなど意に介さぬように、霧は容易くブニシールドを突き破り、再び彼女の四肢へと取り付いてみせた。

「ッ！」

グレースの表情が、苦悶に歪む。

が、悲鳴は上がらない。

歯を食いしばって耐えているのだ。

霧は腕と足を少しづつ登り、グレースの身体を侵食してゆく。

「く……ッッ！うううつ……」

「のどか、もういいラビ。逃げよう……」

「だめ……それはだめ！私は、プリキュアなんだから！」

「のどか……」

やがて、彼女の腕が上がらなくなり、ブニシールドが解除された頃、

霧はメツビヨーゲンの元へと帰つていった。

手袋とブーツは最早影も形もなく、彼女の体を支える四肢は真っ青に歪んでいた。明らかに、何かしらの病的汚染がなされている。

「はあつ……はあつ……」

それでも攻撃を続けようとするグレースに対し、敢えてメツビヨーゲンは霧を引つ込んだ。

ボロボロの身体で、なおもメツビヨーゲンに使つて突進するグレース。

ふらつく彼女の動きを見切ることなど、メツビヨーゲンにとつては造作もない。

グレースのパンチを躊しながら、メツビヨーゲンは語りかける。

「なぜ戦い続ける？他の人間などどうでもいいはずだ」

「どうでもいい……？そんなわけない!!私、ある人と約束したの。誰かのために頑張るつて。助けを求める人のために……頑張るつて。だから！」

「なるほど。だが、もしその男がその言葉とは裏腹に、人間を蔑んでいたとしたら？」

グレースの目が丸く開かれた。

困惑と、失望それを打ち消すように、彼女はメツビヨーゲンを睨みつける。

強い強い、抵抗の意思を以て。

「あり得ない……あなた達みたいな、みんなを傷つけてもなんとも思わない人とは、天津さんは違う！」

「何が違う!!俺はその何と天津とやらを知つていて。奴はこれまで、数々のヒューマギアを利用し踏み潰してきた。ヒューマギアだけではない、人間も企業も。奴の毒牙にかかつた獲物は数知れずだ」

「そんな、そんなの！」

全身から汗を流しそれでも拳を繰り出し続けるグレースに、メツビヨーゲンは憐みの眼差しを向ける。

もうグレースの拳に力はない。

緑の鱗に当たった拳は、力なくポスッと音を立てるだけだ。

「もうすぐアイツは死ぬ。俺が殺す」

グレースの手が、足が、動かなくなつてゆく。瞳の中の火が、悲しみと絶望に変わつてゆく。

彼女をこれまで動かしてきたものが、今明確に、彼女の心を崩しつつあつた。

瞳を潤ませるグレースに、メツビヨーゲンは嬉々として続ける。

「トドメの前に、お前にも真実を教えてやろう」

「あなたが、天津さんの何を知つてるつて言うの……」

メツビヨーゲンはグレースの両腕を捕まえると、耳元へと口を寄せ、そつと、何かを囁いた。

グレースの目が、これでもかと言うほどに見開かれる。

「……これが、真実だ」

「え……？」

メツビヨーゲンが両腕を離すと、グレースは足元から崩れ落ちた。開いた口を天に向け、呼吸だけをしているような状態だ。

その双眸からは、涙が溢れている。

「お前の仲間の暗殺は確認した。肝心の奴も姿を現さない。1人でよくがんばったなあ。くふふ……あーっはつはつはつ！」

「そんな……どういう事、なんですか……天津さん……」

動かない足、力の入らない手、回らない頭。

首元に、白刃が突きつけられる。

バルキリーも既に動けない、絶体絶命の状況だ。

「プリキュアの最後の1人。暗殺完了だ」

立つ気力も失つたグレースの首元に、メツブレードが振り下ろされた。

独りとは孤独なものだ。

仲間と戯れる偽りより、己の理想を選んだ時、人生は険しく苦しい道となるだろう。

けれど、真に己を強くしてくれるのは、その独りなんだ。
最も信じられる者が自分でれば、人は最後まで戦い抜く事ができる。

だが、私は君に救われた。

君の言葉は、甘い蜜のように、私の孤独を塗りつぶしていった。
私が君を変えようとしたように、君も私を変えたんだ。

ありがとう、花寺 のどか

「ツ!?

私は、何をしていたんだろう。

聞き覚えのある誰かの声が聞こえた気がして。
気がつくと、私は道端にへたり込んでいた。
こんな夜中なのに、裸足で、服もボロボロで。
辺りには、なんだか怖い空気が満ちていて。
けれど、私の周りだけはなんだか穏やかで。
いや、本当は私の周りじゃない。

私の前にいるあの人々の周りが、穏やかなんだ。
そう、私は助けられたんだ。

黄金の鎧を着た、王子様に。

「仮面ライダーヒーリングツドサウザー。3人のプリキュアの力とZ
A.I.Aのテクノロジー、二つを併せ持つ私の力は、桁違いだ」

王子様は、空から降ってきた。

彼金色の槍で、私の首元にあつたメスを、切り払い、返しの穂先で
メツビヨーゲンを吹き飛ばす。

槍と同じ金色の鎧の背では、膾脂色のマントが夜風に揺れてはため
いている。

その後ろ姿には見覚えがあつた。

マントこそしていないが、私が初めて出会つた、あの仮面ライダー
だ。

「私の友に、これ以上の狼藉は許しませんよ」

メツビヨーゲンの前に立ち、仮面ライダーはグレースを守るよう
に、膾脂色のマントを翼の如く広げてみせる。

その圧倒的な偉躯を、グレースは呆けて見ることしかできない。

「お前が天津か。丁度いい。この場で暗殺してやる!!」

遅い来るメツビヨーゲンに、彼は前蹴りを食らわせた。

なんて事はない、ただの前蹴りだ。

しかし、その蹴りはメツビヨーゲンの身体を彼方へと吹き飛ばし、モールの壁へと叩きつけた。

煉瓦造りの壁が巨大なクレータを作つたことからも、その威力の程がわかる。メツビヨーゲンの表情が、明らかに慌てたものに変わった。

「馬鹿な……ッ！俺が？あり得ない!!『蝗害』ッ!!」

メツビヨーゲンは両手を口の中に突つ込むと、押し開くように開いた。

ポツカリと開いた赤い空洞の中から、濃紫の霧が飛んでくる。

先ほどとは比べものにならない濃度だ。

しかし、霧はサウザーが手をかざした瞬間、水蒸気の如く空気へと消えていった。

「何ッ!?」

「ナノサイズまで圧縮した腐食ウイルスか。そんなもの、ヒーリングツドサウザーの前では無力だ」

サウザーは、手に持つた黄金の槍……サウザンドジャッカーを投擲した。それこそ、野球のボールでも投げるかのように、軽く。

到底威力も出ないはずのその攻撃は、メツビヨーゲンの肩に突き刺さり、建物を貫通した槍は彼の身体を壁へと縫い付けた。

「あああああっ!!」

絶叫するメツビヨーゲンに、サウザーは語りかける。

「確かに彼女は独りだ。だが、自分の夢のために君達の前に立ち続けた、最強の1人だ。群れの中でしか力を振るえない君に、彼女を笑う資格などない」

メツビヨーゲンに背を向け、サウザーはグレースへと掌を差し出した。

グレースは導かれるように、自身の手を重ねる。

傷だらけのその手は、サウザーの手に触れた瞬間、元の真っ白な美しさを取り戻した。

「おうじ、さま？」

「よく頑張ったね、花寺 のどか。遅くなつてすまないが、助けに来了よ」

「その声、天津、さん？」

無邪気にも、首を傾げるグレース。

傷だらけの衣を纏う、傷一つない雪色の肌。潤んだ瞳はまるで、長い虜囚の憂き目から解放されたお姫様のようだ。

その前に跪くサウザーはまるで姫を助けにきた騎士のようであつた。

「助けにきて、くれたんですか？」

グレースの問いかけに、サウザーは優しく頷いた。グレースの表情に、儂げな笑みが戻る。

「本当なんですか、天津さん……あなたが、ヒューマギアと人間の戦いの始まりを作つたつて。私にはよく分からないですけど……それつて……」

「心配ない。時が来たら全てを話すつもりだ。その前に、まずはあのメツビヨーゲンとやら、私が征伐してみせよう。私には決して負けない秘策があるからね」
「秘策……？」

首を傾げるグレースに、サウザーは背を向けて月の方を眺めてみせる。

立ち上がったグレースは同じ方向を見るが、その向こうには何があるかわからぬ。

そんなサウザーの元へと飛び込んでくるメツビヨーゲン。

手には、先程サウザーが放り投げた槍と、巨大化したメツブレード握られている。

「実は、ここに来たのは私だけじゃない。不本意だが、助つ人もいてね」

槍と巨大化させたメツブレードの先端が、サウサーの胸元へと迫

る。

切られた刃さんの姿が脳裏に浮かぶ。

アレをまともに受けたら危ない！

サウザーは半身を切り、グレースを後ろに隠すようにして構える。

「危ない！」

直後、鋼が鋼を切り裂く轟音と共に、凄まじい衝撃が彼女の身に降りかかった。

目を開いたグレースは、またその目を丸くすることになる。

それもそのはずだ。

彼女の眼前では、全身を銀色の鎧に包んだ戦士が、手に持った銀刃の剣でメツビヨーゲンを斬り倒していたのである。

「サシの喧嘩でも、人をサシちゃダメでしよう！はい、アルトじやナイトつ！」

驚愕に顔を歪ませるメツビヨーゲンの胸元から、一瞬遅れて火花が吹き出す。

銀の戦士の斬撃が、彼の胸部の装甲を切り裂いたのだ。

胸を押さえ跪くメツビヨーゲン。

何が何だか分からぬと言った様子のグレースの元に銀色の戦士は歩み寄り、手を差し出した。

「初めまして、キュア、グレース？俺は仮面ライダーゼロワン。ここは俺に任せといて」

「ゼロワン？あなたも、仮面ライダーなんですか？」

首を傾げるグレースに、ゼロワンは得意げに指を一本立てて説明を始める。

「ああ。俺はヒューマギアと人間を守る戦士。で、この嫌味つたらしいのは、仮面ライダー サウザー、色々ややこしいけど、君を助けに來た」

「一言多いですよ。まったく……間に合つたからいいものの、貴方のせいで彼女が大怪我を負つてしまつた。この埋め合わせは、必ずしていただきますよ」

「分かつてるよ、天津社長」

並び立つ2人の前で、メツビヨーゲンはふらつきながらも立ち上がる。

全身からは紫色の蒸気が吹き出しており、明らかに普通ではない様子だ。

やがて蒸気は色のついた煙となり、メツビヨーゲンを包み込む。

煙の奥から、不機嫌そうな声が聞こえる。

「散々邪魔しやがって、何なんだお前達は！」

メツビヨーゲンの問いに、2人は各々のポーブズをとつてみせる。ゼロワンは腰を低く落とし、相手を人差し指で捉えるいつものポーズだ。

対してサウザーは胸をそらし、相手を見下すように槍をポンポンと弄ぶ。

「仮面ライダーさ。お前を倒せるのは、世界でただ1人、俺だ！」

「ヒーリングツドサウザーとゼロワンメタルクラスタホッパー。我々の力は、桁違いだ」

グレースの前に立つ2人の騎士。

彼らは今、紛れもなく彼女にとつてのヒーローだった。

E p i S o d e 9 : [さよなら滅病先生]

男は、全てに絶望していた。

男は元々はエリートの外科医であり、その卓越した手術の腕と薬学の知識から、『滅病の牙』と呼ばれ将来を嘱望されていた。子供達からの人気も高く、彼は『滅病先生』と呼ばれ慕われていた。

彼の家系は元々医療関係者を多数輩出しており、その中でも彼は頭1つ抜けていた。

24歳という若さで肝臓の腹腔鏡手術を成功させた事により、一躍医局でも一定の地位を築く。しかし、25歳の春、順風満帆だった彼の人生は急転直下の下り坂を迎える事となる。

右足の人差し指の感覚がなくなり始めたのだ。

症状は徐々に悪化し、26歳の夏には右足の自由が効かなくなつていた。この頃から前線を退くようになり、外科医から診療科医に転じる。

男がALSと診断されたのは、それから半年後の事だつた。

宗家の対応は厳しかつた。

男は家からほぼ見捨てられる形でホスピスに送られ、死を待つのみの身となつた。孤独な環境の中で、少しづつ少しづつ、自由になる体の部位が無くなつてゆく。

男は人間を憎んだ。自分を崇め、奉り、用が住めばゴミのように捨てた人間をひたすらに憎んだ。

下半身が、指先が、胸のあたりが……やがて、麻痺が呼吸器まで達しようとしていた頃……彼は現れた。

「お前、死にかけだな。その命、俺たちのために使つてみないか?」
ダルイゼンの気まぐれで『ヒトビヨーゲン計画』の実験台に選ばれ、男は4つのエレメントを注入される。

元々備わっていた土のエレメントと合わせて5つのエレメントを手に入れた男はメツビヨーゲンとして新生した。

その目に、人への深い憎しみが刻まれていた。

これは、半年前の出来事……ビヨーゲンズの人間界侵攻が開始され

る前の話である。

地下駐車場を、旭光が埋め尽くす。

眩いばかりの光の中で操り人形の如く立ち上がるは1人の戦士。白衣の中に菜の花色の戦装束を纏つた戦士……キュアスパークルだ。彼女は立ち上がるや否や、変身を解除し、その場に倒れ伏した。パートナーである猫のヒーリングアニマルのニヤトランが慌てて彼女の元へ駆け寄る。

「ひなた！ おい！」

「大丈夫……元気いっぱい、だよ」

ひなたは微かに指を動かし、ニヤトランにピースをしてみせる。数時間前、一度はウイルスに蝕まれた彼女。

絶命の淵に立たされた彼女は、一か八か、賭けに出たのである。命を繋ぎ止める最後の賭け……それは、胸に、ヒーリングステッキをそのまま突き刺す事だった。流れ込むのは、大量の治癒の力。

その力は彼女の中のウイルスを消し去り、傷すらも癒す事に成功していた。

だが、ニヤトランの表情は固い。

「ひなた、なんて無茶するんだよ！」

「でも、復活できたでしょ？」

「あんな!! 自然と違つて、人間の回復力には限界があんだよ。それを超えたら、それはもうひどいことになるんだからな」

「へー、それ、めっちゃやばいじゃん。次から気をつけるね」

ひなたは壁に手をつき、よろよろと立ち上がる。額には脂汗が浮かび、まだ多少呼吸が荒い。

だが、その目はしっかりと出口を見据えている。それを見たニヤトランは、全身の強張りを解き、小さく柔らかな肩に飛び乗った。

「でもよ、無事で良かつたぜ」

辺りに敵の姿は無いが、そう遠くない地点から爆発音や衝撃音が聞

こえてくる。そう遠くない地点で、戦いが起ころっているのだ。

のどかが戦つているのなら、早く助けに行つてあげなきやいけない。

壁を伝い、ひなたはエレベーターを目指す。

「おいおい！無茶すんなよ」

「無茶じや、ないし。あんなヤバイの、のどか1人に任せられるわけ、ないじやん」

立ちはだかるニヤトランを押し除け、前に進む。のどかは、自分助けなきやいけない。その思いが彼女を動かしていた。

ひなたの眼前で、エレベーターが動き出す。誰かが降りてこようとしているのだ。普通の人かもしけない、けど、そうじやないかもしない。

ヒーリングステッキを構え、その前に立つ。震える足、軋む体。けれど、負けられない。

銀の小部屋に入つてたのは、2人の人物。

額の汗を拭い、ヒーリングステッキの肉球をタツチしようとしたその時、2人のうちの1人が声を発した。

「ひなた！大丈夫！」

「ちゅちー？」

声の正体は、ちゅだつた。

霞む視界の中で、その姿が鮮明になる。

服はあちこち破け、何箇所も包帯が巻かれているが、彼女の歩みはしつかりしている。
(無事だつたんだ……良かつた……)

一步を踏み出したひなたは、そのままちゅの身体に倒れ込んだ。正直、立つてはいる事すら限界だつたのだ。

「ひなた!! 大丈夫!!」

「よかつたあ……ちゅちーは無事で」

「……人の心配より、自分の心配をしなさい。のどかの所にも助けが向かつてははずよ。みんな、この人のおかげだつたの」

ちゅは頷くと、もう1人の人物を手で指した。耳におかしな被り物

をつけた、綺麗な女人の人だ。

あの飾り物をつけている人たちを最近よく街で見かける……確かに、ヒューマギアとかいうロボットの人達だ。

「イズと申します」

ヒューマギアの女人人は、両手を揃え、ぴったり90度腰を折つてみせた。あまりにも整ったその仕草に、それがお辞儀だという事に気がつくまで時間がかかった。

「あ、はじめまして、平光です……って、違う違う！」

私は首をぶるんぶると振る。

挨拶がしつかりしすぎていて、妙に受け入れてしまつた。この人がヒューマギアなのは頑張つて飲み込むとして、なんでこの人がちゅと一緒にいるんだ。

「ちゅちー、この人誰!?」

「今言つてたでしょ？ イズさんよ」

「そうじやなくて！」

「冗談よ。でも、込み入つた事情だから、詳しく話すと長くなるのよね……」

「私が解説いたします」

ちゅを制し、イズと名乗つた女性は慎ましやかに前に歩み出た。

「私は飛電インテリジエンス代表取締役社長、飛電或人社長の秘書を務めております。会社に関わる厄介事を調査するのも秘書の仕事の一つ……この2週間、沢泉様には、我々を取り巻く『事件』について、情報提供をお願いしていました」

「社長秘書か……え、それってめっちゃ凄くない!? てか事件つて何? 私だけ何も分かつてないよー！」

頭を抱える私の肩を、ペギタンとニヤトランが叩く。彼らもちろんかんぶんといった様子だ。

同士を得た私は、改めてちゅに説明を要求する。

ちゅは少し顎に手を当てる、説明を始めた。

「簡単に言うと、誘拐事件?」

「ちゅちーもハテナマークつくるじゃん!」

「と、ともかく！ イズさんと私は、色々調べたの。変な敵が突然現れたり、街に知らない場所が現れてたりした事とか……ね」

「変な場所って？」

「例えば、すつごい高いビル群ね。あと、警察みたいな建物だつたり「うーん、見たことあるような……無いような……あつ！ 最近、お使いの帰りによく知らない道に迷い込んだりする事は増えたかも」

「いや、それは寄り道ばっかりしてるからだろ」

小言を言うニヤトランの頭を小突く。

ニヤーニヤーと抗議するニヤトランを脳天チヨップで黙らせ、私は続ける。

「とにかく、その変な事が起きてるのには、理由があるって事だよね」「そうね。この異変は全部、1人の人物が企てた計画のせいだったの。ビヨーゲンズは利用されてただけ。私が戦った滅亡迅雷・netの人達もよ」

「めんぼうしんらい？」

綿棒を信頼する組織だろうか……どこかで聞いた事のある名前だ。だが、そんなへんちくりんな組織を忘れる事があるだろうか。

困っている私に、ニヤトランが「さつき戦つてたやつだよ」と耳打ちする。

なるほど、彼は綿棒を信頼する組織の一員だったのか。彼の名前は……確か

「斜面ライダーだ！」

「仮面ライダーな」

そうか、仮面ライダーか。

うん、そんな名前だつた気もする。

頷く私を無視して、仲間達は話を進めていく。

「私達は今から、その真の敵の元へ向かいます。敵の目的が想定通りなら、おそらくあなた方のお仲間もそこに」

「のどかの事ね。今1番危険なのも、もしかしたらあの子かも」

「えーっ!? ジャあ急がないと！」

「大丈夫です。敵もすぐに彼女を襲う事はしないでしよう。もしもの

時に備えて、助つ人も呼んであります」

「そういう事よ。ちよつと、釈然としないけど……」

そう言つて、ちゅはカバンからヒーリングステッキを取り出した。
ここから先は、臨戦態勢という事だ。

同じようにする私の前に、イズさんは電子タブレットを差し出して
きた。画面には、とある人物とその名前が映し出されている。

「この人物に、気をつけてください」

「この人……えーっ!? この人が敵なの!? でもそれって……」

「はい。率直に言つて、状況は危機的です」

空は既に暗く淀んでいる。

私の預かり知らぬところで、状況はどんどん悪くなっているらし
かつた。

場所は変わり、モールの広場。

のどかを守るように、2人の仮面ライダーは並び立つ。その偉軀と
対峙するメツビヨーゲンは……焦っていた。

先ほど広範囲に吹き出した霧は、彼の身体を覆うように展開され、
彼の脅力を格段に強化していた。自身の周囲に放った霧を硬化し、身
を覆う大鎧を手に入れたという具合である。

身長は3mにも及び、その豪腕から繰り出される一撃はモールの地
面を割る程だ。

しかし、そんなメツビヨーゲンをして、2人のライダーの攻略は
簡単ではなかつた。

「巨大化した分、動きは鈍重になりましたね」

その視界の端で、臙脂色のマントの端が揺れる。直後、鋭い槍の一
撃が飛んできた。

彼の反応速度を優に超える斬撃……辛うじて防御が間に合つたの
は、メツビヨーゲンの戦闘センス故である。槍は霧のバリアを突き破
り、表皮ギリギリで止まつた。

「どうやら、貫けないようだな」

メツビヨーゲンは笑み、右腕の霧を槍状に変え、サウザーへと追撃する。

しかし、その槍は銀色の盾に受け止められた。ゼロワンのアーマーから分離した銀色のバッタ達が、盾状になり彼を守つたのである。

「小賢しい真似を！」

反撃で繰り出す拳は、飛んでくるバッタの盾に防がれてしまう。続け様に放つ拳の連打も同じだ。

視界を塞ぐ盾の隙間に、光る槍を構えるサウザーの姿が映る。

「感謝などしませんよ」

「はいはい。まつたく素直じゃないんだから」

「言うや否や、2人は同時に跳んだ。

サウザーの構える槍の先端はこれでもかというほど光り輝いている。この光は、プリキュア達の使うヒーリングステッキの輝きと同じだ。

「く、くそっ！」

サウザーとゼロワン。両者を前に、メツビヨーゲンは防御を選んだ。本来ならこれは正解だ……しかし、彼の防御力を優に超える攻撃力を持つ2人に対し、それは悪手である。

光槍から生み出される光は、生み出された無数の銀剣の刀身により乱反射し、増幅される。二人の力を合わせた、合体攻撃がメツビヨーゲンの胸に向けて繰り出された。

【サウザンド・ヒーリングブレイク】

【アルティメット・ストラッシュ】

サウザーの槍は腕ごと彼の体を貫き、ゼロワンの剣は破つた防御の先にある彼の体を切り裂いた。

二つの必殺技を同時に受け、メツビヨーゲンの体が激しく爆散する。

硬化した霧の鎧は剥がれ、彼は再び、矮小な人間の身体へと戻つてしまつた。

「ぐ……くそっ!!」

最早立つことすらままならないメツビヨーゲンの元へ、2人のライダーは悠然と歩み寄る。

ゼロワンの剣、サウザーの槍、微かにでも動けばすぐに身体は両断されるだろう。

メツビヨーゲンは逡巡する。

周囲に展開している霧は有限、彼自身の体に取り憑いているナノビヨーゲンそのものだ。

先ほどの攻撃でだいぶ数を減らされてしまったが、まだ変身をし直せるほどに数はある。

まだ勝機はある。

「さて、話を聞かせてもらおうか」

「調子に乗るなよ！」

メツビヨーゲンはそう叫ぶと、右手に精製したメツブレードを強く握りしめた。

彼の体から飛び出たナノビヨーゲン達がそこに集まり、身の丈の数倍はあるであろう巨刀を形成してゆく。

「ビヨーゲンズ・エレメントチャージ!!」

【ビヨーゲンズ・エレメントチャージ】とは、彼の核となるエレメントさん5体をフルに活用し、一撃の威力を跳ね上げる奥の手である。エレメントさんが4体しかいない今、最大出力は劣るがそれでも問題ない。

本来これは、山一つを丸ごとナノビヨーゲンで病に冒すための技である。人間2人を消すことなど訳はない。

「分かっていますね、飛電の社長」

「ああ。決めるのはアンタなんだよな」

「ええ。エレメントさんとやらを救出できるのは、私の持つプリキューアの力だけですから」

圧倒的な力を前にしても全く物怖じしない2人に、メツビヨーゲンは激昂する。

（俺はこれまで、憎しみで生きてきた。俺を見捨てた宗家の人間。俺の助けを受けながら見舞いにすら来なかつた患者共。俺の才能を

知つていながら、それを評価しなかつた医局の奴ら。そいつらを滅ぼすために、俺はこの力を手に入れた。俺は、人が憎い。目に映る全てを滅ぼしても止まらないほどに）

憎しみが、彼の力を増大させる。

「ほざくな！」

メツビヨーゲンはメツブレードを居合の型に構え、横に一閃した。モールを両断せんばかりの一撃が大気を揺らす。

しかし、それは2人の身体が空へと飛んだことによつて空を斬つた。

ゼロワンの展開する鋼の盾に身を隠し、サウザーは足元にエネルギーを集中させていた。

【サウザンド・デストラクション】

サウザーの爪先に集められたエネルギーは煌々と光り輝き、刀の先を覆うナノビヨーゲン達を浄化せんと迫る。

危機的状況に、メツビヨーゲンの頬が締まる。

ここまででは予想通りだ。

メツビヨーゲンは体を半回転させると、回し切りのようにもう一度斬撃を繰り出してみせた。刃はゼロワンと盾の数々を吹き飛ばし、サウザーはの足とぶつかり膠着する。

「これで終わりだ！ 天津 埼」

「そこはさせませんよ」

サウザーは自身のベルトに取り付けられたスイッチを何度も押した。その度に光は明度を増し、メツブレードから伝わる圧力が大きくなる。

光は闇を打ち消し、ナノビヨーゲン達を溶かしてゆく。

「こんな事もあるうかと、サウザンドライバーの出力を上げてきた。長時間の使用には向かないが、短期決戦なら問題ない」

「キングビヨーゲン様の最高傑作である俺に、そんなものが通じるどでも！」

「通じさせてみせるさ」

サウザーの言葉通り、碎けたのはメツブレードの刃であつた。碎け

ちる破片を押し除け、光に満ちた爪先がメツビヨーゲンの胸元に突き刺さる。

必死に耐えるメツビヨーゲン。しかし、その体からは徐々にナノビヨーゲンが剥がれ落ちてゆく。

「何故だ！絶対の力を持つはずのこの俺が、何故圧倒されている!?」「君の言う絶対は、過去の話だ。人間は確かに、苦難を前に竦み、慄くかもしれない。しかし、それを乗り越え進化するのもまた人間だ」「ニンゲン、だとおつ！！」

わずかに残ったナノビヨーゲンをメツブレードに装填し、メツビヨーゲンはサウザーの足へと斬りかかる。

しかし、サウザーはサマーソルトの如くメツビヨーゲンを蹴り上げると、そのまま空中で宙返りし、返す足刀で頭を蹴り抜いた。

「人間を嘗めるなよ。バケモノ！」

「……くそつ」

メツビヨーゲンの顔が、醜く歪む。怪物はその身体をぐらりと搖らし、仰向けに倒れ……

「末長く、お大事に」

声もなく爆散した。

霧散する霧の中から、ぐつたりした様子のエレメントさん達が姿を表す。

サウザーは彼らを手で掬うと、槍の先端を彼らに突き付けた。

槍の先端から生み出される光は彼らを照らし、生氣を取り戻させてゆく。

「さて、これらがどこから盗られてきたエレメントなのか、調査を進める必要があるな」

天津は変身を解除すると、既に変身を解除していたのどかの元へと歩み寄った。

彼女も大分回復したようで、満面の笑みで彼を待っている。

だが、天津は彼女の元へたどり着く直前、ガクツと膝をついた。

顔色は青く、今にも倒れ伏してしまいそうな様子だ。

「天津さん?!」

「ヒーリングッドサウザーの副作用か……無様な姿を見せてしまったな。ほんの少しの無理でこの体たらくだ」

駆け寄つてくるのどか。

今にも泣きそうな彼女の肩に手を重ね、天津は微笑んでみせる。明らかに強がりと分かる笑みに、のどかの表情はさらに曇る。

「君の戦いは、バルキリーのメインカメラを通じて見させてもらつた。本当なら、もつと早く来るべきだつたんだが」

「私、何の役にも立てなくて……」

「いや、君のおかげで勝てたんだ。唯阿が敵の武器を破壊し、君がエレメントさんを救い出した。これだけで、メツビヨーゲンの戦力をどれだけ削ぐことができたか」

「でも……」

俯くのどか。

静寂の中で、戦いは終わつた。

そんな中で、律された機械の声がそれを切り裂く。

「いえ、本当の戦いはこれからです」

現れたのは、イズと2人のプリキュアだつた。

突如として現れた緑のヒューマギアの人。その後ろにいる人物を見つけた瞬間、私の体は反射的に動いていた。

「ひなたちゃん!!」

次から次へと押し寄せてくる感情の波に身を任せ、私はひたすらに抱きついた。

ひなたちゃんの身体には、明らかに力がなかつた。本来は彼女を介抱するべきなのだろう。だが、最初に身体に訪れたのは、声も出せない程の安堵の波であつた。

ちゅちゃんが、半ば呆れた様子で私たちを見つめている。
「少し見ない間に、2人とも随分仲良くなつたのね」

「いや、時の流れを感じますなあ」

「ほんの1週間前まで、身体動かすのにも難儀してた子がねえ」

「本当ですね。まったく」

おばあちゃんみたいなやり取りをする2人に構わず、私はひなたちやんの胸で安心を享受し続けていた。

そんな私達に構わず、向こうの話は進む。

見た事の無いお兄さんが、緑のヒューマギアの人の隣で話を聞いている。腰に付けていたベルトを見る限り、あの人が、さつきゼロワンに変身していた人だろうか。

やがて、緑の人の説明が終わり、うんうんと頷いていたゼロワンの人が、喋り出す。

「つまり、俺たちがさつき倒した奴とは別に、この戦い起こした本当の敵がいるってわけね」

「はい。元々この一連の襲撃事件は、その裏に隠された『とある人物の誘拐事件』をカモフラージュするために起こされました。そしてその犯人は、この中にいます」

イズさんのその一言で、場に緊張が走った。誰もが互いに顔を見合させてている。

あ、ひなたちやんだけは、まだ首を捻っている。状況が分かつてないみたいだ。

自然と円形になつた私たちの輪の中に、天津さんが前に進み出た。「それは本当でしょうね。こちらは部下を1人やられているんだ。下手な説明をするようなら、ただじやおきませんよ」

「まあまあ天津社長」

「馴れ馴れしいですよ。まだ私は、あなたを完全に信用した訳ではありません」

天津さんの表情は硬い。

きっと天津さんも、ここに来るまでに長い戦いをしてきたのだろう。

事件についてはよく分からぬが、この中に真犯人がいるらしい。私は後ろ手に構えたヒーリングステッキをギュッと握りしめる。

まだ、事件は終わってないんだ。

今この場にいるのは……

私……【花寺 のどか】【ちゅちゃん】【ひなたちやん】【イズさん】
【ゼロワンの人】【天津さん】【刃さん】そして倒れてる【メツビヨーゲ
ンの人】

この8人の中に、真犯人がいるんだ。

イズさんが、緩やかに指先を動かす。

「その犯人は……」

しかし、その指が誰かを指し示そうとする前に、乱入するものが
あつた。

「待ちたまえ!!」

場に、天津さんの声が轟いた。イズさんの手の動きが止まる。

「天津社長、どうされましたか？」

「私にも犯人がわかつたのでね。ヒューマギアの君では思いもつかな
いような、1000%完璧な推理だ」

イズさんは目をパチクリさせている。それはそうだ、推理を横取り
されたのだから。

皆の混乱に構わず、天津社長は細長い指の先のある人物へと向け
た。

その人物は……

【犯人は君だ、飛電の社長】

「ええっ!?俺なの?」

ゼロワンの人は、オーバーリアクションでよろけてみせる。隣にい
たイズさんも、驚きのあまり口が塞がらないようだ。

2人の反応で確信を得たのか、天津社長は悠然と彼等の元へと歩み
寄る。

「君は自社のヒューマギア達を壊され、兼ねてより私に恨みを抱いて
いた。そして、Z A I Aと敵対するビヨーゲンズと手を組み、国家権
力をけしかけることで、Z A I Aエンタープライズ全体を失脚に追い
込もうとした。その傍ら、私に協力する花寺のどかを誘拐し、その力
を己のものにしようとした。全ては、ヒューマギア達の恨みを晴らす

ためには。違うかい？」

ズバリと音がしそうな天津さんの指差し。場にいる誰もが口を開かない。皆同じ表情だ。実情を知らない私だつて同じである。

多分、それは無いんじやないかなつて顔だ。

1番最初に復活したのは、指を刺されたゼロワンの人だつた。大きなため息と共に、彼は天津さんの指先をやんわりと退けてみせる。

「俺たち、さつき一緒にそのビヨーゲンズと戦つてたよな」

「さつきの戦いがお芝居だつたかもしれない」

「トドメ刺したのアンタだよな」

「君が土壇場で彼を裏切つたのかもしれない」

「土壇場つて、俺はアンタに呼ばれたからここに来てるんだろ。もし俺があの怪物の味方だつたら、そもそもアンタに協力なんてしないつて」

天津さんの立場が、目に見えて危うくなつてゆく。助け舟を出したいところだが、正直私も、彼の推理が正しいとは思えない。

体力の少なくなつた天津さんに、ちゅちゃんが追い討ちをかける。「あなたの推理が正しければ、私達がここに来る前に、彼はまずあなたを襲うんじゃないかしら」

「ぐつ……それは、確かにそうだが」

ちゅちゃんの援護射撃が、天津さんの体制を崩す。

これは、どつちを応援したらいいんだろう。

「分かつた！私のヒーリングツドサウザーに恐れをなしたんだ。それなら全ての辻褄が合う!!」

もう天津さんの体力は限界のようだ。

そして、ひなたちゃんの一言が、社長にとどめを刺した。

「てかさ、それだつたら、もうここにみんなが揃いかけた時点で逃げた方が良くなない？」

天津さんはその場で項垂れた。

その目は家に入れてもらえない家で少年のような目で、どこか哀れみすら感じさせた。

天津さんはその目でイズさんを仰ぎ見る。

「私の推理は、合つてゐるのか」

「ほほ違います。そもそも、天津社長の仰つた動機は企業同士の問題であり、今回の騒動とは何ら関係がありません」

この発言が決定打となり、天津さんはベンチの上に崩れ落ちた。脳内のゴングがカンカンと甲高い音を立て鳴り響く。

天津さんは服の色の通り真っ白な灰になつた。

でも……

「じゃあ、犯人は誰なんですか」

私の一言で、場の空気が再び引き締まる。灰の降り注ぐ一部を除いて。

イズさんの耳元の飾りが、キュイキュイと機械の音を立てる。数秒の沈黙の後、満を辞して、イズさんは犯人を指し示した。

「犯人は、この方です」

その指の先にいたのは……意外な人物だつた。

E p i S o d e 1 0 : 【皆既世食】

ここはデイベイクタウンの一角。

重要な荷物の保管場所となる、金庫室である。

巨大な広場の形を取るその奥には、巨大な錠前のついた鉄の扉があり……そこでは、戦闘が行われていた。

ランペイジバルカンの銃撃が、暴走したトリロバイトマギアの群れをなぎ倒す。彼の眼前に聳え立つは、巨大な鉄の扉だ。

「あいつがいるのは、この奥か。待ってろ、今助けてやる」

手に持った蒼銃に手をかけるバルカン。しかし、トリロバイトマギア達は際限なく徒党を組み、再びバルカンの前に立ちはだかつた。

「チツ!! 流石に統率が取れてやがる!」

トリロバイトマギアによる銃撃に、思わず防御の構えをとるバルカン。銃撃は彼の構えを崩し、床に倒れさせる。

絶体絶命のピンチ……

しかし直後、彼らは、なだれ込んできた別の集団によつて崩される事になる。

「キエエエエーッ!!

奇声を上げて現れたのは、赤面のマギア達だ。数は40ではきかないほどだろうか。

「アレは、暗殺野郎の……あの頭の触覚は、さつきの奴らか」

バルカンが茫然と見つめる横で、雛達は凄まじい連携でトリロバイトマギアを片付けてゆく。

ドードーマギア達は金庫から彼ら遠ざけるつもりのようだ。それを見たバルカンは、「フン」と心地よさげに鼻を鳴らす。

「なるほど。奴を味方に引き込んだと言うわけか。敵の敵は味方……アーツの秘書も、なかなかやるじゃないか」

バルカンは懐から武器を取り出すと、ベルトのスイッチを入れた。武器の先端には、虹色の光弾が充填される。

「下がつてろよお前ら!!」

叫ぶと同時に、バルカンは銃の引き金を引いた。超高出力の光弾は

斜線上にいたドードー・トリロバイトをなぎ倒し、鉄の扉に直撃する。

【ランペイジ・オール・プラス】

派手な爆発と共に、鉄の扉は吹き飛んだ。辺りに煙が充満し、揺れが起き始める。

「試作品つてのは、威力のタガが外れてるって意味か……だが、この方が都合はいい」

慌てるマギア達を押し除け、バルカンはその中に顔を出した。

「助けにきたぞ」

「ああ、ありがと。けど、まさかアンタが来るとはね」

中にいた人物は、だいぶ疲れた顔で。それでも笑顔で、彼の手を取りつた。

イズさん指の先にいた人物……それは意外にも、彼女の近くにいた。彼女のすぐ隣にいる人物。そう、或人さんである。

「あなたが、飛電インテリジエンス社長・飛電或人誘拐事件の犯人です」

「えっ?!俺?!てか、誘拐されたのも俺!」

「白々しい。あなたは或人社長ではありませんね。非常に完成度の高い偽物……ですが、私の目は『まかせませんよ』

「偽物つて……それ本気で言つてんの?」

驚いているのは或人さんだけじゃない。天津さんや私もそうだ。

ひなたちやんの方を見る。ひなたちやんはおどろいて……ない。ちゅちゃんも同じようだ。

イズさんからすでに犯人を聞いていたという事なのだろうか。

復活した天津さんが、ずんと割つて入る。眉間に寄せられた皺で小川が作れそうだ。

「何を言い出すかと思えば。私と同じ推理とは。やはりヒューマギアではこの程度が限界ですか」

「あなたの推理は間違っていました」

イズさんの放つ言葉のボディーブローが天津さんの心に突き刺さる。

「ただ一点、犯人を除けば」

「どういう事ですか？」

「彼は或人社長を誘拐し、デイブレイクタウンの一角に監禁しました。そして、社長に化けて業務をこなす傍ら、ビヨーゲンズにプリキュアの方々を襲わせたのです」

「ちよつと待つてよイズ。本当に俺が犯人だつての？ てか、何のためにそんなことするのよ」

或人さんの疑問はもつともだ。そんな周りくどいことをする必要がどこにあるんだろうか。

推理の説得力で言えば、イズさんのものも天津社長と大差ない。仮に或人さんが犯人だつたとして、動機が分からぬのだ。

しかし、ひなたちやんもちゅちゃんもそこに突つ込む事はない。なんだか、私だけ仲間外れみたいでちよつと寂しい。

「あなたが、芝居を打つてまで天津社長に協力した理由。それは、ここに私達全員を集め、始末するためですね。社長……いえ、こう呼んだ方が宜しいでしようか。ファイース」

集めることそのものが、狙い？

イズさんの言っていることがわからない。

「私は一度たりとも、『あなたの事』を『或人社長と呼んだ事はありません。あなたに気取られないよう送り続けていた小さなメッセージでしたが、それに気がついた不破様が、先ほど救出に成功しました。時間稼ぎは、ここまでです」

「えー、と。マジで何言つてるか分からぬんだけど。もし俺が」

刹那、或人さんの言葉は、どこから飛んできた投刃によつて遮られた。刀は彼の頬をかすめ、血を流させる。

「答えは、これだ」

一同の視線の先……そこには、ドクロの面をつけた鳥のような怪人がいた。

ちゅちゃんが臨戦体制をとる。

「あなたは、アンサツ!？」

「キュアフォンテヌか。安心しろ、今は味方だ」

「じゃあ、イズさんの言つてた助つ人つて……」

「お前の推察通りだ。それよりも見てみろ。あの男の顔を」

アンサツに言われた通り或人さんの方を見てみると、或人さんの顔

からは血が流れていた。その他の中は……青。

他の色が青つて……人間じやないつてこと!?

天津さんも驚いているようだ。

「つたいなあ。せつかく演技してたのに、どうしてバラしちゃうかねえ」

或人さんの頬が、口裂け女のようにキュツと裂けてゆく。その姿のあまりの不気味さに、私は目を逸らす事ができない。

あの顔は笑っている、のだろうか?

「貴様がアーヴの意思の外で動いていた事は分かつている。この周囲は既に100のヒナ達が包囲している。逃げられんぞ」

「どうやら敵は同じようだ。奴を倒すためにここは協力するとしよう。ニワトリ君」

髑髏面は軽く舌打ちをし、天津社長の横に並んだ。気がつくと、辺りの建物の影から赤い面の人物達が覗いている。

「ふふ、共通の敵を前にして、手を組むというわけだね。けど天津社長、それは弱者の選択ではないかい」

酷く不気味な笑みを浮かべる或人さん。その全身が、蜃氣楼に包まれるようにはばやけてゆく。

「逃すかッ!!」

ぼやけゆく或人さんの影に、天津さんが蹴り込む。途端、霧は晴れ、或人さんの懷にシルクの爪先が突き刺さる姿が露わになつた。

否、そこにいたのは或人さんではない。

背の低い、黒フードの人物だ。

「それが、君の本来の姿というわけか」

「そうさ。ボクはタイムジャッカーのファーニス……その模造品だ。

アークの『失われた過去の記録』によつて復元されたヒューマギア。もつとも、力はオリジナルには遠く及ばないけどね』

『タイムジャッカー』その言葉に聞き覚えは無かつた。

だが、同時に感覚が告げていた。

この人は、私達とは異質の存在なのだと。

彼女は足元に倒れていたメツビヨーゲンを踏みつけ、ケタケタと笑つてみせる。

「メツビヨーゲンはボクのパートナーだつたんだ。死に瀕し、誰からも見捨てられた医師が、人間を恨みぬいた末に変身した怪人を、ボクとビヨーゲンズで改良したのさ。もつと力をつけた暁には、アイツはボクも倒そうとしてたみたいだけね」

そんな彼女を、私はキッと睨みつけた。

仲間を自分で倒しておいて、笑えるなんてあり得ない。

「タイムジャッカーのフイーニス。アークのロストファイルに君のデータがあつた。情報によれば、君は存在ごと消滅したはずだが」「そうだね。今のボクはアークの意思に作られたヒューマギアに過ぎない。迅やドードーと同じ、ただの複製品さ」

「なるほど……ッ!」

天津さんの言葉を遮り、フイーニスの拳が天津さんの顔面へと飛んだ。辛うじて払い落とす天津さんに、さらなる乱撃が襲い掛かる。

二人は生身のまま、打撃の格闘戦を繰り広げる。鋼が肉を打つ鈍い音が幾度となく響く……聞いているだけで痛いが、二人とも怯む様子を見せない。

「戦いに疲れた君達を後ろから撃つか、飛電或人を人質に君たちから力を頂く作戦だつたんだけどね。まったく、ゼロワンの残した忌々しいヒューマギアのせいで、全てが台無しになつてしまつたよ」

「どうやらその作戦は失敗のようだ。今この場には私と3人のプリキュアがいる。滅亡迅雷・netも君を見限つた。これ以上の戦いは無意味だと思うが」

「本来なら撤退するべきだろうね。けど、ボクにはもう時間がない」

フィーニスが、天津さんに蹴りを放つ。辛うじて防御した天津さん

だが、距離を離されてしまったようだ。

コートを翻し、ベルトを構える天津さん。対するフイーニスも、ローブの内側からドライバーを取り出す。

さつきのゼロワンのものじやない、もつと小さいドライバーだ。

「あれ、迅が使つてたやつと同じ！」

ひなたちやんが叫ぶ。

どうやら、見覚えのあるものらしい。

フイーニスがそれを腰元にあてがうと、ヘビのように長いベルトがガツチリと彼女の腰を押さえ込んだ。

「フォースライザーか……面白い。型落ちした我が社の商品と、ヒーリングツドサウザンドライバー。格の違いを見せてあげよう」

両手にキーを持つ天津社長。

『ゼツメツ！ Evolution！

トライヒーリング！』

両方のキーをサウザンドライバーに装填し、社長はポーズを取る。

「変身」

鋭い声と共に、ベルトのスイッチに入る。彼の周りで、薔薇と水流、そして無数の星達が踊りを始め、サイのような見た目をした獣の周りを取り囲んでゆく。

『パーコエクトライズ！

When the horns and triple head
ling power cross, the golden so
lidier HEALINGOOD THOUSER is bo
rn.

”Presented by ZAIA.”』

読み上げられる口上その後、そこには黄金の騎士、ヒーリングツドサウザーが現れていた。

夜風に臙脂のマントをはためかせ、ひかる紫の双眸で敵を見つめるサウザー。その先のフイーニスもまた、プログラライズキーを取り出していた。

変な手のような形をした、青いキーだ。

それを目にしたイズさんが、少し焦ったように距離を取る。

「どうしたんですか？」

「メタルクラスタじゃない……天津社長、気をつけてください。あのゼツメライズキーは、危険です」

フイーニスの口元が歪み、白い歯が見える。

「ふふ、流石は飛電の秘書、わかってるじゃないか。これは『ビリオンクラススタホッパーゼツメライズキー』。メツビヨーゲンとキュアスパークル、仮面ライダーゼロワン、そして仮面ライダー迅。彼らの戦闘データをラーニングさせ進化させたものだ」

その言葉に、ひなたちゃんが飛び上がる。

「アタシも!? いつデータ取られたの？」

「全てメツビヨーゲンがやつてくれたよ。まあ、彼も用済みになつたから倒してしまつたけどね。そして、今から君たちの力も戴き、ボクは皆既世食を完成させる!!」

「カイキ……セイショク?」

フイーニスはログライズキーをドライバーに装填した。途端、凄まじい量の黒霧がフイーニスの身体から吹き出し始める。

その勢いの凄まじさたるや、耐えていないと吹き飛ばされてしまいそうだ。

『E v e r y b o d y F e a r ……』

氣を失っている刃さんを背負いながら、イズさんが叫ぶ。

『プリキュアの皆様、変身してください。この出力、余波だけでも危険です』

イズさんの言葉通り、私たちはプリキュアに変身した。

それでもなお、霧の勢いは耐え難いものである。安定しない視界の中で、サウザーだけが不動で立っている。

『F O R C E R I Z I N G …… B R E A K D O W N』

やがて、霧は放出するのをやめたかと思うと、全てフイーニスの元へと戻つていった。

霧が晴れた時、そこにいたのは先程までのフイーニスではなかつた。全身をメタリックな青色の鎧に包んだ、ゼロワン。

姿形は、先程サウザーと共に戦っていたゼロワンの姿に似ている。けれど、その禍々しさと威圧感は完全に別格だ。

『仮面ライダーゼロワンビリオンクラスタホツパー』。ボク専用のオーダーメイドだ。君の言葉を借りるなら、桁違いってやつさ

「それは面白い。是非手合わせ願おう！」

仁王立ちする青いゼロワンに、金槍サウザンドジャッカーを片手に飛びかかってゆくサウザー。

月の真ん中が、輪つか状に黒く染まっている。黒い部分は少しずつ大きくなっているようで、まるでブラックホールか何かのようだ。黒く染まっていた夜空が、薄い紫を帯びた夕焼け空へと変わつてゆく。

「あの空、一体、何が起きてるの……？」
ひなたちやんは首を傾げている。ちゅちゃんは……じつと見つめている。どうやら、この現象に心当たりがあるようだ。

尋ねてみると、ちゅちゃんは神妙な面持ちで「月食よ」と答えた。
「……だけど変よ。月食があるなら、もつと大々的にニュースになるはずだわ。それに、空もあんな風に変わつたりはしないはず」「それって、どういう事……？」

ちゅちゃんは黙つてしまつた。

気がつくと、辺りには赤い画面をつけた人々が集まつていた。皆が一様に、青いゼロワンに向けて戦闘の構えをとつていて。

「あの人達……」

「大丈夫、今は味方よ。強さは私が保証するわ」

そう言うちゅちゃんの顔が、なんだか苦々しい。あの人たちと何かあつたんだろうか。

ゼロワンも、それと対峙するサウザーも、構えをとつたまま動かない。互いが動ぐのを待つてているのだ。

蒼いゼロワン、ファイニスは、仮面の奥から笑いを漏らす。

「世界は一つじやない。そう言つたら君たちは信じるかい？」

「何の話だ？」

「ボクのオリジナルは元々、この世界とは違う別の世界の住人だつた。

各世界にはその核となるヒーローの力が存在するんだ。このビリオンクラスターはそれをラーニングする能力を持つていて。もうすぐ、世界と世界による月食……世食が異世界への扉を開く。この世界だけじゃない、もつとたくさんの世界の力を手に入れて、ボクは全てを超える存在になるのさ」

「なに……？」

何を話しているのか全く分からぬ。

分かるのは、あの青いゼロワンがとても無く怖いって事だけだ。

「なんで……？」

「うん？」

「何で、そんな存在になりたいの？私には分からぬ……人を傷つけ
て、みんなを敵に回してまで、どうして強くなりたいの？」

「それがボクの存在意義だからさ。オリジナルのボクは始まりのライ
ダーになろうとした。その意思を継いで作られたボクが彼女を超え
るには、その始まりの力を変える、全ての力を手に入れるしか無いん
だよ！」

「自分が戦う理由も分からぬなんて……空っぽの人」

「うるさいなあ。ここはお姫様の来るところじゃない。君達は白衣で
も着て、お医者さんごっこをしていればいいじゃないか」

あり得ない量の悪意が、風を伴つて私たちに吹きつける。その凄ま
じさに膝をつきそうになる私の肩を、ひなたちゃんが優しく叩いた。
「難しい事は分かんないけど、多分アイツが全部悪いんでしょ？だつ
たら、私達でなんとかすればいいじゃん」

ひなたちゃんの指す先にいるのは、あの青いゼロワンだ。うん、確
かにそうだ。こんなので負けてちゃいけない。

私達が、みんなを守るんだ。

私は拳を硬く結び、両隣の二人を見る。二人とも、決意の瞳をして
いる。私と同じ気持ちだ。

「行こう、みんな！」

「うん！」

「分かった！」

膠着する状況を打破するため、私達3人は飛ぶ。狙うは一人、あの
フイーニスという仮面ライダーだ。

私達の後に続くよう、フイーニスを囲んでいたドードーマギア達
が一斉に襲いかかる。押し寄せる無数の攻撃……それに対し、フイー
ニスは、ゆっくりと、手を月に掲げた。

「ドードーマギアのヒナたち、雑魚をあしらつておいてくれ」

フイーニスの掌が、くるりと甲に翻る。

瞬間、私の視界の中で、突進をしていた赤い仮面の人々が瞬時に動
きを止めた。

直後、それを指揮していたらしい髑髏面の人物が苦しみだす。赤い
仮面の人たちも含めて、その目は紫色に染まっている。

「貴様、一体俺たちに何をした!?」

「君達の頭のツノは、ビヨーゲンズの力……君が裏切る事を、ボクが予
見しなかつたとでも思うかい？」

「……ッ!? ハッキングがその対策か!!」

一旦元の位置に戻り、背を向け合つて警戒する私達。髑髏面の男
は、苦しみながらも赤い仮面の人々の一部を切つて破壊し、道を作つ
た。

髑髏面はイズさんの腕を乱暴に引き、赤面の人々が作る円の外に追
い出す。

「何をするのですか」

「逃げる。俺は、この意思には逆らえん……ゼロワンを呼んでこい。
この状況を打破できるのは、ヤツくらいのものだ」

イズさんは髑髏面の伝えたい事を察したのか、早々に腰を折ると、
氣を失つている刃さんを抱えて輪から離れてゆく。

「承知しました。私は或人社長を迎えに行きます。不破様と或人社長
がいれば、きっと……」

しかし、フイーニスはさらに手を翻した。今まで停止していた赤面
の人物達が、一斉にイズさんの方へと襲いかかる。

「逃しはしないよ。君達は皆、ここでボクに倒されるんだ」

赤面達の刀がイズさんへと振り下ろされる。

その前に、髑髏面の男が立ちはだかつた。

髑髏面の肩から飛び放たれるミサイルが、赤面を吹き飛ばす。

「行け!!」

「……はい」

イズさんは離れていた。

荒れ狂う赤面達をさばきながら、私達はファーニスへと迫る。

ヒーリングツドサウザーとゼロワンビリオンクラスターホッパー。混乱する戦局の中で、二人だけが互いを捉えていた。

「別世界の扉が開く皆既世食の時まであと少し。二つの世界が完全に重なるその時に、4つの光と闇の力を持つボクは、世界の壁を越える。それまでに、君の力だけでも貰っていくよ? サウザー」

「むづむづ渡すと思うか。君にはここで私に倒されてもらおう」満を辞して、二人が動いた。

ぶつかり合う槍と剣。その衝撃波は私達と赤面達を吹き飛ばし、壁に叩きつける。いくつかの赤面が、そのまま動かなくなつた。

「やるね。このビリオンクラスタは4人の戦士の力を合わせたものだというのに」

「君こそ、模造品の分際でこのヒーリングツドサウザーと拮抗することは。身の程を弁えて欲しいものだ!!」

繰り出される斬撃と突撃の応酬。それら全ては拮抗し、生み出される衝撃波がモールの石畳を崩してゆく。

暗闇に染まる空の下で、最後の戦いが始まった。

E p i S o d e 1 1 : 【全ての力】

イズは刃を担ぎながらモール内を逃げ回っていた。彼女を追うは大群をなしたドードーマギアのヒナ達である。どの個体も目を赤く染めており、凄まじい殺気を放っている。

ヒューマギアの彼女ですら、彼等の勢いには恐怖を感じずにはいられない。

(或人社長に無理をさせないために、あのマギアに協力を依頼したのですが。逆効果でした)

心中で後悔しながらも、イズは最速で脚を動かし続ける。私は社長秘書、或人社長と合流するまでは、捕まるわけにはいかないのだ。

そんなことを考えていると、モールの出口が見えてきた。そこには2人の人影……それは、彼女の待ち望んでいた人物であった。

「或人社長!!」

「イズ!! 無事だつたか!! ……って、ちょっと速過ぎでしょおつ!!」

タックルかと見紛うイズの突進を、或人は全身で受け止めた。刃を加えた三人の体は出口付近の壁に激闘し、小さなクレーターを作る。

「い、イズ？俺、怪我人なんだけど」

「これは、失礼しました。しかし、速度を殺すとアレらに追いつかれてしまいますので」

「アレラ……？あー、マギアね。そろそろ、インコみたいな顔したドードーマギア……って、えーっ!?こんなにいんこ!?」

「今のは、インコといんのをかけた、非常に面白いジョークですね」

「いやー、やつぱりイズ分かつてるねえ！」

「もちろん、社長秘書ですから」

「はい、アルトじゃないとつ!!」

ポーズを決める2人の頬の間を、バルカンの放った弾丸が掠める。

弾丸は複数のヒナ達を巻き込み、爆散させた。

「いちゃつくのはそこまでにしろ。状況は変わつてないんだぞ」

不破の一喝に、2人はしゆんと身を縮こませる。

ため息をつきながら、不破はイズが背負っていた刃の頭を叩いた。

パシンといい音が鳴り、彼女の細い身体がピクツと跳ねる。

「お目覚めか？」

「……ッ!? アイツは、メツビヨーゲンはどうなつた!!」

「天津社長によつて倒されました。もつとも、さらなる強敵の出現により、状況は予断を許しませんが」

「なんだと!? それをもつと早く言え!!」

刃は慌ててイズの背中から降りると、ヒナの群れに向けて駆け出した。彼女を迎撃つべく、ヒナ達も横一列に陣を組む。

しかし、ヒナ達の元へ達する前に、刃の身体はぐらりと地面に崩れ落ちた。メツビヨーゲンとの戦いで消耗が、体に襲い掛かつたのだ。

「無茶しやがつて！」

彼女を庇うべく、バルカンがヒナ達の前に躍り出る。半身を切り、防御の構えをとる蒼軀。

しかし、直後ヒナ達の列が崩れた。彼等の背後では巨大な爆発が起きていた。

明らかに、何らかの攻撃によるものだ。

やがて、ヒナ達の群れは散り散りになり、その前に髑髏面の怪人が姿を現した。

それは、4人がよく知る怪人であつた。

「ドードーマギア！」

「祭田ゼット……」

彼の瞳は、緑と赤に交互に点滅していた。その動きは、さながら回線のショートしたロボットのようであり、ヒューマギアが機械である事をその場にいる彼等に再認識させた。

バルカンと刃が銃を構える中、或人だけがその間を抜け、彼へと歩み寄る。

ドードーマギアは、刀刃を手にした右腕をゆっくりと持ち上げ……そのまま、或人の胸の中へと倒れ込んだ。

「約束は、まもつた、ぞ」

彼の背中には、無数の刀刃が突き刺さっていた。凄まじい重量を

持つているはずのその身体を、或人は額に筋を立てながらも抱きとめ続いている。

ドードーマギアは変身を解除すると、ゆっくりと目を閉じた。薄く透けたまぶたの奥の光が、徐々に弱まってゆく。

「叶うなら、お前ともう一度、闘いたか、つ、た」

やがて祭田ゼット4号は、機能を停止した。

或人はゆっくりとその身体を地面に下ろし、背中の刃を一本ずつ丁寧に抜いてゆく。

周囲のヒナたちも、頭を抱えて苦しんでおり、最早戦意は感じられない。

「ゴメンな、2度も守つてやれなくて」

まだ薄らと熱を持つたドードーマギアの胸に手を当て、或人は悔しげに目を閉じるのだった、

衝撃波の波を抜け、私はなんとか天津さんの近くまでたどり着いた。あと少しくらいで、攻撃が届く範囲までたどり着ける。

しかし、踏み出しかけたその一步は、フォンテームよつて止められた。

「早く天津社長を助けに行かないと！」

「無理よ」

「でも!?」

猶も前に出ようとする私を、今度はひなたちやんが止める。その表情は真剣そのものだ。その上で、とても悔しそうだった。

「のどかっちは分かるでしょ。正直、アレは私達が入つていけるレベルじゃないよ。私達が入つていって、人質にでもなつたら、あの社長さんに迷惑かけちやうじやん」

「ひなたちやん……」

確かにそうなのだ。

触れるだけでも切れてしまいそうな衝撃波の雨、攻撃の余波だけで

ここまで辛いのに、私達が実際にあの攻撃を受けて仕舞えば、それこそひとたまりもないだろう。

きっと、天津さんも分かつているのだ。だからこそ、ゼロワンから逃げない。私達を背に、一步も引かずに戦っているのだ。

だけど悔しい……悔しいよ。

涙を流す私の横で、ひなたちゃんがポンと手を打つ。

「でも、今、作戦思いついた！私達の必殺技を、一つに合わせるんだよ。そうすれば、きっと、勝てるはず！」

いいアイデアだ。

ダメで元々、でも、何もせずにいるられない。

今、目の前で戦ってくれている天津さん。あの人に全部を任せて、わたしだけ見ているなんてできない。

凄まじい衝撃波の雨嵐に耐えながら、私はヒーリングステッキの肉球を3回叩く。ひなたちゃんとちゅちゃんも同じだ。

「プリキュアの力を一つに合わせて！」

「うん」

「りょーかい」

混ざり合う三つの色が溶け合い、やがて虹色の靈光へと変化していく。眩いばかりの靈光は、弓の形を取り、私の手元へと収まった。弦に手をかける……けれど、弦は硬く引き絞れない。矢の照準も、ブレて定まらない。

こんなところでも、私は……

俯きかける私の横で、ちゅちゃんがそつと弓の下を支えた。弦を持つ指に、ひなたちゃんの手が重なる。

「私が支える！」

「で、私が手伝う！」

揺れていた照準はピタリと定まり、弦は驚くほど簡単に引けた。私人ではできなくても、みんなとならやれる。

「ありがとう……いくよ！」

狙いは一つ、一発逆転。

願いを込めて、私は弦から手を離す。

「「「プリキュア・ヒーリングアロー」」

轟音が耳を劈き、私の世界から音が消えた。

放たれた光の矢は、ゼロワンの胸に突き刺さり、その青い身体を壁の端まで吹き飛ばした。

彼女が持っていたであろういくつものプログラマーズキーが地面に散らばる。その中には、ゼロワンドライバーも混じっていた。

「やった……の？」

疲労に歪む視界で、どうにか目の前の景色をとらえる。モールを覆う爆煙の向こう、ファイニースはまだ、立っていた。

よろけながらも壁から這い出してくるその姿に、私の心はズンと重くなる。

「……ッ!!! やるじゃないか。このボクに、ここまで、ダメージを与える、なんて」

青いゼロワンの胸からは煙が立ち上がっている。矢は確かに、ファイニースの胸に当たったはずだ。

それで倒しきれないという事は、もう……

「ダメ……なの?」

辛うじて身体を支えていた脚から、力が抜ける。こちらに近づいてくるファイニースの進路を塞ぐよう、天津さんが私の前に立ってくれる。

これじゃ、何も変わらない。

何もできない私、守られてばかりの私。

そんなの、嫌だ。

「わああああっ!!

私は自分を奮い立たせると、震える脚を無理やり動かして走った。狙いは、ゼロワンが落としたゼロワンドライバー。

「のどか!?

ラビリンの声も聞かず、私は駆けた。

「ふふ、それで何をしようというのかな?」

ファイニースは、このドライバーを使って変身していた。あの銀色の仮面ライダーは強かつた。

(これを使えば、私も仮面ライダーに……)

しかし、お腹にそれを押し当ても、ドライバーはうんともすんとも言わない。焦る私に、ファイニースが手の先を向ける。

黒い光の塊が、私の眼前で膨張してゆく。

「残念だったね。それには認証のロックがかかっている。ボクも解錠には苦労したんだよ」

「変身、出来ないって、こと……？」

「その通り。もう抗うのは辛いだろう？ 倒してあげるよ」

闇の塊が、私に向かつて放たれた。もう避ける足の力は残っていない。

私は思わず目を閉じる。訪れる暗闇と静寂の中で、悔しさだけが膨らんでゆく。

しかし、いつまで待つても衝撃は来ない。

震える私の手の中から、ドライバーが取られようとする。ダメだ、離してなるものか。

力一杯それを抱きしめていると、ふと肩に温かな感触あつた。

「……え？」

薄く目を開くと、そこにいたのは或人さんだつた。その向こうでは、青い仮面ライダーさんとオレンジの仮面ライダー……バルキリーが、ファイニースと戦つている。

「ひでん、あると、さん？ 本物？」

「正真正銘、証明写真も本物の飛電或人です！ はい、アルトじやくないとつ！」

背後ではイズさんが決めポーズを取つてゐる。向こうではひなたちやんも同じようにポーズを取つてゐた。ファンなのだろうか。二人の笑顔は、もはや疑いようもなく、私のよく知る優しい人達の顔だつた。

私は迷いなく彼にゼロワンドライバーを渡した。

「俺のベルト取り返してくれて、ありがとうな」

或人さんは優しく微笑むと、お腹にドライバーを押し当てた。

『ゼロワンドライバー！』

軽快な音と共にベルトが射出され、ドライバーは或人さんの腰に固定される。その手には、黄色のプログライズキーが握られていた。

「変身？させないよ！」

青いゼロワンの手から、闇の塊が放たれる。塊は或人さんを包み込むように広がり、瞬く間に全てを覆い尽くした。

バルキリーをパンチで吹き飛ばし、青いゼロワンは声を上げて笑つてみせる。

「あはは、これでゼロワンも終わりだ！」

続け様に放たれる闇の塊を、サウザーが全身で食い止める。着弾箇所から火花が上がるが、サウザーは即座に持ち直し再び槍を構え直す。

3人の仮面ライダーを前に、不敵に構えてみせる青いゼロワン。しかし瞬間、背後で巨大な闇の球が弾けた。

「変身！」

『飛び上がライズ！ライジングホッパー！』

A j u m p t o t h e s k y t u r n s t o a
r i d e r k i c k .』

青いゼロワンが振り向くと、そこには闇夜にひかるクリアアイエローの鎧を見に纏つた或人さん……仮面ライダーゼロワンの姿があつた。呆然とする私の前に、輝く手が差し出された。

「一緒に戦おう、キュアグレース」

「はい……はい!!」

私はその手を取つた。

その手の何と力強い事。全身の光からそのまま元気が流れ込んでくるようで、私はすんなりと立ち上がることができた。

夜を切り裂く剣を手に、ゼロワンは挑発的に腰を低く低く構えてみせる。

「ここから、形成逆転です!!」

「仮面ライダーとプリキュアの力、見せてやろうぜ！」

ゼロワンの突進を皮切りに、3人の仮面ライダーの攻撃がファイ一二スを攻めた。

対するフイーニスは全身に闇の霧を纏わせて防御する。アレは、メツビヨーゲンの技だ。

「忘れてはいないかい？ボクはビヨーゲンズの力も使えるんだ、數なんて関係無い！」

闇の霧を切り裂き、ゼロワンは青いゼロワンに斬撃を与えてゆく。青いゼロワンも懐から銀の剣を取り出し、それに応戦する。

そんな中、闇の霧を突つ切つて二人の元に突進する黄金の騎士の姿があつた。

「バカだね。その霧は高密度に圧縮された腐食ウイルスそのもの、いくら君の力でも、おいそれと消せるものではない」

視線を切り、ゼロワンと剣を結ぶフイーニス。しかし直後、黄金の突槍による一撃が彼女の脇腹を貫いた。

「なッ！」

「回復しながらでも動けるのがヒーリングツドサウザード。そして、こんな事もできる」

サウザードは自分のドライバーからローゼンリングのキーを抜き取ると、サウザンドジャッカーのスロットに装填した。

槍の穂先は薔薇色に染まり、そこから放たれる光線が青いゼロワンを吹き飛ばす。

「アレって、私のヒーリングフラワー!?」

「ツ?!」

ヒーリングフラワーが霧を払い、青い仮面ライダーさんとバルキリーの射線が開ける。

二人は示し合させたように頷くと、フイーニスに向けてありつたけ銃撃した。

凄まじい量の火花が青の鎧から吹き上がり、フイーニスはその場に膝をつく。

「ツ?!かくなる上は！」

ドライバーの手の部分のスイッチを2度押すと、フイーニスは空へと飛び上がった。その背にはピンクの翼が生えそろつている。

フイーニスは上空で翼をはためかせると、その一部を地面にいるゼ

ロワン達に射出した。

羽弾は複雑な軌道を描き、地上の仮面ライダー達の身体をえぐる。

「どうだ、ついてこれないだろう!!」

せせら笑うフイーニス。そのこめかみに、私は渾身の蹴りをたたき込んだ。

重い鐘を鳴らしたような響きが脚から全身に伝わってくる。けれど、私は攻撃をやめない。

「空中戦なら、私達だつて！」

「君達プリキュアでは、ボクは倒せないよ」

羽弾に弾き飛ばされ、距離が取られる。しかし、間髪入れずにフォンテームの水流がフイーニスの体制を崩した。

「たとえ力負けしているとしても、あなたがビヨーゲンズである限りは、癒しの力は通じるはず!!」

「小癩な……小娘風情が!!」

「仲間を利用するだけ利用して、人の力を奪つて。そんなの、絶対に許せないじやん!!」

夜空を逃げるフイーニスの青躯に、スパークルの爪の一撃が叩き込まれる。完全に制御を失った彼女の身体は、轟音と土煙を立ててモールの地面へと落下した。

「な、何故、何故ここまで違う！スペックならボクが圧倒しているはずなのに！」

這い出してくるフイーニスを、サウザーがさらに追撃する。止む事のない槍の連撃に、後方からの銃撃が加わる。

「くそっ!!」

「君は仲間というものを甘く見過ぎた。1人では1000%の力でも、2人3人と手を取り合えば、その力を無限に高め合うことができる。花寺のどかとその仲間達の戦いが、私にそれを教えてくれた」「なかま、なんてつ!!」

前方に銀色の盾を展開するフイーニス。

しかし、サウザーの肩を踏み台にしたゼロワンが、その盾を超えて、彼女の背後を取る。

「仲間がいるから、俺達はここまでやつてこれた！」

手に持ったアタッシュカーリバーの刀身が金色に光り、フイーニスの脇腹を切り裂いた。

【ライジングカバンストラッショ】

「ツ!?

その一撃により、前方の盾の制御が失われる。浮き出る文字を待つ事なく、バルカンとバルキリーの凄まじい銃撃が、フイーニスの胸に直撃した。

【ランペイジ・オール・ブラスト】

【ダッショウラッシングブラスト】

青鎧の悪魔はモールの壁端まで吹き飛び、その身体をぐつたりと頃垂れさせる。

今度は、私達の番だ。

2人も分かつていてるのか、ヒーリングステッキに備え付けられた心の肉球を3回タッチしてみせる。

「行くよ!!プリキュア・ヒーリングフラワー!」

「ヒーリングストリーム!」

「ヒーリングフラッシュ!」

3つの光線は束になり、大きな一つの閃となつてフイーニスの身体を貫いた。光は優しく彼女を持ち上げ、その体の自由を奪う。

「まだだ、ボクはまだ、負けてない！」

「さあ、トドメだ」

満を辞してとばかりに、サウザーがベルトのスイッチを入れる。金色に光る脚を夜に晒し、臍脂のマントを翻し、サウザーは光る爪先をフイーニスの身体にたたき込んだ。

轟音と光の渦がモールを埋め尽くし、その身体を包み込んでゆく。

【サウザンド・デストラクション　?・Z A I A】

「ぐ、う、う」

フイーニスは2、3歩よろよろと前に歩み、そのまま前のめりに倒れた。凄まじい爆発がモールを揺らし、私は思わず顔を覆う。

爆発の煙が晴れた時、そこには全身からショートの火花もを上げる

その姿があった。

青いゼロワンの鎧はほぼ原型を止めておらず、マスクは右目のあたりを残して全て壊れてしまっている。

明らかに決着。

しかし、それでもフイーニスの口元は歪む。

「このビリオンクラスターの能力は学習能力だと言つたよね」

「何が言いたい？」

訝しむサウザーの眼前で、青いゼロワンの鎧が瞬く間に再生していく。

慌ててヒーリングステッキを構える私の前に、フイーニスは闇の球を放つた。先ほどよりも格段に小さいが、その爆発のせいで近づけない。

「君のヒーリングツドサウザーの力もラーニングさせてもらつたからね。ボクは回復できる……最後に笑うのは、このボクだ」

やがて、完全に再生した青いゼロワンの鎧を身に纏い、フイーニスは再び私達に銀の剣を向けた。

全員がたじろぐ中、サウザーだけが臆する事なく彼女との距離を詰めてゆく。

「それは、どうかな？」

銀の剣を構え、突進するフイーニス。サウザーを貫かんばかりの勢いだ。

「ふふ、まずは1人……」

しかし、剣は衝突の瞬間、無数のバッタになつて夜の闇に消えていった。優雅に歩みを進めるサウザーの前で、フイーニスの変身が解除される。彼女は明らかに狼狽していた。

「な……ッ!? ど、どうして!?」

「君のその力はビヨーゲンの力でもあるんだろう？ 病気を治してしまつたら、もう変身できないじゃないか」

「そんな……ッ!!」

フイーニスの肩に手を置き、変身を解除した天津さんは天を仰いでみせる。そこでは、暗く歪んだ巨大な円が光り輝いていた。

「頼みの皆既世食が起きているようだが、ただのヒューマギアになつた君に出来る」とはあるかな?」

「お前……ッ!!」

ファイニースの拳が天津さんのお腹に当たる。しかし、天津さんは微動だにしない。

「お大事に。ただのヒューマギア君」

背を向ける天津さん。襲い掛からうとしたファイニースを、刃さんが取り押さえる。

こうして、長きに渡る私達の戦いは終わつた。

2週間後、私は天津さんの元を訪れていた。

待ち合わせ場所は、最初に私たちが出会つたあの公園。昼間の日差しが肌を焼き、汗が溢れる。

小山を登り切ると、そこにあの人はいた。

街を一望できる丘の一角。そのベンチに座る彼の姿が、かつての私と重なる。

と、見惚れている場合じやない。

時計を見ると、時間はギリギリだ。

「待たせちゃつてごめんなさい!」

私は急いでそう挨拶すると、社長の隣に腰を下ろした。まだ少しだけ息が荒い。

社長は「焦らなくていいさ」と笑っていた。私は少しだけ恥ずかしくなつて、早く息を整えようと呼吸を止める。

やがて、呼吸が落ち着き、小山から見下ろす山の景色にも慣れてきた頃、社長が口を開いた。

「もう、2週間か」

「はい。本当、嘘みたいですよね」

「ああ。だが、本当の事だ。」

天津さんは少しの間口を閉じ、どこか遠くを見ていた。

あの戦いの後、Z A I A エンタープライズは大きな変化を遂げた。

今まで行つてきた兵器開発の実態を明かし、それらをビヨーゲンズとの戦いのために活かしてゆく事を天津さん自身が発表したのだ。

当然、ニュースでは連日連夜その報道が飛び交い、私は天津さんにお礼を言う事もできなかつた。

否定的な声が多く、兵器の開発など人道にもとる、Z A I A の技術は国の管理下に置かれるべきだという意見も多かつた。けれど、天津さんはそれに負ける事なく、断固として自身の技術を国には明かさなかつた。

飛電或は人さんもそれへの協力を表明し、一人の協力体制の下、ビヨーゲンズ根絶の姿勢が今も取られている。

世界は変わつた。

ヒューマギアと人間が手を取り合い、同じ敵に立ち向かう世界に。やがて、天津さんはまた話し始めた。

「メツビヨーゲン……いや、滅病 源と呼ぶべきか。彼が自白したよ。数年前から密林でエレメントさんを狩り続けていた事、ダルイゼンというビヨーゲンズの指示で、これから人間を襲うつもりだつた事も」あの恐ろしい姿を思い出し、私は身震いする。

彼から伝わつてきた、人への憎しみと惡意。

天津さんがいなければ、私は今頃どうなつていたか分からない。

「フイーニスに、メツビヨーゲン。末恐ろしい敵だつたが、君と力を合わせることで、倒す事ができた」

天津さんの顔は、少し瘦せたように見えた。それほど、すり減らしている神経が凄いのだろう。

ヒーリングツドサウザーの力は、私達プリキュアの持つ治癒の力を使つていると聞いた。過回復が人体に及ぼす影響は凄まじい。

それに耐えながら、天津さんはあの時戦つてくれたんだ。

「君には、すまない事をしたと思つていてる」

天津さんの発言には正直、驚いた。

なぜ謝るのかは分からぬにしても、この人に謝るという印象は無かつたから。

黙っている私に、彼は続ける。

「君を、滅亡迅雷・netとの戦いに巻き込んだのは紛れもなく私だ」「それはお互い様じゃないですか。それに、天津さんがいなかつたら、私、どうなつてたか分からないですから」

社長は少し口ごもつたが、すぐに続けた。

「平光 ひなたから聞かせてもらつたよ。君がザイアスペックを彼女に託した事」

「あ……つ」

心臓が、ドクンと跳ね上がる。

忘れていたわけじゃない。アレをひなたちやんに預けたあと、私の中には確かな安息と、申し訳なさがあった。

けれど、後悔が無かつたわけじゃない。私を信じてザイアスペックを預けてくれた天津さん。その意思を踏みにじつた事になるんだから。

天津さんは続ける。

「君がした選択に、私が正誤を断ずる事はできない。だが、君は1人で楽な道を行くより、仲間と苦難の道を歩む事を選んだ」

「……はい。あのザイアスペックを使つている間、私はずっと1人でした。寂しくて、辛くて……それにも気がつけないくらい、頑張りました」

天津さんは笑い嘲りもせず、私の話を聞いてくれる。その瞳の重さに耐えながら、私はそれでも、続ける。

「けど、ひなたちやんに教えてもらつて、辛かつたら頼つていい友達がいる事に気がついたんです。私は、私を助けてくれるみんなのために強くなりたい。そう思えたんです」

「それが、君の答えか」

「はい」

私は天津さんの瞳にしつかりと向かい合う。少しも逸らさない、これが私の思いだから。

やがて、天津さんは頬の硬直を緩めた。

その優しい顔に、私も少しだけ安心する。

「君は、強くなつたな。出会つた頃の、すべてに振り回されていた君とは大違ひだ」

大人っぽく笑つてみせる天津さん。

普通は怒るところなのだろうが、なぜか私もおかしくなつてきて。

私達は、声を上げて笑つてしまつた。

「天津さんこそ。最初に会つた時より、怖くなくなりました。優しくなつたつていうか、刺々しさが無くなつたというか」

「私は、そんなに怖かつたかい？」

「はい。けど、今は私達の未来のために、戦つてくれる。正義のヒーローです」

私の言葉に、天津さんは少し、笑うのをやめた。その手には、プログライズキーがある。ヒーリングツドサウザーに変身するのに使つていた、薔薇の記されたキーだ。

「これが、私を正してくれた。君からもらつた癒しの力だ。もしかすると、この力が私に優しさをくれたのかも知れない」

「だとしたら、なんだか素敵ですね。私は天津さんから強さをもらつて、天津さんは私がから優しさをもらう」

「ああ。奇妙な巡り合わせだ」

「もしかすると、君がいなければ私の辿つていた未来は違つたのかもしれないな。仲間を道具として扱い、眼前には敵しかいない、暗い未来を進んでいたかも知れない」

「今の天津さんからは想像もつきませんけどね」

「まつたくだ」

私達はまた、しばらく笑つていた。

私はこの数週間の出来事を決して忘れる事は無いだろう。私に力をくれて、仲間の大切さを気づかせてくれたこの日々を。

そして、私を守つてくれた黄金の騎士の事を。